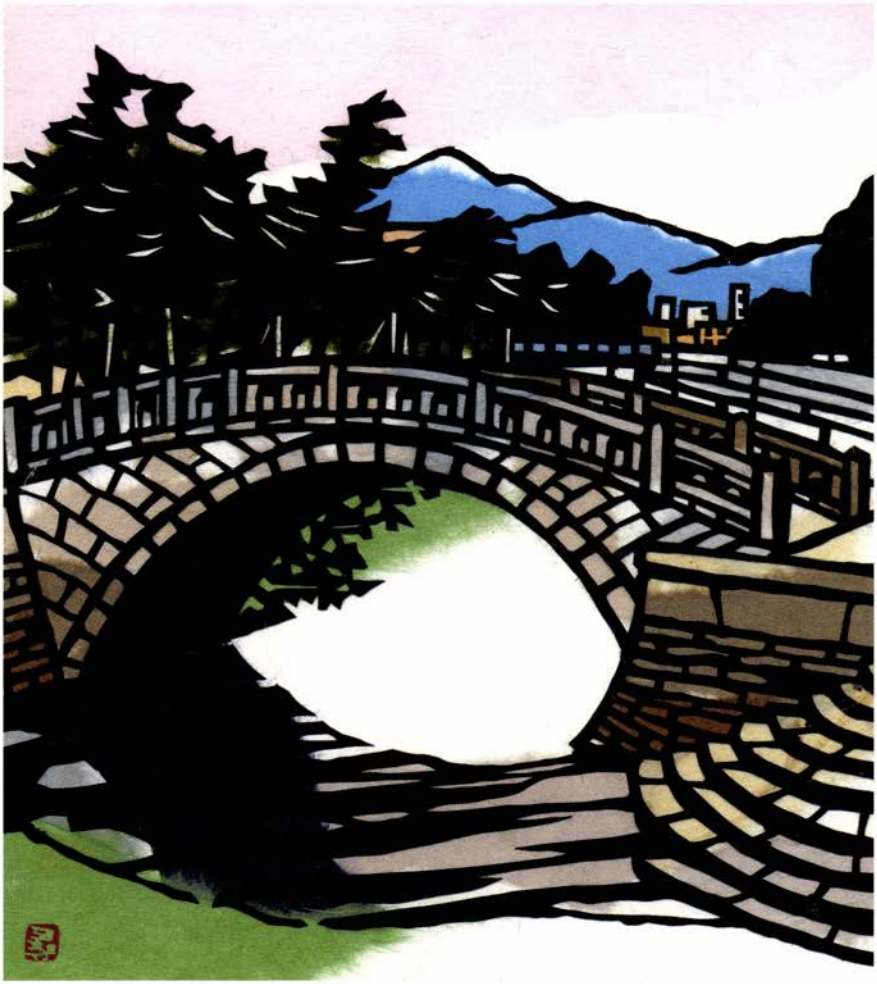
川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十一年三月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻九八二号



日川協加盟

No. 982

三月号

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー

コーキ封筒株式会社

本　　社　富田林市若松町東３丁目７番８号　〒584-0023
TEL 0721-25-7210　FAX 0721-25-9484
東京営業所　東京都中央区日本橋本石町４丁目５番８号　〒103-0021
（日本橋川村ビル４F）
TEL 03-5255-5158　FAX 03-5255-5159
http://www.koki-envelope.com

お願い

川柳塔社では２０１０年10月に『川柳雑誌』『川柳塔』通巻１０００号記念大会開催に当り『麻生路郎読本』（仮題）の出版を予定しています。

麻生路郎に関する**書簡・写真**或いはどんな些細な情報でもお持ちの方は川柳塔事務所までご連絡下さいますようお願い致します。

川柳塔社
（０６－６７７９－３４９０）

奇跡の星 地球

河内天笑

昭和20年6月30日午前3時、前夜より準備していた脱走計画を実行する時間だ。二足つくった草鞋の一足を腰に下げて窓からとび降り門屋横の牛に別れを告げて花屋さんの屋敷を抜け出した。4月のはじめ新学期に合わせて連れられた時は南南東の方向へリヤカーと歩いて約3時間かかったので北北西へ歩けばどうにかなるという算段だ。村の地蔵さんを右へ曲がれば北に向く。村はずれからは田圃や畑ばっかりとは知っていたが、なにしろ真っ暗の中を小走りで何回も道を確かめに行ったり来たり。4時半頃だろうか、いちど遠足で来た仁徳御陵の森がぼんやり見えて「ふーっ」と大きな息をした。そこからは口笛吹いたりしながら6時前に家に着いて大声で泣いた。縁故疎開の花屋のおっちゃんが血相を変えて9時ごろ「ケンチャンイテマヘン」と現われた。その9日のち家は空襲で焼かれた。

ところで「奇跡の星地球」がもし、もう少しでも小さければ水や空気をたくわえる、つまり地球に引きつけておく力（引力）が低下していて生物が生まれていない。また少しでも大きければ強い引力で隕石の落下が烈しいだろうし、ニアミスですまなくなっているかも知れない。また太陽との距離にも恵まれている。地球との約1億5千万キロの2％でも近かったり、遠くであったりすれば「ひねもすのたりのたりかな」などと言うて居れないだろう。大きさと言い、距離と言い、実に奇跡的なバランスに恵まれた星にわれわれは生かされているのだ。

小三の夏、9歳年上の兄が四つ橋の電気科学館へ星を見につれて行ってくれたのがきっかけで、月、星、太陽、雲などの自然現象に強く惹かれるようになり、当時は手を伸ばせば掴めそうな満天の星を飽かず眺めたものだ。縁故疎開に連れられるリヤカーの後ろを押しながら今は南に向かっている。ちょっと東に向かったなどと感じながら歩いていたのが図らずも脱走の成功につながったのかも知れない。

一族の顔を見渡すにらみ鯛　天笑
気分屋の夫で手綱とり易い　〃
自分は変われる 他人は変えられぬ　〃
ロボットも手持無沙汰になる不況　〃
靴躾せても批判躾せず　〃

お詫び

2月号巻頭言の下段4行目の句「祝祭日驚くほどに腹が減り」は誤りで正しくは「祝祭日驚くほどに旗が減り」でした。お詫びして訂正させていただきます。

座右の句
遠き人を北斗の杓で掬わんか　（薫風）
私の句
夕焼けの浜辺詩人になれる彩　撰　喜子

川柳塔　三月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「新和歌浦・不老橋」

■巻頭言　奇跡の星　地球……河内天笑…(1)
あれから……板尾岳人…(2)
川柳塔（同人吟）……河内天笑選…(4)
川柳塔の川柳讃歌(51)……木津川　計…(47)
自選集……(48)
温故知新……(51)
水煙抄……小島蘭幸選…(52)
愛染帖……新家完司選…(72)
麻生路郎句抄……(76)
檸檬抄「刻　む」……高瀬霜石・木本朱夏共選…(77)
誹風柳多留一一篇研究　43……(80)

あれから

板尾岳人

妻の実家（昭和町）近くの王子商店街を抜け、菊沢金網店（小松園先生宅、同人久保田千代さんの実家）の前を通り過ぎて播磨町を抜け万代池辺りの路郎宅へ新春号392号を一冊。

大阪市住吉局区内万代西5丁目25番地、発行人、麻生幸二郎、定価70円（送料4円）とある。34年11月不朽洞会、理事会総会の路郎主幹の講話が記載。

「サラリーマンがお百姓の糞のようなものをつけていると一目で判るようでは駄目で、他の文芸の真似ごとではなく、同化してわが物にしてしまわなければならない。」と一同へ川柳精進への真摯な情熱を促がされ、自身の心外、心の内を通じて些細なことをも見逃さぬ態度を常に持つべきであると結ばれた。

12月忘年句会、会場観光ホテル

相談をされて相談しに行けず　凡吉
早足で歩かにゃ暮れの気分出ず　凡吉

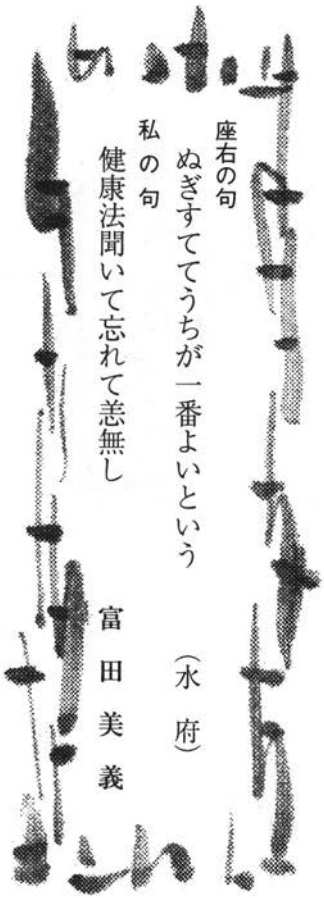
右記2句は僕の初出席で初入選

393号　2月号に新年句会

兼題「口八丁」　麻生路郎選

口八丁同士で意見衝突し　凡吉
し止めながら抜けていた。当日の選者、栞、好郎、水客、豆秋、竹荘、七面山、以上各先

「揺れる」……武田帆雀選…(82)
一路集「内　緒」……寺川弘一選…(82)
「　熱　」……清原悦子選…(83)
初歩教室「移　る」……鈴木公弘…(84)
秀句鑑賞「同人吟……夏目一粋…(86)
秀句鑑賞「水煙抄……吉岡　修…(88)
■エッセー　BUS　STOP……池　森子…(89)
■句集紹介『独標』早川遡行著……金子美千代…(90)
追悼　濱野奇童氏……新家完司…(91)
追悼　小林トメ子さん……(92)
二月本社句会……(94)
各地柳壇（佳句地十選／渡辺富子）……(98)
柳界展望……(115)
三月各地句会案内……(116)
■編集後記（ひとこと／荻野像山）……希久子・光久・尚士…(118)



座右の句
ぬぎすててうちが一番よいという　（水　府）
私の句
健康法聞いて忘れて恙無し　富田美義

生の選に入選ならず。以後度々本社句会に出席して今にして思えばなつかしい先輩の面々を想い出す。25年本社句会全出席した記憶が蘇る。S19年5月空襲により瓦礫となった天王寺区清水谷西之町が僕の生誕の地である。

少年時代、どんどろ大師、三光神社、陸軍墓地、真田山公園が遊びの圏内で、ふる里と呼べる土地である。そんな関係で空堀町に住んでおられた西出一栄先生（楓楽理事長の義母）に声を掛けて頂き度々富柳会句報を持参して、句集『ねっくれす』を頂戴した。黄泉に旅立たれて今年2月で30年、77歳の喜寿であり僕も喜寿を迎えた。

S44年1月20日八尾「菜の花」句会の創立に参加、薫風選「美人」で

奥さんが美人で主人覚えられ　岳人

右句を褒めて頂き編集部に入れとすすめられ、発送、柳界展望、各地柳壇を担当させて頂き、燃え上がる熱情でなく、静かに燃えてかつ燃え尽きない川柳を味わうようになった。

古川柳時代から、個性発見の近代川柳も左記の作者から得た気がする。

けものへん恋うつくしきものならん　中尾漢介
鶴を折るひとりひとりを処刑する　墨作二郎
惨殺平野に人は依然と種を蒔く　寺尾俊平
雪に雪降るいっぴきの恥の上　時実新子
建国祭　寒の卵に血がまじり　橘高薫風

川柳塔

河内天笑選

あやふやな予防注射を打っておく
河馬を見に行くのは風狂の詩人
厄除祈願十九歳はもう遅い
中だるみする小説を読みとばす
おでんぐつぐつ冬の応援歌をうたう
金星を前座に華麗冬の天

京都市　高島啓子

バカヤローと何時言うのです麻生さん
悪いことせんのに犬に吠えられる
重箱の隅をつつくも面白い
くだを巻くほどに飲みたし雪三日
ある日ふと与作が思うお米の値
よく見れば牛は優しい目をしてる

大洲市　中居善信

店番は客がしているなんでも屋
支持率へ総理は我慢強い人
大根の葉と皮浅漬けが美味い

和歌山市　古久保和子

ピカピカに磨くお肌も鍋底も
クシャクシャのハンカチを持つ幼児性
春物を選るうきうきとするこころ

シドニー　坂上のり子

経営破綻重い伝統根こそぎに
ホームレスのニュース世界へ筒抜けだ
給付金ごちゃごちゃ言わず出たシドニー
じゃれてみて爪のパンチを返される
猫はいい泥臭い愛引きずらぬ
失礼だから埃も飲んでしまった茶

松山市　髙橋宏臣

襟足をすっきりさせて去る暦
闘魂を滲ませておく土ふまず
言い負けて出れば三日月刃物めき
舌先三寸で切られる葦である
背信の風やり過ごす後ろ髪
シャワー全開一人になっていく時間

京都市　桝本宏子

途中から欲の芽が出る稽古事
コップから溢れた水がしゃべり出す
老人を消すことばかり政治劇
お悔みに美しすぎる赤い爪
煩悩にまず背骨から喝入れる
解散後本音とび出るビアグラス

吹田市　穴吹尚士

世の中をわやくちゃにしてブッシュ去る
明日からは来なくて良いと軽く言う
支持率がまた下を向く冬の陣
コーヒーの香にジョギングの回れ右
仏さまになる途中ですまだら惚け
言い過ぎて妻はそっぽを向いたまま

八尾市　宮崎シマ子

ある日夫をショートステイに送り出す
二日めは夫のふとん干してあげ
三日めは姉を誘って寿司食べに
四日めは骨休め口あけて昼寝
五日めはイケメンの出る映画みる
六日めは夫にこにこ帰って来

西宮市　西口いわゑ

ふるさとの山はわたしの泉です
なおざりに生きても影はついてくる
山茶花のほほえむ中を散歩する
おしゃれしてシャキッと元気取りもどす
元気だと自分自身に言い聞かす
鏡よ鏡たまに騙してくれないか

神戸市　両川無限

一本の串が図星を突いてくる
波風が立つ遺言は残さない
少年を諭して行った千の風
腕一本もう学歴に頼らない
筋書きにないライバルのかくし球
笑顔しか見せない人が恐くなる

弘前市　高橋岳水

塩水選軽い男が浮き上がる
自らを許してしまう悪い癖
ロボットにだけは看取られたくはない
アナログの針が命を刻む音
うす味に馴らされてゆく老いの舌
表札に別姓らしい夫婦の名

鳥取市　近藤佳子

また今年仲よくしてね福の神
気楽に暮らせて生涯かすみ草
面白いお話提げてまた来てね
歯をみせて笑い転げてくれる友
目の前の米寿がおいでおいでする
もういくつ寝て待つ春の梅さくら

吹田市　山本希久子

つっかい棒の母を奪ったつむじ風
百歳の峠立ちはだかった雲
寒風へ岸をへだてて舟が出る
風のページに母の残像ばかり
助走路は明日へ続くまだ続く
それからを語れば見える薄明かり

鳥取県　佐伯やえ

この寒波テントぐらしの人思う
蘖に花芽生きるはずみをまたもらう
家計簿がつかれましたと赤い顔
少しホラ吹いて不景気切り抜ける
自由は宝　自由にはける靴がある
おはなしがいっぱいたまる雪だるま

橿原市　居谷真理子

カタカナで言うたらカッコイイ仕事
伏せの日も心は旗を立てている
晴れたなら逢わなきゃ雨はなおのこと
くだけちってあなたに刺さりたいガラス
老獪に時々正直者になる
人生の美味に死という隠し味

堺市　荻野像山

リストラの皺寄せに泣く臨時工
もうあかんような顔して女好き
風呂上り亭主あきれる胴回り
よく回る口だ当分大丈夫
後家さんになって元気も艶も出し
辛抱して仲直りするのも夫婦

三田市　堀正和

ロボットのせいで人員過剰です
考える振りして流れ読んでいる
振り逃げも暴投もあり定年日
損得を言うから男軽くなる
二番打者ときに夢みるホームラン
即答を避けては春を待っている

堺市　大久保のん子

人の世にまさかの坂が多すぎる
まごころがきっと最後にものを言う
自転する地球も深く病んでいる
好奇心キラキラさせて夢を追う
スタミナをラストチャンスへ溜めておく
草原を絵にする牛の面構え

寝屋川市　冨山ルイ子

クローン牛自然の摂理破るのか
厳寒をどうすごしたか派遣村
春よ来い派遣村にもテントにも
国憂う態度が見えぬ議員達
国民のための政治を待ち望む
コーナーが好き早くから場所を取る

鳥取市　植田一京

想像も夢ふくらますのも自由
万札が未練残して出ていった
ほどほどと言うのがとても難しい
嘘一つ入れて一息ついてみる
毒舌が君の個性になってきた
今日生きるページしっかり書き入れる

砂川市　大橋政良

おもちゃ箱思い出ばかりあり過ぎる
鉛筆の芯太くして夢を描く
日めくりをめくる一枚ずつ老いる
ぶっつりと切られて過去の人になる
離れないものの一つに欲がある
この皺を語れば長い物語

大和郡山市　坊農柳弘

愛は未だ言葉にならぬ早春譜
猫柳春へゆっくり背伸びする
三寒四温春の誘いへ修二会の火
もう少し時を下さい彼岸花
香焚いて待つ人が居る春の宵
含み笑い緋寒桜にある誘い

犬山市　金子美千代

独り居へ慣れねばならぬ闇の音
寺の鐘一打百円也とあり
気持ちよく御節減ってく子の帰省
頼もしく子らの気遣い受けておく
肥ったら消えるだろうか顔の皺
同情をされたらよけい沈みそう

米子市　政岡日枝子

初詣で神はこちらを向かなんだ
黒豆ほっこり今年の運を賭けて煮る
なつかしい気分チャンづけで呼んだ
大声で歌うと毒も散るだろう
寝相などどうでもいいと誘眠剤
五寸ほど窓があいてる元気らしい

大阪市　谷口義

ご機嫌は如何と春がやって来る
親切な人と一緒に立っている
陰干しにしているうちに忘れられ
必要なだけの知恵なら湧いてくる
いつまでも腹を立ててる暇はない
護身術習った事もありました

鳥取県　石谷美恵子

どの花の中で休もうロスタイム
子を産んだ力が芯にまだ残る
抱く女性も抱かれる猫も超メタボ
火遊びにピリオドやっと巣に戻る
目いっぱい化けてルンルン今朝の妻
変だなああれだけ泣いたのに痩せぬ

鳥取市　奥谷彩子

人生パズル解く楽しみのある余生
つっ込みとボケを地で行く二人です
うれしいジョークほっこり心温めて
輝いた過去は語らぬ第二幕
なんだ坂こんな坂喜寿の軽い靴
蒼天に夢詰め飛ばすゴム風船

鳥取市　中宇地秀四

幸せの種を暮しの中に播く
晴れた空この世こんなに素晴しい
深呼吸愚痴と希望を入れ替える
自分史の余白に疼く恋を秘め
手料理に真心そえておもてなし
生きるためプライド捨てたカスミ草

大阪市　池上清治

確率を信じジャンボに手を出さず
子の年が来たと思えばもう丑だ
手造りのお節料理は続けたい
楽しみは故郷の鰻のせいろ蒸し
飯粒は神が宿ると教えられ
夕ごはん今日は私がつくる番

八尾市　生嶋ますみ

お正月過ぎて独りの音になり
丑年だと言うとハハンと頷かれ
ちらちらと白い恋人降ってきた
大根をすっぽりと切る鰤の粗
冬の底力を溜めている蕾
当り年出番待ってる杉花粉

鳥取市　春木圭一郎

引き返す勇気を持ってすぐ決める
負けにより何かをつかむこともある
ありのままの自分自身を受け入れる
たいがいのことは許せる範囲かも
シンプルに生きて問題見えてくる
執着を捨ててずいぶん楽になる

堺市　志田千代

紀淡海峡三二一と陽が沈む
クエ鍋の美味これありとアラせせる
淡島の腑抜けタヌキは何を待つ
お喋りな女の好きな五目飯
花屋にはない雑草を育てる
大仙陵トンビになって見てみたい

鳥取市　吉田弘子

合掌の無心どころか願い事
神様のご加護とおもうタイミング
外は雪森の匂いの入浴剤
個性派で流行なんて気にはせぬ
雲間から差す太陽へ深呼吸
肥料設計跡継ぎのない田がせがむ

堺市　矢倉五月

ひと呼吸おく裏技も年の功
娘や孫が帰れば元の無言劇
楽しみな予定から書く初暦
コンビニの隣りへ建ったワンルーム
除夜の鐘聞こえる里で年を越し
年明けの医院二時間待たされる

鳥取市　倉益一瑤

逢いにゆく胸の音符が弾んでる
縄張りが神社も寺もある不思議
捻子巻いても巻いても脳は空回り
遺言か果し状かは不明です
空回り決断せねば夜が明ける
人生にロスタイムなど有りません

神戸市　田中章子

ウォーキング夫ははるか前を行く
運命は自動ドアではありません
争いが嫌いですぐにウンと言う
初めから答えありきのインタビュー
男友達もう許される歳であり
シャイだから根回し役が性に合う

大阪市　小泉ひさ乃

手鏡の中で自分を取り戻す
悲しさも辛さも隠し味にする
過去ひとつふたつは重ね塗りで消す
古いもの捨てて孤独が翔んでいる
悲しみを吹っ飛ばす髪派手に染め
春を着て少女の目元唄ってる

東かがわ市　原賢

きれいごと言うから先で絡む糸
もう一度翔ぶ気の風に乗ってみよ
一言が胸につかえて二十五時
気がめいるほどに狂っている世相
高望み捨てると風の彩がみえ
高ぶりを押さえながらに子を諭す

鳥取市　田村邦昭

年賀状みんな逢いたい人ばかり
ロスタイム緊張感の勝負です
空回りした時間には罪がない
遺言を書くほど財はもちません
いい人と言われ本音を明さない
縄張りをプライドだけが守ってる

鳥取県　山下節子

冷蔵庫で賞味期限が過ぎていく
ロスタイムもて余してる主婦の午後
学歴を詰め込んでいる肩パッド
空回り少し休めという暗示
遺言状見慣れた父の筆の跡
コスモスも感じています千の風

高知市　小川てるみ

どどどっと春の鼓動が大地から
初鏡私によいしょしてくれる
手付かずの夢を掴むという切符
三番手あたりで笛を吹いておく
脳味噌を空っぽにして句が生まれ

高知県　小澤幸泉

胃カメラで酒の量など計れまい
風強しプレイランドにひとり居る
ジョギングを休み和服の父も初春
小回りのよくきく夫で出世せず
よき友に会わせてくれた雨の駅

唐津市　樋口輝夫

脳梗塞の吾が介護の惚け妻
子の顔も分からぬほどに妻は惚け
屠蘇を酌むその気になれず年明くる
嫁までが弱味にぎって威張っとる
突然に分け前くれと言う女房

唐津市　山口高明

興亡の歴史見て来た阿闍梨仏
戦争の玩具間引けば出る予算
若い日の借りを返すと老妻が言う
寝こんだらお尻パンパンしてあげる
挑発に負けて痴漢と成りさがる

唐津市　井上勝視

禁酒禁煙余命計算してやめる
落ちこめば大きなホラも吹いてみる
子供らもちゃんと見ている夫婦仲
ふるさとの山を泣かせる景が増え
度が過ぎる謙遜肚が透けて見え

唐津市　坂本蜂朗

子が巣立ち妻高らかに革命歌
旅先の妻の電話が喧しい
命綱妻に持たせて高鼾
妻の鼻歌がふりまく今日の幸
妻の手の平で勝手が言える幸

唐津市　市丸晴翠

口惜しさを日記に閉じた涙跡
乾杯の音頭は後期高齢者
陣痛の割には佳句を産み出せず
受験生合格祈願梯子する
病弱な兄に一途な母の愛

熊本市　永田俊子

疲れても花野が呼んでる八合目
地下水に恵まれ忘れる水の恩
視野狭く知らぬが仏で過ぎてきた
頭の錆落とす川柳様々だ
裏の裏知らず過ごしてきた馬齢

熊本県　髙野宵草

市議会の歳費値上げはすぐ決まる
祈ること増えて賽銭追加する
湿布貼る位置でもめてる共白髪
めでたさの価値は朝から屠蘇が呑め
電化器具便利機能にあなどられ

熊本県　岩切康子

宅配便顔を浮べてサインする
待ち時間売店のぞき欲が出る
凜然と律義な白寿的とする
日日のずる家に詫びつつ大掃除
体に合うマッサージ師に巡り合い

弘前市　福士慕情

片付けてまた乱雑になる机
生命線皺に紛れて判らない
飲みすぎと大抵気付く朝の水
トイレにも子機を持ち込む独り者
健康に良い事金が掛かりすぎ

弘前市　相馬銀波

無党派と断るクセが治せない
綻びのいくつか自分史には書く
お茶午睡のどかなぼくの農閑期
豪雪の予報灯油は確保する
人情味ほしいコラムは見当らず

弘前市　須郷井蛙

休甘日設けメタボに注意する
定年でやっと人間首輪とれ
ストレスを缶詰にして里帰り
極楽の切符と思いボランティア
売店の関所待ってる観光地

弘前市　櫻庭順風

救急車近所の手前遠慮する
万が一準備が役に立つなんて
徐に主治医診て直ぐ入院と
拳万をきっと食べぬとする主治医
音たてて至福崩れる日のカルテ

弘前市　岡本花匠

休火山のことばにあんど津軽富士
物価高メタボに叶う皿の盛り
凡夫婦をやんわり諭すおぼろ月
人はひと生き下手なりに目処を立て
ずばり言う細木数子に闇突かれ

弘前市　髙瀬霜石

美男美女親も八割美男美女
ホカホカは一瞬　愛も焼き芋も
御馳走が続くと具合悪くなる
オルゴール性善説を奏でけり
熱燗いっぽんこの世にいないひとと酌む

はらからの孫らに祝儀やる絆
それなりに育てばいいと老婆心
正月の福寿草はや蕾が立ち
三丁目の夕日郷愁つのります
おはじきにあやとり昭和遥かなり

弘前市　今　愁女

茶柱の醍醐味知らぬ抹茶碗
ふらふらと二次会行きのナビゲーター
厚化粧した花びらに拉致される
究極の秘密をばらす盗聴機
最後まで値切る女性のど根性

黒石市　相馬一花

この村に十年振りに嫁が来た
ゆきおんな津軽男に絆される
宰相に買ってあげたい国語辞書
りんご樹の薪ストーブで冬語り
わた帽子被りなおして石地蔵

黒石市　佐藤古拙

高齢者まだ夢もある恋もする
あの世から迎えくるまで善をつむ
洋たんに無駄を一杯入れている
人生は悔いなく生きるものである
いい人は子供がとても好きでした

十和田市　阿部進

不器用な僕だが虹とこんにちは
砂浜にうずまり貝の愚痴を聞く
酒は嫌いだ銚子並べてボウリング
乗り継ぎの人生でした紙芝居
いつまでも還暦続く丸い顔

平川市　小寺花峯

愛という色追い掛ける青りんご
大正昭和引継いで来た知恵袋
救急車冬の寒さを駆け抜ける
辛抱も芸のうちです生き延びる
そしてまたおにぎりの核梅干で

青森県　松山芳生

夢は大臣などと言わない現代っ子
平等に生まれてからはある格差
会合で咳二つ三つ飴届く
漫才のコンビの名前すぐ忘れ
自分に無いものを見つける旅に出る

さいたま市　星野育子

雪の富士望むベランダ春の花
変わる年世界も日本も私も
若き日の夢呼び起こす京の菓子
年毎のいのち育てる菊作り
果てるまでわが菊作り続くだろ

さいたま市　八田敏

逝く日までわたしは夢を見る少女
夢愛絆宝ものですこの漢字
残り火の今日もフラフラひとり坂
アダモを真似て拍手喝采ええ気持
雨止まず酔うていましたボサノバに

武蔵野市　亀井円女

みなさまに感謝感謝の五周年
五周年のぞみのカラー鮮明に
五周年応援団は全国に
雀郎も路郎も笑う五周年
これからも真っ向勝負するのぞみ

八王子市　播本充子

春風に一歩踏み込む入門書
逢いに行く服がなかなか決まらない
安売りの詰め放題に絞る知恵
足して二で割って都合のいい話
無農薬誰も安心する表示

東京都　清原悦子

立春大吉お寺の寄付がやっと済み
ロボットが来て職人を押し除ける
ケアマネに元気装う要介護
石が浮き木の葉が沈む世の姿
丸うなる覚悟が足りぬ八十路すぎ

東京都　岸野あやめ

八掛けの歳と自負する妻と居る
家計簿が教えてくれる無駄遣い
出不精が自分の殻を破れない
雑学の知ったか振りに仕切られる
用済みの男にされる労働者

横浜市　菊地政勝

印刷に肉筆添える温かさ
大掃除心意気だけ変らない
もうなんも願う気もない初詣で
韓国へ行けや買えやが群れている
元旦に絆が揃い恙無し

横浜市　小野句多留

雑踏の中に戦死の夫の顔
この地球人間だけのものでない
野良猫の姿も減って街沈み
共存共栄地球は生命溢れてる
全山が白く輝く富士拝み

川崎市　三浦きぬ

手の届く位置に待ってるお針箱
糸の縒り戻す仕草は母譲り
謙虚さと遠慮が生きる身のこなし
足跡をしっかり付けてゆく余白
術中を変えて振り込め責めてくる

富山市　島ひかる

静岡県　薗田獏沓

不器用の取柄は一つ義理固い
夕焼けの丘で人間取り戻す
うずうずと順番を待つトイレ前
歯を抜かれおそ松くんの父に似る
歯を抜かれ笑顔が神に近づいた

可児市　板山まみ子

きのうとも明日とも違う初日の出
お客様そこまで来てる庭掃除
携帯はただの電話じゃない機械
口先はありがとうでも本当かな
省資源紙の門松貼って春

愛知県　早川遡行

医者はすぐ寺は歩いて五六分
町が良くなる工事なら我慢する
テレビ見てただ食って寝て三ヶ日
マイペース人の噂は気にしない
失言が多くて面白い政治

犬山市　吉田幸子

日本語が世界へ響くノーベル賞
偉い人ですが気軽な同級生
才覚を見出した母の応援歌
見えてきた先へのんびりしておれぬ
お椀クラゲ熱い視線に見守られ

犬山市　関本かつ子

大泣きの赤子囲んでハイチーズ
百均の凧が一番良く揚がり
除夜の鐘独り占めする仕舞風呂
哲学のない政治家の軽い口
力にもなれぬ涙に困り果て

京都市　坪井孝一

正夢と信じて今日も立ち向かう
懲りもせずロマンという字追っている
幸いにも只一病と仲良しに
無造作な家元の花なぜ褒める
サプリメント効く効かないを誰に聞く

京都市　三宅満子

冬には夏夏には冬と生きている
見え透いた嘘も鵜呑みにして夫婦
内緒ごと猫に言うなと釘を差す
鑑定に出すのが怖い壺がある
A・T・M引き算ばかり上手くなり

亀岡市　井上森生

悠々の暮らしはきっと誠から
健康の宝ザクザク山歩き
金融崩壊やはり世の中狂ってる
お金ではなく楽しくて尊くて
川柳の同志よ世直しWE CAN

長岡京市　山田葉子

冬枯れのなかで新芽が萌えている
嫁の味馴染んで会話弾みだす
大舞台敵が燃えてるから燃える
トラブルの尻尾に乗った杉花粉
サングラスやさしい顔を隠してる

大阪市　森田明子

今日の日の褒美と思う星月夜
帰省子に見栄を張りたい母である
マフラーの赤で変身した気分
生傷の絶えぬ生き方変えられず
難しい顔で漫画を描くらしい

大阪市　西川更紗

鈍行とバスの秘湯で除夜の鐘
内定の社運に命預けてる
日の丸は畳まれた儘眠りこけ
花活けてたった二人の祝膳
身内まで総理に反旗振り出した

大阪市　近藤正

清貧と言っておれない派遣村
政界の潮目が変わる丑の年
消費税上げる地ならし給付金
右往左往投機マネーの大津波
憲法をやっと本気で読み直す

大阪市　澤田定子

牛丼の匂い家路を急かされる
大絵馬の瞳やさしい親子牛
新年の一秒遅い丑の年
高速路バックシャン見せバスガイド
職さがし終身雇用見極めて

大阪市　大川桃花

妻の口たまに抜きたくなる電池
酒とろり酌めば溶けますわだかまり
消費期限横目でにらみ臭いかぐ
坂の寺御利益たんとありそうな
牛肉を手前に寄せる鍋奉行

大阪市　小谷集一

無口でもいいさ笑顔がある限り
偏屈のおやじが握る旨い寿司
奪うより待つ幸せのほうが好き
生きている今が一番素晴らしい
文庫本抱いて正月冬籠り

大阪市　渡部さと美

こけかけて周りへアハハと笑っとく
来れば客息子達待つ酒肴
肌被害甚大乾燥注意報
旅の足心配させず前歩く
後期高齢も一つ後が出来そうだ

大阪市　福岡末吉

悔い残る過ぎし日束ね棚に置く
見透かされ言葉少なに苦笑い
八十路見え踏ん張りどころと筆を執る
再会を誓い見送る黄泉の道
揺れ動く国運案じ史実追う

大阪市　岩崎公誠

ぼんやりと生きて時間を忘れてる
賞金を知らぬ黒馬よく走り
童謡のリズム家中みな踊り
戒名がよいのでお経リズミカル
こころ打つパンチ備えたジェロの歌

大阪市　井丸昌紀

まっすぐな道でつまずく癖がある
同僚にトラブル好きがひとりいる
縦糸の縺れ横糸知らん振り
終電は過ぎ始発まで飲み明かす
神様が創ってくれた空の色

大阪市　熊代菜月

失敗を何故かほめられ照れてます
口ばかり元気な父の車イス
また負けた三日坊主のダイエット
無料パスかくした歳がばれてます
ありがとうそれだけ書いた遺言状

大阪市　小糸昭子

昨年は本当に変な年だった
華やかな国技の裏にあるしごき
バブル期は皆中流と思うてた
貧富の差超高層と橋の下
自殺者が年三万もいる平和

大阪市　川原章久

気が付けば老いた二人の縄電車
臓器錆び水洩れが出て胃の癌に
予想外これ人生の夢芝居
子や妻に煽られて持つ万歩計
蜜の味やめられません天下り

大阪市　田浦實

泡はじけ牛の涎が見直され
いろり囲むやさしい顔の旅の宿
重荷背負い歩いた道は愛おしい
尺八はモダンジャズでも奏でます
初詣で心しゃきっとやる気出る

大阪市　津村志華子

山茶花は人恋しくて燃えている
膝小僧細工したとは洩らさない
七彩のくすりで五臓虹が立つ
平成の楢山お誘いのチラシ
津軽三味その激しさにひびくもの

寒風のウォーク化粧念入りに
さまざまな人が行きかうターミナル
旅帰り写真の出来にワクワクし
エコバッグ忘れ買物身が入らず
待ちかねた娘の里帰りつかの間だ

大阪市　松尾柳右子

腹八分欲も七分と控え目に
年金も忙しおますお年玉
墓石と地蔵だけ待つ里帰り
大樹だと思うトヨタに裏切られ
過疎の村失業という子の土産

大阪市　奥村五月

根回しが無駄でなかったいい返事
浄土への根回しをする朝の経
ニューハーフ指の先まで女なり
サングラスかけて私がもう一人
大食いの人気テレビが火付け役

大阪市　升成好

幼な子の脳の回路を見てみたい
もみじ手がみんなにタッチ元気づけ
言葉みな舌まわらぬがみな本音
幼な子と触れて血液サラサラに
お遊びの相手した日は爆睡し

大阪市　岩崎玲子

ばあちゃんの顔になってる初鏡
いい話聞きたい耳も遠くなり
長生きができると決めてよく食べる
塩もみをしても痩せないタイコ腹
究極の笑顔をくれた乳母車

大阪市　榎本日の出

成人の最少の年不況風
アラフォーも二〇〇九年地に足を
整理する部屋が少しも片付かぬ
せめてもとラーメンに具をわんさ入れ
只一人食べても寝ても音のなし

大阪市　中村叡子

写経して何と無の字の多いこと
おおらかに色即是空こだわらず
福は内鬼もお家にはいどうぞ
豪邸もテントも同じ空の下
志高めに老いの坂のぼる

大阪市　中村れんげ

心よく招いてくれる春の風
議事堂で憎み合ってるような芸
反論に荒れる空気が面白い
ほていさんの腹をうかうか笑えない
貝がら節歌えば里が見えてくる

大阪市　神夏磯典子

大阪市　板東倫子

慾ふかき女の列よ福袋
酒と餅あればと男寝正月
邪気払う七草粥は春の色
元日がいつものように暮れて行く
盗っ人も辻斬りも出る大都会

大阪市　津守なぎさ

三ヶ日家をはなれて居候
梅林と蜜柑たわわの南紀の湯
雛段に娘並べてハイチーズ
どこ行くも手押車があればこそ
寒風をついて水仙まっさかり

大阪市　榎本舞夢

熱くなることもないほど呆けている
裏切った仲間に今は助けられ
予定表チェックしてから仕舞風呂
長生きは少し悪女になればよい
戦場で同じ思いの友が出来

大阪市　古今堂蕉子

夢だけを見てする事の生半可
戎さん景気恢復手強いぞ
私もそうだったかと娘見る
カーナビも進化信頼取り戻す
新米のうまさに負けるダイエット

大阪市　坂裕之

この次はきっと笑って会ってやる
池の渕この寒さにも春匂う
妹が心配だから前走る
一族が飲んで腹から笑う夜
真っ青な空に自分が恥かしい

大阪市　川久保睦子

だしぬけにシナリオのないラブコール
終章を飾るほほえみ編んでおく
アテンションプリーズわたしと飛んでみませんか
ちょっとだけ自分抑えて輪に入る
人間って弱いものです飲んでます

大阪市　中井崩

溜め息をついて一人を確かめる
日記にも覚え書きにもなるノート
スピーチは一言だけで光ってる
風よけて最後を歩く知恵をつけ
夢でいいラストチャンスに賭ける恋

大阪市　伊藤博仁

カーテンにたわむれている隙間風
旗振ってくれた乙女も高齢者
おしゃべりが健康法かまいったな
もったいない言いだしてから太りだし
坪庭のさつき主似の狂い咲き

大阪市　伏見雅明

新しい髪型だれも気がつかず
よく足に馴染んだ靴は役目終え
コンビニで単身赴任謳歌する
少年をおとなに脱皮させる汗
想い出は甘いベールに包まれる

大阪市　原田すみ子

もういいかい仏か鬼か声かける
裸木に生きる覚悟を教えられ
週一のローテーションで夜は鍋
振り返り途中途中にあった岐路
残り福今年自分へ投資する

大阪市　平嶋美智子

お誘いに乗ってお酒の腕上げる
のみ過ぎはだめよと月に叱られる
おおらかさ無くし姑息に気が流れ
テレビに感謝今日も相手をしてくれて
もう少し老春させてねえあなた

大阪市　江島谷勝弘

雛飾り今年最後にしてほしい
時間など忘れてしまう友と呑む
よめはんのどうにもならぬテレビ好き
わが家ではビールイコール発泡酒
対岸と思っていたが子が解雇

大阪市　川端一歩

桜咲く一年生になった気で
聖書にも経にも遠く万歩計
ワッハッハどこの国でもみな同じ
小細工はしないサインは決めてある
あの街の匂いが好きで歩く道

大阪狭山市　矢野梓

面差しを思い浮かべて賀状読む
初日記小さな夢に切り変える
楽しさはあっという間に過ぎてゆき
少しだけ頼りにされて出る元気
多機能は使いこなせぬ電子機器

和泉市　横山捷也

背を伸ばしハイヒールの音成人式
ライバルが微笑み見せる落し穴
手作りの店の空気にほだされる
柚子が浮く少し熱めの終い風呂
僧の書く変一文字で年暮れる

泉佐野市　山本蛙城

チェンジの世サクラ前線ぬくい国
派遣切り支援ニュースのぬくいこと
日本の顔がまたまた変わりそう
バナナだけ食べてる朝と気付かれず
ひつたくり減ったらタクシー盗が増え

喧嘩せぬ約束で来る孫二人
孫に声かけさす祖母の長い風呂
鬼籍から声かけられる写真帖
姉さんの晴れ着他人の顔になる
アイドルが序列にむくれ出す落ち目

茨木市　藤井正雄

からからと走る落ち葉が冬を呼ぶ
霜柱やっと見付けた山の道
山歩き男ばかりの年の暮れ
メタボには雑煮も毒と一つだけ
リンゴ飴子供に返る初詣で

交野市　森本弘風

初夢で牛の背に乗り旅に出る
追い出せる貧乏神の阿波神社（徳島の神山）
花の芽だ茶柱の如　嬉しい日
ひこにゃんが大よろこびの年賀状
湯たんぽがそっとセツヤク教えてる

交野市　山川日出子

人も木も深呼吸する春の駅
恋ひとつ探しに行こう春の街
エスプリをちょっときかせる春帽子
わたくしを抜け出す春のパスポート
カニ鍋で愚痴を封じる三世代

河内長野市　山岡冨美子

もういちど笛吹く夢をこって牛
床上げの窓ににっこり寒椿
青春がわっと湧きでるひばり節
一閃のいのち刻んでボランティア
口笛を吹こう朝日が美しい

河内長野市　村上直樹

大胆と無謀の違い紙一重
無口でも要点だけは突いてくる
半鐘に命をかけた纏もち
ゆったりの老後の暮しあてはずれ
友だから胸を開いて本音吐く

河内長野市　黒岩靖博

浮気心に妻がたっぷり塩を塗る
ロスタイムたっぷりあるがノーマネー
がらくたをどっさり貯めているマニア
くしゃみ咳おまけに涙こら花粉
寝言癖恐れて一人部屋の旅

河内長野市　坂上淳司

お餅止めパンに切り替えネジを巻く
年明けは箱根駅伝お楽しみ
紅白の大河のトリは泣き坊主
拉致の子の両親春はまだ遠い
初場所に座蒲団舞うを待っている

河内長野市　水谷正子

バスミラー走る私を待ってくれ
人の世に人に哀しいことばかり
会って別れてどれだけ人生人に会い
ゆっくりと月見る間なく戸を締める
夜は出ないが時々灯は恋し

河内長野市　植村喜代

達者でも余白が多い日記帳
国宝の屋根に住んでる鳩の意地
マイペース覚えて知った酒の味
病院と趣味の掛け持ち午前午後
丸投げを見せず総理は粘り腰

河内長野市　井上喜酔

年明けの葬儀屋だけが忙しい
対岸の火事では済まぬこの不況
ガソリンと灯油値下りひと安堵
不況風あおる企業の派遣切り
寒風に炊出し温い派遣村

岸和田市　井伊東吉

公園の鳩も近頃メタボちゃん
何事もプラス思考に切り替える
夫婦でも喋りたくない時がある
無駄話たまに本音がポロリ出る
幸運の女神笑顔がお気にいり

岸和田市　雪本珠子

試着室モデルのポーズとって孫
病室がほっと一息夫の笑み
病室に吊して祈る千羽鶴
ご祈祷をあくびで受ける曽孫連れ
怒鳴っても語尾が優しいママの声

岸和田市　原さよ子

見ただけでお腹一杯グルメ皿
煽てにも乗って老人やる気出す
がっちりと九条守る蟻の群れ
娘の縁談纏ってから父無口
三猿を決めて煽てにもう乗らぬ

岸和田市　林力子

お年玉貰えるまでは孫素直
フルコースナイフフォークが睨んでる
監督の涙腺ゆるむ箱根越え
むだを削ぎ不況乗り切る生きる技
善民をだしに使うのもうやめろ

岸和田市　森元ふみよ

足腰は立たぬますます口は立つ
あちこちを繕いながら生きている
職があるだけで喜ぶ年の暮れ
ドッカンと当ってみたい宝くじ
早口の漫才困るわからない

岸和田市　堤楢代

岸和田市　土橋房枝

忘却とはありがたいこと許す愛
人生につじつまあると占師
叱咤から激励になる母の喝
されるより援助はしたい親ごころ
小春日に野良猫達の生あくび

岸和田市　米富淳風

ジャンボ籤ハズレでハピーニューイヤー
それぞれの家風身につけ娘等帰省
合宿をしている如く孫はしゃぎ
初日避け寒風避けて初詣で
初詣で晴着姿が見えませぬ

堺市　村上玄也

お互いのアホに気付かぬから揉める
支えあう実感わいてくる老後
大臣の舌には予備があるらしい
万札を崩すと急に減るお金
目出度さは今年も同じ顔揃い

堺市　加島由一

妻くしゃみ私は風邪をひいている
弱いとこついてくるなあ給付金
商売は傾くようにできている
蝶が舞う如くに株の乱高下
副作用ある薬より卵酒

堺市　柿花和夫

生も死も一度限りと爪を切る
人気あるあいだに辞する人気者
理想的な死などある訳ないだろう
株価より風呂の水もれ気にかかる
相席で使うべからず爪楊枝

堺市　源田八千代

元旦に忘れ去られた誕生日
おせちから鍋にしましたこの寒波
寝正月過ぎてやおらの初詣で
一駅をお腹熟しに歩いてる
孫みんな卒業生となる今年

堺市　奥時雄

一郎と太郎の違いほどの国
外人と話が弾む嫌なやつ
味のある顔だなとしか言われない
写メールの孫はいつでもVサイン
お忍びのデートもしたい相撲取り

堺市　近藤豊子

ノーベル賞大正昭和の底力
ハローワーク子とその母に励まされ
西へ東へライスにつづくクリントン
イラク撤収全員無事という快挙
柚子風呂についうとうととおぼれそう

堺市　西村りつえ

初句会笑顔とパワーもろてくる
おせち囲み全員集う祝箸
炬燵出ず一人旅する時刻表
したい事あれもこれもで惚けられぬ
何もせんでいいと何もしてくれず

四條畷市　吉岡修

輪の中にいるが出る杭ねじれ杭
未練なくあばよやりたいことやった
ご返事の玉虫色にまた悩む
大国にささやかれたら腹決まる
お賽銭あげた倍ほど願いごと

吹田市　野下之男

不景気も神が下した試練かな
偉い人その場その場で言葉変え
ゆっくりとぼんやりが好きカフェテラス
愛想ないガイド美人で許される
卒業を祝うつもりか花の道

吹田市　瀬戸まさよ

政治家に爪の垢でもオバマ流
友の愚痴聞いてあげるも人助け
主婦の座でネオンの街は久しぶり
コーヒーのまずい日もある喫茶店
ふうふうと冷ます顔よし寒の夜

吹田市　大谷篤子

夜のない都会に昇る丸い月
一坪の庭にも四季は巡りくる
内視鏡もしも心を覗けたら
新しい諭吉財布に落着かず
色褪せたカウベル棚に置いたまま

吹田市　木下敏子

悲しさを忘れしっかり食べている
もう話す相手もなくてひとり言
戻れないひと追っかける夢枕
ありがとう今日も笑顔で締め括る
明日からはひとりで生きる米を研ぐ

吹田市　太田昭

憎しみを忘れ眠りが深くなる
喜寿迎えまずは傘寿と欲を出す
老い耄れるのが嫌で心に鬼を飼う
ピエロにはなりきれなくて貝になる
いい人と言われ横には振れぬ首

吹田市　須磨活恵

誕生日七十四枚目の鱗
運勢欄信じないけど気にかかる
おかげ様夫婦達者で七日粥
贅沢を諫めるように不況風
豊かさに溺れ小さくなる心

高石市　浅野房子

ひとり居の誰憚からぬ咳くしゃみ
八キロ減落ちた筋肉どこ行った
生きている限りお金は要るんだよ
食養生味気ないとは贅沢か
生かされてプラス思考になりました

高槻市　生田義一

子供等もメダカも見えぬ故郷の川
身障の我が身忘れて友案ず
アメリカがこけて世界はパニックに
日本丸坊ちゃん船頭で沈みそう
お目出とうだがあんたはん誰だっけ

高槻市　富田美義

褒められた心が白く乾いてる
どの医者も加齢ストレス狡い逃げ
トラブルを包む笑顔が有り難い
ワンテンポずらして唄う自己主張
お澄ましを意外な人に破られる

高槻市　杉本義昭

ジャンプする君に新たな戸が開く
今生きる窓にやさしい寒椿
ふるさとの今もどこかに母がいる
親と子の絆を照らす初日の出
不器用で人間らしいとこが好き

高槻市　指宿千枝子

バラ色に夢がふくらむお元日
よい年になりますように願かける
お年賀に個個のお顔が浮かんで来
回転寿司イワシとウニを別注し
満ち足りて劇団四季の舞台観る

高槻市　乙倉武史

大不況よそにモタモタへぼ政治
はっきりとしない支持率底を這う
救国の熱血オバマ出て欲しい
ほどほどのしあわせ七草粥啜る
薬屋が知らせてくれた誕生日

高槻市　佐甲昭二

これからの余生楽しむ自由席
武勇伝寡黙な人が口を切り
チャンスなく自慢の代打遊ばせる
脇役に似合うファッション身につける
大声で叱るまなこは許してる

高槻市　執行稲子

評判が病人食の邪魔をする
もずく汁海の光りと青くれる
老犬の匂いをキャッチ吠え続け
深々とおニューの帽子嬉々として
危険人物なるべく知らぬ振りをする

牛の如ゆっくり歩む癖つける
ゆっくりの歩幅で生きるうしのとし
アメの後三年後には税のムチ
KYとは漢字読めないことらしい
もし家にあれば捨てている瑠璃碗（正倉院展）

高槻市　安田忠子

お前にもチャンスはあるとおだてられ
突然に話題を変えて照れかくし
ぬかるみを知らぬマンション育ちの子
足音が妙に気になる夜の道
肩の荷をおろして一つ深呼吸

高槻市　左右田泰雄

風を読み帰る日探る渡り鳥
大寒波暑さの夏が懐かしい
かみさんが留守で手頃なカップ麺
表札の亡き愛犬に留守預け
民の声重く受け止め軽く捨て

高槻市　峯村勲弘

想い出は辛いものほど光る星
ふり返りふり返りつつ登る坂
この顔が私であった鏡みる
若きは美老いは風格これが人
この峠越えればきっと青い海

高槻市　井上照子

宴会の幹事はしない芸達者
生命線のつづきをギュッと押してみる
賞味期限見る時いつも期限切れ
深呼吸して血圧をまた測る
ばれてないスキャンダルなら身に覚え

豊中市　江見見清

神主がスーツではしゃぐクリスマス
トラブルに聞き耳立てる嫉妬心
風呂場から聞こえる今日の隠し芸
フルートに五臓六腑を洗われる
紅白に馴染みの歌手が減りつづく

豊中市　藤井則彦

目標になお夢を混ぜ古稀の春
ビル狭間土がほんのり匂う畑
長生きの秘訣は酒と百の父
舗装のない土の小路に弾む足
時だけが治す心に受けた傷

豊中市　水野黒兎

快晴だ空の上まだその上も
どの世界見ても八百長らしきもの
ベルリンの壁崩壊も二十年
もがり笛田螺の蓋も冬ごもり
子午線に時計を合わす明石駅

豊中市　坂上高栄

豊中市　山門タミ

あれやこれ昔を偲ぶお正月
私まだ亡夫の友から年賀状
満たされた気分で過ぎた三ヶ日
正月の仕来りついで末娘
丸裸でも息吹いてる冬木立

豊中市　安藤寿美子

初芝居はねてま冬の街へ出る
日脚のびまたこの窓に陽があたる
途中から方向オンチ始まった
恋のゆくえ途中下車してたしかめる
酒の席中途でぬけた事はない

富田林市　片岡智恵子

夫婦劇続く晴れの日曇りの日
匿名の投書ズバリと言いあてる
終章を飾るシナリオ視野におく
悲しみは無理に忘れることはない
恐怖背に握るハンドル運転手

富田林市　大橋鐘造

果ての無いゴールへ今日もつっ走る
清濁を呑んで大河となる男
鱗落ち風の動きがよく見える
一言の情けに解けるもつれ糸
晩学のレール　カーブが多すぎる

富田林市　中井アキ

振り向けば華やかだった子育て期
大吉へヘルペスというお邪魔虫
糸トンボ大むらさきに憧れる
肩先にまだ乗っているアンビシャス
持っている力を全部出し切ろう

寝屋川市　平松かすみ

うちのひと勿体ないの教祖です
テクテクと歩けどお金落ちていず
青春の南田洋子いい笑顔
映画ていいな乙女に返る午後
国会と同じ町内にも派閥

寝屋川市　森茜

あらかたを済ませばしもやけが痒い
ばらばらになって戻った新刊書
サンドイッチ卿の気持が分かるパズル狂
ときめきをくれる小さなお友だち
一つだけ聞きたい遠い遠い人

寝屋川市　籠島恵子

深読みの中で揺れてる小半日
内緒ごとこそこそと楽しそう
結露拭きながらかぎろい待っている
一日一善自分に暗示かけながら
新しいノート向きあうものがある

寝屋川市　森田麗

古寺の鐘テレビに写る里の除夜
古希過ぎて初めて一人除夜の鐘
屠蘇祝夫の写真にも一献
神前も個人情報隠す絵馬
円満に見えていますか丸い顔

寝屋川市　太田とし子

吠えるだけ吠えて燃えろよ血が滾る
眠れない夜はへそくり出して見る
縁日の金魚すくいに児が居ない
がっちんこ死に損いと生き残り
卒寿とか人ごとみたい大ジョッキ

羽曳野市　酒井一壺

種のないブドー言いたいことがあり
閉め方で誰の帰宅かわかる母
つきのない私にあった残り福
弱虫が集まり怖いことをする
怒らねば腹の虫にもバカにされ

羽曳野市　三好専平

霊水をボトルなんぼで売る神社
ドナルド・キーン源氏に惚れて五十年
国民を買収する気の二兆円
内戦のかげに犇く家なき子
保険にも保険をかける大不況

羽曳野市　吉川寿美

周波数合わなくなった老いふたり
今日あって明日が読めぬこの不況
高貴厚礼せめて余生はこうあらん
不況に喘ぐ庶民総理はバー通い
住む世界違うテレビの喧噪よ

羽曳野市　吉村久仁雄

先々へ私を誘う好奇心
別姓で暮らしたような共稼ぎ
惜しまれて辞めて賀状がすぐに絶え
有限の命無限の欲に縋れ
よく食べて眠って日なが満ちている

羽曳野市　安芸田泰子

日々好日白紙が続く日記帳
ふくらんだ莟が春を待ち侘びる
孫のため戦火逃れた雛飾る
孝行をしてくれますと親の見栄
雑草になって気楽に生きてゆく

羽曳野市　徳山みつこ

寒中お見舞干し柿ができました
しゃべり過ぎないようぴったりのマスク
派遣村が出来た政治の崖っ淵
本当の政治家を磁石で探す
パンジーも励ましあって冬の底

羽曳野市　永田章司

稲穂にはなれないおひとたんとおる
府の予算家計雛形見る思い
仕舞風呂掛け湯の音にほっとする
寝返りを打って眠気をよんでみる
奥さんの名前で着いた喪のハガキ

東大阪市　米田水昇

かに仲間今年もバスで日本海
「偽」を継いで「変」に終わった干支はじめ
あの人の視線なんだかときめいて
囲まれて遼君今日もクラブ振る
お蔵入り昔を語る大火鉢

東大阪市　北村賢子

響き合うこころ互いの宝物
爪に火ともし理想は高く生きている
不況風財布はたいて福を買う
浪速の夜会わなよかった戎橋
リストラの嵐へこころ乱れ舞う

東大阪市　笠井欣子

生き方の車線を替えた趣味の道
車間距離そこそことっていい笑顔
朝日見て夫の笑顔でお味噌汁
思い出になってしまった年賀状
嘘一つ言って血圧上げている

東大阪市　佐々木満作

健康な笑顔が僕のお年玉
三が日メタボの恐怖忘れ去り
ポケットに笑いのネタを隠し持ち
理不尽な世の中明日は我が身かも
えべっさんもしかめっ面のこの不況

東大阪市　久米奈良子

剪定の槇健やかに新春を待つ
正月の花は心に活けておき
三ヶ日せめてひとりの祝い箸
伊達巻をよばれ正月らしくなり
柏手を打って太陽拝む朝

枚方市　寺川弘一

愛の言葉は何度聞いても聞き飽きぬ
しぼむともろいゴム風船とでかい夢
老いてからわかる遺伝の恐ろしさ
老い一人つぶやきながら草むしる
つぶやくと子猫のミーがニャーと鳴く

枚方市　二宮山久

忘れてた人から届く年賀状
趣味増して人生豊か日を過ごす
年金の暮しへ冷たい世間風
芸道の今年にかける初げいこ
また今日も歩きつかれた万歩計

元日や一号線がおとなしい
距離置いて見ればはっきりする真偽
帰郷して床しい嶋を目のあたり
ふるさとの社殿で神楽舞と会う
露天風呂口を開いて受ける雪

枚方市　丹後屋　肇

朝の冷えいためた腕が敏感に
デイサービス毛筆持つ機会に恵まれる
セーターのボタンゆっくり時間かけ
花束に埋もれて娘職を退き
胡蝶蘭これはやっぱり玄関に

枚方市　森本節子

拗ねて見て恋の純度を確かめる
孫達のパジャマ手で着せ口で着せ
大人向き童話に覗き窓がある
伝えたい愛の形を模索する
救急車呼ぶケイタイを握ってる

枚方市　伊達郁夫

上手過ぎる歌でしーんとしてしまい
お互いの非を認め合いめしにする
輪になって家族で食べる飯の味
手拍子に合う童謡でうけている
上戸より先に演歌で盛り上げる

枚方市　安達忠央

白旗を易々振らぬ父の意地
余程の事あったか鬼が泣いている
逢いたくて鯛の粗煮で待つ夜長
人形に似合う着物を縫っている
プラスマイナスどちらにもつけない私

枚方市　小林わこ

横綱を目指して欲しい日馬富士
空想で脳の体操しています
化け過ぎて己の影を見失う
寺の鐘教会の鐘聞ける街
次つぎと振り込め詐欺の新手口

枚方市　海老池洋

すばらしい街だ歩いて見ることに
躓いた位置にもどってみたくなる
初売りが始まる列島動き出す
リビングに空想癖を持つ机
身辺整理に引っかかる犬と猫

藤井寺市　太田扶美代

精一ぱい生きたらきっと明日が来る
八十路未だ焦らず牛を追っている
鍵穴で確かめてから宅急便
三歳児もう諭吉さん好きと言う
出番まで箸もつけずに待つマイク

藤井寺市　若松雅枝

藤井寺市　鈴木いさお

捨てていい命なんかはありません
鏡見て古希の己を確かめる
美人だが少し気になる喉ぼとけ
目立たぬようポックリ寺の列にいる
仏壇の母も一緒に雛まつり

藤井寺市　鴨谷瑠美子

この調子今年がすべり出している
噂の人とお食事をしたのはホント
ほとぼりがさめて突ついているみかん
水仙の香り想いは一途なり
しどろもどろあなたらしくもない姿

藤井寺市　髙田美代子

昔ばなしすると老人よく喋り
人情が乾いて梅が開かない
土砂降りを歩いた靴を干している
昭和平成歩き疲れた脚が拗ね
若い日のまんまに今も好奇心

箕面市　広島巴子

ちゃん付けでタイムスリップクラス会
思い切り方言喋り素に戻る
色褪せた写真に残る未来像
新校舎思い出の地に蘇る
サイン帳学生のまま友と生き

守口市　井上桂作

ゆっくりと歩こうおのが歩幅にて
華やかな老いを願うは罰あたり
地に足をつけて暮らしを見直そう
長生きは楽しみの底深くする
考えすぎノイローゼなどならぬよう

八尾市　吉村一風

無病息災願う七草粥うまし
聞こえない振りも上手に丸く老い
よう捨てぬものに埋って余生生き
用件を追伸に書く癖がある
直筆の年賀何度も読み返す

八尾市　笹倉ひろし

宝物見せびらかしに肩車
水っぱな垂らし推敲熱を上げ
ビッグスリー社員人質金せびる
ピンポンで客聞き分ける古稀の技
幸せに毎日お礼して活きる

八尾市　村上ミツ子

もう少し開けずにおこう玉手箱
小さな親切大きく受けとめる
義理ひとつ返してうまい酒を酌む
懐も震える夜明け鎌の月
レシートに不在証明してもらう

ねんごろに生きよ牛歩で老いの春
背中曲ったなあ遺影微笑んで
信号無視につられて渡るポストまで
二ン月の鬼よあなたを三つ越え
床暖ですぐに寝そべる怠け癖

八尾市　髙杉千歩

掛けた絵馬ゆらゆら迷う風を負う
耳立てた内緒話が疎ましい
ブランコが揺れて恋の芽育ちいる
給付金まだかと迷路をさまよう
深呼吸健脳体操ケンケンパア

大阪府　桑田ゆきの

思慕の念込めて手作りメリーチョコ
手洗いとうがい励行して元気
好物が出て日延べするダイエット
善悪がお金次第で変わる人
春光るお酒落心は失わず

大阪府　野田栄呼

不況風斬ってスタートする初荷
雅やか春日の杜の越天楽
へその緒を斬ってこの世へヨーイドン
長短のいのち寿命と片付ける
お宝と信じ合ってる共白髪

大阪府　籾山隆盛

お互いのお陰と屠蘇を酌んで新春
老いた傘ですがもし良ければどうぞ
手入れした庭木も寒い空っ風
お年玉いただく歳になりました
意のままに動く手足に感謝する

大阪府　米澤俶子

天井にユキチ張り詰め寝てみたい
鼻歌を聞いて安堵の長い風呂
チェンジした妻のど派手が気にかる
他人から見れば宝もただのゴミ
夕べなに食べたと脳を試される

大阪府　澤田和重

長過ぎる訓示耐えるも初仕事
孫一人保護者六人かるた会
警官が湧いて出たよう初詣で
ラブレター起承転結などいらぬ
票読みの苦労は知らぬ二世議員

神戸市　伊勢田毅

旧友も口だけ達者長電話
嫁った娘が只今と寄るぬくい午後
お餅つき祖父の臼にはかなわない
いくつかと尋ねてやいた雑煮餅
初仕事父は頑固に国旗揚げ

神戸市　木村貴代子

神戸市　山口光久

子の手前どんと来いよと虚勢はる
惚れたのは掴み所のない男
偽物を掴まされてる欲の皮
雲掴む話に一度乗ってみる
借金の山をつくって逝かはった

神戸市　山田婦美子

老母と居て何度も同じ会話だけ
カレンダーの〇がせかせか追いかける
不機嫌だハイハイ二度も返事する
一日だけ一人で居たい夢も褪せ
眠らねば明日がそこで待っている

神戸市　山口美穂

日記にも書けないことが五つ六つ
縺れ糸解けないままで年を越し
リクエスト受け婆なりのハンバーグ
お持たせケーキはずむ話にレモンティー
シルバーシートで若い男がメール打つ

相生市　中塚礎石

ほどほどの笑いを誘う物忘れ
三毛猫にあこがれを持つ黒い猫
缶ビール飲めてゆっくり今日を消す
男対男序列へ散る火花
入れ知恵をされて鳥が偽証する

芦屋市　黒田能子

几帳面に洗濯ものが干してある
クレヨン画空はいつでも真っ青だ
母に似たとこがあるから好きになる
ひと言の短い助言救われる
回転寿司回ってるから食べすぎる

尼崎市　軸丸勝巳

一礼で外す格言カレンダー
書き初めに賀状追加の墨をする
不安増し賽銭弾む初詣で
箱根路の魅力二日のテレビ漬
ゆったりの積りの老後夢破れ

尼崎市　春城年代

喪に服す一族郎党引きつれて
骨抱いて紅葉散り敷く南無三宝
納骨やまた遠のいて往く人よ
どうだん躑躅の朱にふたたびの永観堂
茶畑の月冴えるなか逢うている

尼崎市　長浜美籠

戎さんまだ残り福あるやろか
百人力ですと強気な貼るカイロ
正論に表と裏のある不思議
手のかかる夫だと自慢して帰る
言うことも途絶えて雨の音を聴く

妻の手の中でのびのび生きてます
どぜう鍋明治の味を掬い上げ
胎児からモーツァルトに慣らされる
バラの棘せめて一矢を報う肚
フィギュアスケートリンクへ蝶が舞い上がる

尼崎市　加川靖鬼

餅と蒲鉾里のお歳暮冬日和
半月が今夜も連れる星一つ
お年玉明日を楽しむ終い風呂
娘に貰う小さな愛のバカンスよ
手を痛め娘のやさしさを今更に

伊丹市　山崎君子

不用品ほいほい捨てること出来ず
お小言があっさり済んでほっとする
いい返事したばっかりに痩せ我慢
激動の昭和の時代生きた幸
新高速出来てエリアのえびす顔

川西市　米原雪子

うっかりと赤信号を通り過ぎ
ちびちびと飲む大切な吟醸酒
十二月身辺整理捗らず
十二月きれいになった換気扇
一日を無駄に過した悔い残り

川西市　西内朋月

不況風吹いて巣ごもり大流行
招かざるお客が酒の肴褒め
父さんが夢中で凧を上げている
ささやいてみたが思いが通じない
マジックのテープは草の実がヒント

三田市　石原歳子

胃の検査済んでたらふく回る寿し
吊るされた柿と大根笑い皺
善人に成れた心地の宮掃除
満腹にこたつがおいでおいで言う
百円で思い切り振る宮の鈴

三田市　上垣キヨミ

いまさらに貯金する気はありません
来客の予定に合わせ大掃除
親放れさすと放っとき気にしてる
走ります考えながら走ります
生活が活発ならばゴミ多し

三田市　臼井二英

耳底の煩悩を突く除夜の鐘
しなくても良い喧嘩までして夫婦
約束をひとつ加えて猪口受ける
信じてる道へ牛歩をはばからず
変りなき日を幸として生かされる

三田市　久保田千代

三田市　北野哲男

活けづくりよりも兜煮させる母
百八つ数えたことがありません
母傘寿一本釣りの睨み鯛
淋しがり諭吉が群れへ行きたがる
お酒ほど効くまで飲める薬なし

西宮市　亀岡哲子

とりあえず五年日記を買う元気
ギックリ腰の嫁労わっておめでとう
ガタゴトと二階で夫良く動く
喧嘩ではないぞ夫婦のディスカッション
しっかりと寒を握って蕾たち

西宮市　牧渕富喜子

盆栽の梅も一輪ずつ開き
景気づけ正月用の花を買う
字のぶれがちょっと気になり電話する
ガザ侵攻アウシュヴィッツは語れまい
祝日に日の丸立てる家がある

西宮市　井上松煙

平成の美人の顔は丸くなり
挫折してみな腰痛のせいにする
皺増えて年の誤魔化しようがない
おしゃれして老いぼれの杖若返る
無言でも以心伝心老夫婦

西宮市　秋元てる

空に昂　電飾の星幼稚園
授乳中天下御免のお嫁はん
思い出し笑いに気付き駆け出した
元気ネと言われて元気倍になり
すぐ揺れる自分だ油断しておれぬ

西宮市　山本義子

白い雲もくもく自立目指してる
春の雲花びら形になりたくて
雲の脚　月をひととびする気だな
過疎の村雲はむくむく踊ります
雲走るバスと競争する気らし

西宮市　藤本直

信念と我慢と愛の介護職
春来ても斬ったハケンの傷癒えず
ロボットもうなだれている大不況
給付金不思議な金の使い道
我慢するまだ日本が好きだから

西宮市　緒方美津子

消費を煽る裏で泣いてるゴミの山
福引の鐘の音高く缶ジュース
吊り革にはげまされつつ喜寿が立つ
免許証返納するにいる勇気
相談したら買えなかったドレス

精神を不安にさせる金と株
好きにせいこの一言で苦労する
気配りのすすめ読ませてみたい人
病気とか墓のはなしは避けている
戦争をしないと国が成り立たぬ

西宮市　片山　忠

フラダンストライしている夢の中
母ちゃんと書いて会いたくなる手紙
延命で生き長らえる幸不幸
ユニークな意地悪役のおばあさん
水仙と海が見たくてバスツアー

西脇市　七反田順子

バスツアー呑んで喋って昼寝つき
旅の窓夕日がきれい明日は晴れ
合唱が済んでゆく年明ける年
歌合戦始まりそばに箸つける
神棚の明かり光って年明ける

姫路市　古川奮水

世界不況歩調合わせて攻めて来る
あたふたと不況の波にもまれてる
舞い降りた天女ほのぼの露天風呂
どうしよう君の笑顔に一目惚れ
寒い男と意気投合のおでん酒

奈良県　渡辺富子

妻息子嫁トリオの牛と初詣で
埒もないもしもが僕をねさせない
方舟をもしもに備え持っている
楽隠居とはいかぬ後期高齢者
偏屈の意外に広いテリトリー

奈良市　米田恭昌

反省と希望で囲む晦日そば
年末年始諭吉さん忙しい
切り絵の鋏は自信満々と
流れには逆らわないで足るを知り
昼の酒つけてもらってお留守番

奈良市　天正千梢

電車内あちゃあともらす忘れ物
怠け癖七草粥が引き締める
弛んでる脇諸差しがぐさり突く
励まされ血流までもほっかほか
鈍になるこれも一つの生きる知恵

生駒市　飛永ふりこ

魂に触れる言葉に愛がある
究極のピンチの裏にチャンスの芽
乱舞する心は見せぬ白いユリ
リハビリの痛みに耐えている希望
恋の矢がもしもと夢はまだ捨てぬ

香芝市　大内朝子

忘れない証の賀状まだ来ない
風花のふわりと頬にとけて 街
粉々のペアーグラスを掃き寄せる
この家も大分歪んできましたね
大丈夫まだ歩きます歩けます

橿原市　安土理恵

雑音をかき消すように氷雨降る
悪口に他人は彩を盛りたがる
頬にくちづけされ一瞬の夢を見る
抱きしめられたらわたし気絶をするだろう
真夜中のメールふんわり火を放つ

和歌山市　松原寿子

七草のパックはたぶん国産品
松茸の匂いしていた土びん蒸し
愛しくて手に病葉の二 三枚
雨天順延いつまで待たす給付金
肩書きはないが愛嬌たんとある

和歌山市　福本英子

助け合う文化が残る田舎町
節約の足をひっぱるダンナ様
節約を軸に今年もマイライフ
義理堅い度合がすぎて疎まれる
正夢であれば長者の仲間入り

和歌山市　堀畑靖子

口先で詫びて不本意顔に出る
縺れてる舌で辻褄合わす嘘
スケールのでかい男で恥知らず
理くつ付けなどは要らない春の彩
舞台裏知らない雑魚がよく騒ぐ

和歌山市　喜田准一

あけまして先ずは歯医者へ予約する
またゴロリ風邪と戦う三が日
来たきた来た賀状の束がお元日
二枚目の賀状が届く直筆で
励ましのお便りに触れ頑張るぞ

和歌山市　田中みね

梅にまだ遠き湯島の大晦日
想い出と腕組みながら無縁坂
古書店の埃の中の年の暮れ
玉葱がころがっている派遣村
ボディーチェックうけて参賀の小旗振る

和歌山市　木本朱夏

持ち越した風邪にとうとう寝正月
年の瀬のリストラの身に雪が舞う
炊き出しを抱いて人情身に滲みる
佳い年を願って拝む初日の出
百年に一度の不況助け合う

和歌山市　玉置当代

和歌山市　武本　碧

百薬の長がこの世を弄ぶ
お互いに一歩譲れば弾む毬
坂道を一気に膝はまだ確か
別姓の夫婦も耐えているらしい
青春は残酷二度と振り向かぬ

和歌山市　上地登美代

風船もふわふわ飛べぬデジタル化
転んだらアドリブにして笑っとく
青春をも一度掴む種を蒔く
ライバルにいつもお世話になってます
アルバムから遠い自分を掘り返す

和歌山市　松尾和香

新年を迎えて近くなる浄土
生涯を青春通す心意気
背を押す亡夫に人生かけている
ぼんやりと暗示にかかる日向ぼこ
押し合った君の背中も雲の上

海南市　堂上泰女

親戚に九十歳が四人いる
帰省子で華やいでいる年始め
喉元を過ぎておんなじ徹をふむ
薄氷の上で燥いでいる命
百歳の方から問われてる元気

鳥取市　土橋はるお

ぴかぴかの経本めくるお元日
ひと走り宇宙に行ってロスタイム
チッポケな村の縄張り解け平和
日本が困る後期高齢者の元気
ふる里に帰っていつもホッとする

鳥取市　福西茶子

持ち歩く笑いぐすりと胃ぐすりと
逆ぎれに負けるようでは親でない
空回りしながら妻に牽かれてる
あと三月ドクター事もなげに言う
笑っても泣いても今日は暮れていく

鳥取市　平尾菜美

下ばかり見つめ船酔いしてしまう
お決りの我慢私が見付からぬ
家訓つぐ舟がもはやの波越える
母の愚痴いつかほのぼの蘇る
頂点をめざし山積む漫画好き

鳥取市　西川和子

張り切りが過ぎて目まいというおまけ
集まれば病気の話盛り上がり
どっこいしょよいしょが無いと動けない
歳月に故郷疎遠になるばかり
納得はしたがやっぱり引っ掛る

鳥取市　池原天馬

今年こそ醍醐桜を見に行くぞ
昭和五年老舗創業俺同じ
寒空に派遣の悩みこだまする
摩訶不思議利益一兆マイナスに
円高は実力なのか敵失か

鳥取市　福田登美

価値観の違い笑顔で埋めておく
愚かさも友の輪にいて磨かれる
確執を洗い流して手を繋ぐ
美しい言葉で三ヶ日暮らす
不器用で楷書のままで老いている

鳥取市　夏目一粋

したたかに生きる方法考える
魂が歳をとるまで生きてやる
派遣切りにんげんのいる吹き溜まり
にんげんはモノでないのに捨てられる
叶わない夢こそ夢と言えそうだ

鳥取市　岸本孝子

神さまのされるとおりに生きている
安近短年金らしい顔ばかり
日本人の粘り強さを今出そう
必要とされて毎日おさんどん
いつの間にこんな歳かとふと思う

鳥取市　岸本宏章

贅沢なご飯雑穀入れて炊く
生かされてトイレ掃除も苦にならず
マンションを見上げ地震のとき思う
梅干に医食同源諭される
悔しさを知っているから頑張れる

鳥取市　太田幸枝

心の窓開けると視野も広くなる
少子化の進む日本が気にかかる
米寿でも気分は二十歳よく笑う
まだ生きるつもりで柿のつぎ木する
浄土行き日銭で旅費を貯めている

鳥取市　永原昌鼓

けちけちの暮らしメタボの防止策
けちの哀しさ不用な物も捨てられず
動物の縄張り犯す人のエゴ
まだまだと後期高齢四股を踏む
愛の無い言葉が人の胸を刺す

鳥取市　有沢せつ子

自信句を良くない例に使われる
好い友でいたく折り目は消されない
お喋りに苦笑いするバスの中
温いもの飲んで心を落ち着かす
政界の謎は解かないまま消える

鳥取市　山宮愛恵

一条の光にかける牛の春
生まれきて数多のひかり授けられ
あたたかなひかりを放すお人柄
六〇ワットわたくしに丁度いい
雀たち食べているのだろうか雪

鳥取市　加藤茶人

百年という掃除機に皆吸われ
御トイレとしびれに耐えて聞く法話
まだ五分春の目覚めはもう五分
むなしさが楽しさの倍子等が去に
口癖はあなたはダメよ子には食え

鳥取市　武田帆雀

黒猫の嗅覚で来た宅急便
紐付きのペン出鱈目は書けません
陛下には医師団が着く医者通い
厳格な父で育った正座癖
パネルを示して太郎の首を咬む

鳥取市　土橋睦子

春風に森は静かに野鳥待つ
女系家族レースの窓に香が匂う
学歴も使い切れずにフリーター
芽吹くもの眺めた山が枯れてゆく
鬼の留守自慢ばなしが弾んでる

鳥取市　宮脇道子

小雀に恩を売りつつ餌をやる
独り居て堀の鯉だけ待っている
世の風に乗って励むは老仲間
鬼姑変更しない生きた道
丑年の人はおだやか皆んな好き

鳥取市　岩崎みさ江

思い出の甘さに混じるほろ苦さ
雑巾の捩れたままに乾く日も
今日もまた生きる一人の葱刻む
来る友へ心の窓は開けて置く
予定にはなかった独り行く荒野

鳥取市　鈴木公弘

浮いてても水母ノーベル賞を生み
如意棒に預金通帳ぶら下げる
手招きへ命を賭ける松葉がに
バイキング料理豆腐が温かい
雪つもる夏の飲み水足りそうだ

鳥取市　盛田夢路

お互いの寝息たしかめ合い安堵
鬼瓦いかつい顔で春を待つ
こだわらず許そうそれが楽だから
ふる里の風が心を揉みほぐす
寒明けの命はぐくむ土手に春

鳥取市　下田茂登子

逆切れのおとこは抱いて温める
人はみな愛と憎しみ秘めている
学歴より健康くれてありがとう
台所私一人の縄張りだ
老い二人喜怒哀楽が消えている

鳥取市　中村金祥

地に足をつけてゆったり丑の歳
世の中をネットサーフィンして眺め
中国産安くてうまいものがある
春一番吹いて大きな深呼吸
ロスタイムあって見事な梅桜

倉吉市　牧野芳光

けし粒のような星でも夢を抱く
村中の音を拾って雪しんしん
行きづまるたびに道具を買い大工
半分になっても確と照らす月
一本の茅でも風が押しに来る

倉吉市　山中康子

安全を蔭で祈って総動員
いざという子や孫たちの底力
一命をとりとめ胸の整理する
空と山仲の良い日も悪い日も
突っこまれしどろもどろでありのまま

倉吉市　山本玲子

体調がよくて人間ドック入り
バーゲンで女は羞恥心捨てる
旅の縁小さく終る片思い
人並みとは褒めか貶しか考える
防犯カメラに写るわたしは超美人

倉吉市　最上和枝

使わない小箱を貯めて狭い部屋
冷蔵庫いらない気温0度以下
筆取れば辞書を必ず膝元へ
伯耆富士変わらぬ姿手を合わす
肩が変腕が上がらぬ五十肩

倉吉市　猪川由美子

輝けるうちに辞めとく美学です
派遣切り聞けば質素も感謝でき
陛下さんも人間たまに言うホンネ
訳有りの泥舟総理いつ沈む
勿体ないもったいないで年が暮れ

倉吉市　松本よしえ

眠れぬ夜屠蘇の残りがまだ有った
こそこそと竹輪かまぼこ痩せて来た
浜茄子のトゲにふわりと雪帽子
湯タンポも温い布団にもぐり込む
大根の白さ無残に擦りおろす

害少しあるお薬を飲んでいる
よき友に心の窓を開けておく
冬になりみんな猫背になっている
大寒波家族無口にしてしまう
足腰を鍛えたいので踊りの輪

米子市　門脇晶子

子や孫もみなすこやかでありがたい
毎日を呆けないように努力する
身の上話親身に聞いてついほろり
ふとした言葉が波紋なげかける
適齢期の孫の事まで口出せぬ

米子市　光井玲子

雪降って霊峰大山らしくなる
世界数ヶ所戦はやまぬお正月
紋付を着ると立派な父になる
七草がゆ今日は私の誕生日
三丁目の夕日はたぶんこのあたり

米子市　青戸田鶴

初競りにいのちをかける大間産
三月の風はおんなを桃にする
賀状が返らぬ元気でいるようだ
老いてなお子に従えぬこころうち
それぞれの過去があろうに再生紙

米子市　白根ふみ

遠い祭り灯紋提燈の良き時代
門構えで人の幸せ測れない
金閣が逆さ池にはシルエット
身づくろい糸と針とは定位置に
毒のある魚の旬がたまらない

米子市　野坂なみ

風邪引いていると前置きして歌い
大雪になり着ぶくれの上着脱ぐ
口紅が剥げる頃には嘘も剥げ
手詰りで口紅なしの店じまい
リストラで現住所から暇出され

鳥取県　松川行男

暖かい話題待ってた新春の耳
我が娘には口では何時も負けている
退屈な日はない庭の草伸びる
馴れてきたぺったりこんの空財布
幸せを継ぎ足す新春の祝い箸

鳥取県　山本正光

どっしりと構えた牛を見習おう
たわいない話で和む同期会
六十四年前はじいじも兵隊さん
戦争をせぬ国日本六十五年
いきいきサロンどんど祭りはありがたや

鳥取県　深田倶久

鳥取県　竹信照彦

人災の不況で明けた丑の年
解雇され路頭に迷い何を買う
なけなしの良心突いた派遣村
停電が家中の熱遮断する
不況だから笑顔でいよう丑の年

鳥取県　細田裕花

裸木は春に備えてエコ暮らし
うきうきと回転寿司の皿を積む
人様が運の良し悪し言いたがり
幸福が逃げないようにきれい好き
時時は戯れ合い絆たしかめる

鳥取県　北村稔

酒呑みのあんたいやだと言えません
正月はきのうが今日になっただけ
本年もほどほどにして行くつもり
ノーベル賞宝くじよりむつかしい
雪の下野菜必死で堪えている

松江市　小川注湖

初詣で願いどっさり唱えてる
喜寿の顔人生語る祝い膳
よいことだ打たれるほどの杭になれ
箪笥だけ移しただけで別の部屋
初詣で指切りげんま神とする

松江市　三島淞丘

後続の居ない孤独をひた走る
好不況どうあれ今日も陽は昇る
文明よ牛の力を見くびるな
プライドを捨ててのびのび老いを生く
リベンジのチャンス信じて励む日々

松江市　津川紫晃

不景気な顔で転がる五円玉
千羽鶴まんなかの鶴苦しそう
指切りは本気小指がしびれそう
降りる駅良く知っている千鳥足
大掃除邪魔せぬだけで役に立ち

松江市　川本畔

着ぶくれてとうとう牛になりました
お雑煮を三つ頑張れそうな朝
鵯を追って目線は木の天辺
のんびりと夕日の海へ鳥になり
満月のどこかで水の音がする

松江市　安食友子

お饅頭そっとわたしにだけのイブ
ぶるぶると黒豆ばかり狙う箸
シェーカーが抜群ですねそのリズム
天井の木目も憩うグッドナイト
ナチュラルな白髪も皺もまるでペア

松江市　松本知恵子

雪よ降れ記憶喪失になるほどに
雪嫌いタマを天へと呼んだから
ノンフィクションで書いてもみたい私生活
甘いみかんきっと朝日の当たる位置
うきうきを見つけながらの生きるコツ

出雲市　小白金房子

三宝へ天地のめぐみ新春を盛る
一升瓶置いて友情呑み交す
目先欲信じ人生狂い出す
千木高く新春の息吹を身に受ける
丹念な老母の手づくり新春の膳

出雲市　持田多輝子

値下りの話に耐えて稲を刈る
肩書きをはずして農にカムバック
不況風危機感のない党もある
一枚の年賀で絆あたためる
人間のエゴがひしめく暮れの町

出雲市　岸桂子

ひさびさにおからを炊いて亡母想う
おみやげにしたい空気のうまいこと
気持とは少しずれてる季が移る
自己流に剪定すれば青い空
気楽さの会話の中に出す尻尾

出雲市　伊藤玲子

悪し事は立春までと線を引く
降り続く雪悲しみに蓋をする
風の音解雇の友を眠らせぬ
友達のおいしいところ盗み食う
円高をチャンスに旅と洒落てみる

出雲市　多久和敬子

真っ直ぐな道を歩いて矢が刺さる
今年こそ何か生もうと考える
満ち欠けが続いて幸せになった
体調を崩し平凡感謝する
すれすれのところでチャンスまた逃がす

出雲市　石倉芙佐子

憎いほど強い力士に華がある
客席に彩りそえる高島田
雪起し今にも雷落ちそうだ
二メートル先が見えない荒れ模様
矢絣のモンペで送った過去の駅

出雲市　富田蘭水

いい年でありたく服も新調す
ありがたいまわる御神酒をやたら褒め
お年玉私をしのぐ人になれ
七草を頂き八十路はげみゆく
正月を艶々温泉長者ぶる

雲南市　毛利　幸

じっくりと丑の歩みを真似てみる
酒好きが今宵も暖簾分けて入る
手帳には書けない私秘めている
足湯して隣の人の顔覗く
ぴかぴかと光る物には影がある

島根県　伊藤寿美

孫のメモ片手に喜寿のEメール
恥と罪重ねた喜寿の年賀状
親鸞正忌懐炉も聞いているお経
枯葉はらはらもう惜しむもの何も無い
移民百年CHANGEを生んだ星条旗

倉敷市　撰喜子

座談会の空気読めずに一人浮く
深呼吸すれば脳味噌風邪をひく
趣味の友増えて賀状をカットする
銀行とは無縁財布は火の車
働くだけ遊びを知らぬわが夫

美作市　福原悦子

学歴に勝る世渡り汗光る
今もなお苦楽を越えて生きている
巣立つ子は独立独歩青い空
神様に奇跡を願う百度石
子の願い親の希みと擦れ違う

美作市　山本玉恵

しっかりと恋抱きしめる青りんご
シナリオと少し外れた冬の章
寝返りを打てども誰もいやしない
ロスタイムでは無い空想のどまん中
ポケットに触れると笑う小銭たち

美作市　大石あすなろ

常識の殻を背負って生きている
赤を着る勇気をテレビからもらう
暗中模索森の深さの中にいる
良妻賢母返上します三ヶ日
迂回してどんでん返しの策を練る

真庭市　国米きくゑ

新年を祝うワインを開ける音
汗しみた襷をつなぐ火のランナー
思いやる心絆を強くする
切れそうな夫婦つないだ児の力
曽孫の笑顔家中春にする

真庭市　福嶋智恵子

パソコンとメールで済ますご挨拶
歳月の感慨も無く松かざり
労られ手持ち無沙汰のお正月
木枯らしの芯まで冷える田舎道
レトルトの味にも慣れて独り住む

竹原市　石原淑子

見てくれは悪いが私今が旬
ほんわかとうちとけさせるくになまり
自惚れも佳しいい顔になって来た
人恋し週に三回診療所
私のために使える午前四時

竹原市　岩本笑子

破魔矢買う願いはナース受験です
群集の中で突然除夜の鐘
生きてゆくための群れならまん中に
明日嫁ぐ娘よ風になろ雲になろ
自画像の何か言いたい顔である

竹原市　時広一路

鍵なんか無い日本間の素晴しさ
生命線教えてくれぬけど元気
読めるけど意味の判らぬカタカナ語
同じ道ばかり歩いた万歩計
千手観音手伝って欲し選挙戦

宇部市　平田実男

フルムーン皆奥さんに手を引かれ
冷や飯がやがて血となり肉となる
敷かれてはいるがとっても温い尻
あちこちであくび講師も眠くなる
格差より段差が怖い老いの足

山口県　安平次弘道

恥をかくことが嫌いな尾骶骨
花の下詩心は今日も眠くなり
人ひとり許せば敵も許せるか
風穴を開けると神が覗き込み
妥協ぐせがついて人間らしくなり

東かがわ市　伊勢八重子

まっさらな大空染める御来光
七草を食べて胃腸の機嫌とる
筆不精詫びてる声の年賀状
喜寿の坂まだまだ知らぬ事多し
初恋はきれいな過去の忘れもの

東かがわ市　川崎ひかり

言わずとも解ると決めていた不覚
明日あると誰も約束してくれぬ
百歳の気骨あふれる夢の文字
あれこれと取り止めもなくなつかしむ
舞い落ちるまでのドラマを演じ切る

東かがわ市　清川玲子

無駄口は置いてしっかり食べるカニ
何もかも願い叶うと吉のクジ
一坪の庭に一坪だけの初春
温泉の湯に腰痛を置いて来る
道草で英気養う年女

再びのジュリー少うし細くなり
市街地の昔牛舎があったとこ
手の中の切符が妥協せよと言う
有為転変生きた私の現在地
割り切れば昨日の今日でお元日

松山市　宮尾　みのり

専門家どうしてたんだ大不況
給付金もらうがその手には乗らぬ
雪しんしんこの世を浄化するように
下り坂一気に加速ついてくる
愛想ない夫婦で客の絶えぬ店

松山市　古手川　光

合掌の姿でカマキリの凍死
人間国宝　神のリズムで紙を漉く
リラックスの形にシャツが干してある
お財布も脳もこの頃すっかすか
心の揺れだろう白からうすみどり

西予市　黒田茂代

同人名簿発行のお知らせ

七月一日に川柳塔社同人名簿を改訂発行致します。変更のある方は、五月末日までに本社事務所へご連絡下さい。尚個人情報なので、ご本人からのお申出に限り改訂致します。

同人誌友部

09ふあうすと川柳社80周年記念大会
平成20年 年間賞発表

日　時　4月12日(日)　午前10時開場
会　場　兵庫県民会館９Fホール
TEL 078-321-2131
(JR元町・阪神元町駅北へ７分)
お　話　今川　乱魚（㈳日川協会長）
宿　題　締切11時30分（各題２句）
「　傘　」ふあうすと　杉野まつ子 選
「ベ　ル」ふあうすと　安西まさる 選
「人　間」ふあうすと　角本　華峰 選
「咲　く」川柳宮城野社　雫石　隆子 選
「　声　」川柳塔社　河内　天笑 選
「選　ぶ」番傘本社　田中　新一 選
「太　い」時の川柳社　平山　繁夫 選
事前投句「自由吟」
ふあうすと　赤井　花城 謝選
3月10日必着。ハガキで1句。(出席者のみ)
欠席投句拝辞　席題なし
〒674-0084 明石市魚住町西岡605-19
黒嶋海童あて
会　費　2,000円（記念品・発表誌呈）
懇親会　大会終了後、同会館10F　5000円
主　催　ふあうすと川柳社
後　援　兵庫県・神戸市・㈳全日本川柳協会 他

川柳塔のぞみ創立５周年記念
不二見川柳社との親善句会

日　時　4月28日(火)　11時開場
場　所　日光東照宮　晃陽苑　葵の間
参加費　２５００円
懇親宴　５０００円　17時　開場
課題と選者(各題２句)
共　選　**締切**　12時半
【　門　】　渡辺　裕司　　田頭　良子
【咲　く】　川上　大輪　　橋本　祐子
【ノート】　渋川　渓舟　　木本　朱夏
【たっぷり】　てじま晩秋　　吉本かめ女
【結　構】　荻原　鹿声　　播本　充子
席　題　　なし
投句歓迎(用紙自由)　締切　4月10日
〒193-0832 八王子市散田町2-31-3
播本充子 宛て (042－665－3172)
投句料　１０００円（発表誌呈）
賞　各選者秀句に呈賞
川柳塔のぞみ　代表　播本　充子

川柳塔の 川柳讃歌 ㊿

木津川 計

別嬪が一人も散歩しない道

土橋 はるお

京阪神の違いを五〇音の語感で言うと、京都はやわらかい〈はひふへほ〉、神戸は軽快な〈パピプペポ〉、大阪は濁って〈ばびぶべぼ〉。ば行の言葉にロクなもんがなく「馬鹿に病気にぶ細工、便所、ボケ」とあるシンポで僕が説明すると、隣の佐治敬三大商会頭が、「便所だけは違いまっせ。大阪の女はみんな別嬪や」、なるほど、サントリーの会長はうまいこと言わはりました。察するにはるおさんの鳥取は別嬪不作の土地なんでしょう。

出世した友にお前と言えなくて

柿花 和夫

僕の家内が高校の同窓会に出席しました。ある女性に「いやあお久しぶり、〇〇くん」といわれた男は不愉快そうに「おれをくん付けで呼ぶのか」。三十人ほどの一座はシラーっとなったのだそうです。傲慢な男はチリの日本大使館で公使を務めていました。

公使がなんぼのものじゃ?、と僕は聞きたいくらいですが、厭な人間がいますね。ですが、和夫さん、臆することはありません。「お前」でいいのです。それが同窓会ですから。

こうぞみつまた一万札になろうとは

白根 ふみ

「梅檀は双葉より芳し」と申しました。梅檀は芽生えた頃から香気が高いように、大成する人は子供のときから並はずれてすぐれているの譬です。しかし、約束されては面白くありません。誰もがサラリーマンになる大学の同窓会は面白くなく、下へ行くほど、即ち、小学校の同窓会が一番波瀾に富むのです。職業は多様、中にあのガキが神父?もあるのです。こうぞもみつまたもただの木ですが、その樹皮はチリ紙でなく万札にの大出世です。

刃こぼれのままで夫婦の老いる坂

中塚 礎石

ですが大出世の大変身は、ごく少数でしかありません。あらかたは世に埋もれ、忘れられて消えているのです。礎石さんを言うのではけっしてありませんよ。

僕も含め、しがない男の平凡な身すぎ世すぎだったにせよ、白刃を何度も交じえずしては生きてこれなかったのです。そのたびにこぼれた刃をむしろいとおしみながら男は老い、妻も従うのです。礎石さん、刃こぼれはあなたが勝ち得た勲章です。奥さん共々お幸せに。

下積みの石が力を溜めている

三島 淞丘

読んで字の如き上段の礎石さんのような方がおられるのです。基礎固めの石として、重たい重量に耐えるのです。

藤山寛美の当り役「下積みの石」は、ありったけの五百万円を見ず知らずの夫婦に捧げた、というのも心中行の悲劇から救うためでした。が、その美談は親友の行いとみなされ、あげく職場を追われる割の合わない男の物語です。つらい憂き目の下積みの石は一杯います。黙って彼らは力を溜めています。今に見ろと。

左からも右からも見て考える

岩佐 ダン吉

物事は十分見極めねばなりません。左から見ただけでは右が判りません。上からも下からも裏側も、そんな観察を矯めつ眇めつと言いました。恐るべき観察眼の達人を「眼光紙背に徹す」とも申しました。

「純ちゃんと叫んだわたしがバカだった」と自嘲しても、到来した格差社会はどうしようもなく強大です。「理性が眠れば妖魔がめざめる」とスペインの版画家ゴヤは言いました。ダン吉さんに倣い、四方八方の視点です。

(『上方芸能』誌発行人)

自選集

林　瑞枝

不死鳥の翼にすがる心の灯
傘寿なおゴーゴー体操して生きる
献身の白衣の好意忘れ得ず
絵は未完花はさよなら言いはせぬ
打ち解けて話せば解かる薔薇の棘

前　たもつ

太陽の恵みにみんな命ふき
万歩計長寿検診二重丸
ワークシェアリングわが家とっくに家事分ける
夫婦げんか仲よくなってくり返す
こって牛見縊る相手知っている

三宅保州

月曜日急に散髪したくなる
火曜日は燃えないゴミを出す日です
水曜日医者のはしごをしています
木曜日店のポイント三倍日
カルチャーは第二第四金曜日

宮西弥生

ちぎれ絵の原風景に老母在す
告白も別れも花の咲く日まで
雲ゆきが転じて春へ加速する
ぼろぼろまで着倒す老母の木綿針
ゆったりと暮らそ七合目のわたし

森下愛論

花粉症マスク互いに目で会釈
優しさに触れるとよぎる介護法
コンビにで独り身うろうろ寂しいね
老い進むふくらむ夢を縮ませる
晩齢の己惚けずに自尊心

八十田洞庵

自画像のせめてバックは晴れにする
舞台そで静かに出を待ついぶし銀
餅食えばのどを気遣う妻である
根回しがやっぱりきいた今日の椅子
すれ違う夫婦に愛のメモがある

俺狙う刺客美人の方がいい
貸し借りは無いからいっつでも逝ける
せっかちな友だサクラも見ずに逝く
雪しんしん愛の亀裂へ酒をつぐ
ネオンの海で溺れ死んだら本望だ

両川洋々

人がよくて繕う嘘が見当らぬ
自己過信どうにもならぬ日々つづく
投げ返す気力うすれた夜のしじま
妥協癖夢までかすむ齢となり
卒寿過ぎ診察券の数ふえる

阿萬萬的

誘われて旅に出ようか寒い胸
ひとり酒母に抱かれた遠い夢
梅林で男を責めている蕾
母だけを愛した父の帽子掛
齢喜寿恋をしようか山の神

板尾岳人

からからと風と落ち葉の鬼ごっこ
鏡の奥知らぬ自分に目を凝らす
わが影の背なの丸みもいとおしい
雪の雲またも寡黙に慣らされる
梅綻び何かいい事ありそうな

奥田みつ子

緊張がふっと途切れた虚を突かれ
ピンチにも真っ向勝負変えぬ自負
余計な口出すので話纏まらず
交渉へ押すか引くかで悩む日々
ボタン掛け違え乾いた風に遇う

河井庸佑

偽装ならおんなに勝てる訳がない
冷凍魚突つけばきっと目を覚ます
皹の指一斉に喋りだす
万一へ住所と名前持ち歩く
不安的中朝から雨が降っている

川上大輪

啓蟄に地球の全て目を醒ます
栄転の内示我家に春巡る
永久に流れも清き五十鈴川
地球儀を洗う生命の雨が降る
編棒に吊られて踊る毛糸玉

木村あきら

年男の呪縛が解けてゆく初日
父を語るには大きな猪口がいる
歳の数だけ腕立て伏せがまだ出来る
象はあふれて職を探しているのです
職業欄に堂堂と書く無の一字

小島蘭幸

似顔絵のわたし弥生へ歩きたい
不景気へ門前雀羅知らされる
朧月きらきらしたい夜もあろう
社訓には内部告発せぬように
実力をつけて吹きたいラッパ選る

小西雄々

この土の道しか知らぬ牛である
樹々の芽がたっぷり浴びている冬日
一隅を磨き続けて来た砂だ
手作りの村でいのちの音を聞く
逆転のチャンスをくれたのは女神

斉藤姦

夫婦して京都で歌舞伎観る初春で
じいちゃんは孫に抜かれた背の高さ
川柳を初歩からも一度学びたい
妻の庭千生り瓢箪植えようか
映画化の鶴彬を観てみたい

塩満敏

亀という漢字まさしく亀である
たましいも休む眠っている時間
漁師の網より必死蜘蛛の網
居酒屋のメニュー楽しく迷わせる
油断するたびに頭の毛が抜ける

新家完司

あの誓いどこへ置いたか二日酔い
送る人送られる人晴れて来た
老化ですという診断に慌てない
パソコンに頼り書くのが疎くなる
うきうきと電子レンジを開けている

恒松叮紅

頑張りの節目節目に飛ばす檄
生き甲斐は頼りにされている居職
アラームで喜寿の日課作動する
宝恵駕籠の主ほほえむだけでいい
独りの絵かける至福の自己欺瞞

津守柳伸

神さまも大変なんだ初詣り
おみくじに八十路の春をくすぐられ
この里に生きてぽちぽち五十年
何が出る鍋かふつふつ雪になる
ノーベル賞まだ宇宙には夢がある

遠山可住

春の陽へ街も解凍待っている
数が減り冬から春へ星の色
春彼岸間のびしてきた句読点
ことことと春の日長の落とし蓋
いつの世も変らぬものと落ち椿

都倉求芽

無量寿の松のみどりを摘んでやる
偽善かと揺れる情けのボランティア
生かされて生きるうれしい事ばかり
倹約を慰めている筆の先
そんなことどうでもよいと丑の年

土橋　螢

屠蘇のあと兄嫁さんの餅三つ
ひと呼吸おいて新年会がえり
人という温もり一人ずつ拾う
真実を視て見ぬふりか初詣で
人情のブランコ揺らし森の姫

中原諷人

七十歳まだまだハート　フルカラー
グーグルで捜すわたしの現在地
迂回路でこっそり姿勢立て直す
芋麦栗よ焼酎になり本望か
あと五年海外見たいウォーキング

西出楓楽

月曜になぜ新聞は休むのか
病院と銀行が混む月曜日
月曜の午後は主婦にも暇がある
月曜日少年係が署長室
校長の夢快晴の月曜日

仁部四郎

温故知新

退職金それから病んで居る便り
一人旅向いの席も箸を取り
落選のまだフランスへ夢を持ち
三等車お互いさまの足を出し

長谷川三司

汚職する身分になって見たくなり
ランドセル開けて見閉めて見背負って見
白髪など抜いてもらって春うらら
夫婦どちらも言い過ぎたなと思い

広津　柳慶

奥さんは乍末筆だけの人
蛙なけなけやがて埋め立てられる池
盗まれるしあわせ盗むふしあわせ
今死ねば二三人がとこ泣くならん

福田　妄夢

二日とはもたぬきのうのわが怒り
更年期内科外科歯科忙しい
鶏を飼ってオムレツハムエッグ
鉛筆の尖で人事を弄び

藤本　満年

―合同句集『私達』―
昭和三二年発行　選者麻生路郎

五煙抄

小島蘭幸選

大阪府　神野千恵子

厳しいとゆるんだ顔で言う議員
ラストダンスなどとロマンのあった頃
ポケットの中に小さな城を持つ
白一色町もリセットしてほしい
ふつふつと地平線から湧く憎悪
シンプルな言葉で話す人が好き

藤井寺市　吉田喜代子

トナカイがベランダに居る十二月
日本から注連縄飾り消えて行く
夢叶う御守りを買う二〇〇九
直球に妻の返事は変化球
内定消え四月が来ても遠い春
夢叶う時まで体もつだろか

美作市　小林妻子

老人と言われて減らぬ雑煮餅
同じ穴の狢が天下取るけんか
雪景色暑中見舞に写しとく
誕生日まだ覚えてた妻が居る
借金も次の世までは追って来ぬ
牡牛牝牛がひと目で分かる農育ち

田辺市　大峠可動

風の自我堪忍袋すぐ破り
近代史日本は躓く事ばかり
晩成の男話題を溜めている
不器用でときどき止まる不正脈
病んで癒え癒えてまた病む万華鏡
風は斜めに二月三月木を揺すり

紀の川市　辻内次根

年金の暮らし一から一を引く
ぼんやりと小春日和の遠い音
スリッパの乱れ心に隙がある
一章を読んだときから不眠症
デジタルにしてから寒くなった部屋
ジャンケンポン先に恍けた方が勝ち

リベンジに燃える男の素っ裸
運賃の事は言うまい母の作
立ち退きが不況の風に立ち消える
缶拾い加わる今朝のニューフェース
ルール無視叱る大人が居なくなり
通学路アニメソングが良く揃い

羽曳野市　森下一知

言うだけは言ってさっさと旅に出る
昭和一桁冷や飯だろうと何だろと
娘はきびし父さん歩け書け笑え
笑顔まで節約するという女
義理の通夜ただペコペコとして帰る
考えた挙句の嘘をじっと見る

竹原市　國實力

生きてきた時代背負ってバトンパス
わかったとだけのメールは息子です
不景気が歯止めをかける温暖化
行き過ぎる人の流れはセピア色
助け合い同じ歩幅の道歩む
いつまでもきれいな色を着ていよう

神戸市　早川孝子

縮まぬよう夢に生命を吹き込んだ
B型の嫁のパワーが刺激剤
解答を得られぬままに年が明け
死んだあとどう彷徨うの日記帳
冬を越す花と生命を語り合う
一喜一憂三キロ痩せて美女になる

横浜市　川島良子

初日の出仰ぐ命が重くなる
牛乳も添えて寿ぐ初春の膳
呑んで寝る牛に茶の間を譲る初春
春耕の牛にも尽きぬ夢がある
食べて寝る牛にはならぬ万歩計
ゆっくりと踏み出す軽い靴を選る

紀の川市　吉村幸

いさぎよく散る花びらをもてはやす
終電も始発も早い過疎の駅
それぞれが核を抱いてる嫁姑
住吉の森が二人の愛つつむ
ご期待に添う気なかったマニフェスト
未来へと今羽ばたいているヒヨコ

豊橋市　藤田千休

知りたいという欲望が眠らせぬ
知り過ぎてしまった鍵を取り替える
今日出来る事明日も出来るとかぎらない
ダイレクトに届くえくぼに癒される
言い負ける血液型は母ゆずり
ちっぽけなことと男は言うけれど

大阪市　尾崎ゆめ

もうと鳴く牛の賀状にある祈り
末吉と出たよおみくじ引き直す
気をつかう一人の孫へお正月
凧揚がる空のあおさはすみに澄み
葉芽花芽桜の小枝引き寄せて

唐津市　岩崎　實

風に舞う枯葉と歩く職探し
孫はまた新しい靴はきかえる
手がいらぬサボテン好きな母だった
祖母の手はいつも拝んでくれました
釣竿を一本持っている自信

福岡県　林　さだき

在り方が刻まれている手も足も
見えているものを見ている冬鏡
阿吽こそ相撲の極意白と黒
一浪は一年長生きすれば良い
純粋に孤独に生きる強さ持ち

今治市　渡邊伊津志

三世代揃い至福のお元日
聞き役のよさに和らぐ風がある
息災に老いる幸せ日向ぼこ
啓蟄やわたしも虫も穴を出る
好不況の落差にあわす処世術

阿波市　三浦千津子

褒められた事など誰も言い出さぬ
悪いとこ何処も無かった骨きれい
お隣へ声掛けておく位牌堂
百年を刻み続けてきた命
まだピンチ理解してない御曹司

大洲市　花岡順子

四百の賀状が話し掛けてくる
三食と晩酌感謝して暮れる
好々爺僕の顔ではまだ未熟
理科系の孫へ雑学説いておく
漢字力総理になったばっかりに

香南市　桑名孝雄

Uターンして旧正の餅を食う
残り火を炬燵でぬくめあう夫婦
指切りゲンマン曾孫に針を呑まされる
卒寿への延長戦と屠蘇を酌む
花便りもらって古木目をさまし

香南市　近森　功

おみくじは無理はするなと末吉で
丑どしを粘りの一歩前に出る
月光に霜がきらめく里の冬
厳寒を石油ストーブ無しで耐え
腕時計二分進めて半世紀

竹原市　六田半徳

自分史の青春編を削りたい
耳栓もしないで愚痴を聞いてくれ
菜園の大根配る輪を広げ
一年分の親孝行をして去ぬる
究極の節目我が家に春よ来い

竹原市　土井輝恵

人生のプロムナードは無いと知る
小さい春が覗きそう今日の窓
生き下手で風の重さが計られぬ
人生の黄昏に朱の色を選る
大声で畠で唄って憂さ払い

府中市　馬場利子

そして朝まず一服のお茶の味
俎板の上にきょろきょろ高齢者
誘われた若い日があり今がある
おめでとう戦友の賀状に涙する
人参のジュースで僕は今日も生き

雲南市　福間博利

喜寿過ぎた女が迷う風が吹き
散歩する二人の話風が聞く
天地人素直に読んでくれた人
自分流に歩く姿を見せる亀
俎板の向うに見えた高齢化

雲南市　渡部好榮

冷蔵庫いっぱいにして冬籠もり
北風に干大根の笑い皺
空元気雪十糎もてあまし
若返る気分にさせる春の風
忘れたい事を忘れてくれぬ脳

雲南市　武島ちよえ

集合におくれて視線浴びている
ダイエット意気ごみだけの空まわり
遺言に資産はないと書いておく
二人居も妻の縄張り寄りつけぬ
格差なく明日は必らずやって来る

米子市　見山温子

痕がつくほど抱きしめて帯結ぶ
傷痕が加齢とともに伸びている
目をつぶる眼の裏は騙せない
終盤に抜き去る足を鍛えている
家持の詠んだ景色の年始め

鳥取県　加賀田志延

首に巻く孫の手編みが温かい
ほろほろとロマンスグレーの背が愁い
牛を売る祖父の胸中垣間見た
ほどほどの話題合うのはやはり夫
障害の夫と明るく再出発

鳥取県　岡本幸枝

鳥取県　西谷悦子

落葉樹陽を浴びホッとからだ干す
喝采を浴びて下積み生きてくる
ほのぼのと風車が回りエコもらう
ほのぼのと童謡唱歌聴いてます
わたくしへ千の風なる命綱

鳥取県　斉尾くにこ

ロスタイムまだ全身を磨いてる
クリスマス年に二度あるこどもの日
ロボットも利潤社会の渦の中
セーターをかぶる自分の濃い匂い
ライバルの無いお月さま淋しそう

鳥取県　鳥越鬼一

好きやねん強くて弱いタイガース
雪が降る少し地球を冷やすため
寒くても地球のためと我慢する
八年は生きる積りで柿植える
太郎一郎どちらもたいして変わらない

鳥取市　近藤秋星

祝賀会までお雑煮はお預けだ
チュンチュンとお年賀に来た雀たち
七草粥食べねば今年始動せぬ
人はみな命を食べて生きている
暖かくなるまで俺は冬眠だ

神戸市　木村忠義

胸を打つ少年からのこんにちは
柚子ふたつ湯船の中で寄り添って
雑草のように地球を守らねば
大笑いしてると腹がすいてきた
心にもトイレにも花絶やすまい

神戸市　山崎武彦

夕焼けの広さ明日を信じたい
広すぎる基地だ昭和の裏表
星月夜許されているのは私
人間のエゴに地球が熱くなる
宇宙人と愛を語らう時がくる

三木市　広瀬房江

若松へピンクの百合が美しい
家族写真それぞれカッコつけている
嫁三人飲んで喋って仲がよい
選ぶのも寿命の内と医者替える
闘病の二人三脚これも幸

尼崎市　小池幸子

百歳も夢でないよな不安感
娘の手借りたおせちも無事並ぶ
七草を入れたおかゆに癒される
ポックリと逝きたいけれど長生も
知らぬ事多く八十路もまだ逝けぬ

お宝か屑か鑑定せぬが華
現実派宝くじより馬券買う
アイドルの名前覚える前に消え
古火鉢も都会へ出ればアンティーク
熟年で熱気むんむんコンサート

奈良市　辻内　げんえい

飼い猫もすり寄ってくる日向ぼこ
雲水の読経が白い息になる
僕ジャンボ妻ロト6の運だめし
家々の明かりあたたか大晦日
現世は百鬼夜行の絵巻物

京都市　清水　英旺

手料理に五〇年の歴史みる
生かされて歳神様に手を合わす
おさそいを受けて嬉しい忙しさ
幸せと思う人には福がつく
幸運な雪金閣寺積ってる

大阪市　山本　加お里

義理だけを確と入れてるのし袋
家中の予定で重いカレンダー
正論を吐いて孤独に堪えている
学生の仲間意識で吸う大麻
頷いてくれる相手の有る暮し

大阪市　寺井　弘子

春を待つ掌に温かいティーカップ
ぼんやりと記憶の底に母の歌
ベテランとおだて修羅場に送り込む
生き延びる秘策を胸に懐手
検診は明日に延ばして日向ぼこ

大阪市　萩原　大朔

青い目の宿の女将のいる世相
演歌には辛い恋しか似合わない
温暖化海の底から悲鳴聞く
ダイエット期待はずれの器具並ぶ
妻からの醒めた視線に耐える日々

大阪市　西脇　義祐

マクドにも派遣村にもいたサクラ
ごったがえす神社に着物ただひとり
ロボットも無口で不況耐えている
正月の顔になってるネコと犬
病院も正月だけはおめでとう

大阪市　太田　としお

そこはかとなずな摘む手に春の音
小鳥啼きせせらぎの音かすかなり
過ぎ来しはまこと短かき喜寿の春
七草の粥ほのぼのと冬灯燈
収拾のつかない時は星を見る

大阪府　畑中　節子

河内長野市　木太久　正一

特攻で散った桜よ蘇れ
年賀状今年も自筆裏表
弱き者の味方と決めた労働歌
真空パックお節は便利ムダが無い
散歩道花壇の中に春の色

河内長野市　辻村　洋子

なぜなぜと孫にせがまれガリ勉に
玄関でグッタリしているパパの靴
子供まで家と外では別の顔
キラキラと来世までもと薬指
老いてなお胸こがす恋詠んでます

河内長野市　針生　和代

煩悩を大河に流す除夜の鐘
古希にしてまだ決めかねている老後
誇大包装一人娘を嫁に出す
枯れた脳蘇生させてる読書欲
子や孫に持ち上げられて使われる

吹田市　早泉　早人

ストレスを優しくほぐす初日の出
満腹もなぜか淋しいひとり膳
古里に帰ると見えた打開策
亡父と居る気持ちにさせる腕時計
逆風が続く重心低くする

吹田市　二宮　栄子

十年日記たどれば若い歳に会う
みそ汁をねだる仏と朝の膳
お隣りとお菜行ったり来たりする
独り居に隣の風が温かい
リハビリで元気をもらう病み仲間

堺市　羽田野　洋介

風向きを見極めてから参加する
男同士飲んで歌えばそれでよし
大変も余程でないと気付かない
喜怒哀楽七変化する長電話
まあだまだ小石ぐらいは蹴飛ばせる

堺市　大隅　克博

我が歳をもうからまだに変えてみる
風向きを読めば多少は義理も欠く
シニア券僕まだ歳は言ってない
小さ目のサイズも持って試着室
発車ベル立食いそばに未練あり

八尾市　中島　春江

神様も耳なりするだろ初詣で
補聴器も温い言葉はよくわかり
ランドセル道草出来ぬさびしさよ
物あふれ感謝できない子が育ち
来し方を皺にきざみてコタツ守

八尾市　赤木妙子

神も戻られ霜月の夕焼は緋色
掌に命の欠けら握り締め
衣食住気の持ちようで足りてます
愛読書に古典落語の全集も
いい話だけお裾分けしてあげる

泉佐野市　稲葉洋

この余白本音書こうか立前か
今はもう保守の権化で元闘士
蛍雪の友情古く遠くなり
尋常科卒の友居るノスタルジー
彼岸花何の暗示をして群れる

寝屋川市　岡本勲

夫婦ゲームに終りを告げる遺言書
日常をしばし忘れる飲み仲間
キッチンで夫泳がす定年後
若い頃の顔がそれかと鏡言う
夫婦ゲームもそろそろ飽きる七十路

岸和田市　中岡香代

春キャベツ夢はサッカーボールです
青虫が住む春キャベツ今が旬
はいはいと答え大きな音がする
文明が地球の首を締めている
生きているこれが奇跡と感謝する

藤井寺市　増井ヨシ枝

自家製のユズの至福よ仕舞風呂
オメデトウ目白今年は番です
野良猫としばし会話の日向ぼこ
墓参りタヌキ親子も来てました
紅椿地を染めなおも人を恋う

富田林市　古田千華

葉牡丹と話題はつきぬシクラメン
逆光で撮ってもらうと美人だよ
大きさの不揃いがよい冬苺
口出しはほどほどにして花のころ
咲くときがきて母だけに見送られ

豊中市　松尾美智代

大好きなごまめ三袋炒りました
黒豆もやさしく煮えて大晦日
さすが湖東今年も雪が美しい
足りぬ物いっぱいなのに充ちている
ときめいて指を折ってる午前二時

和歌山県　森下よりこ

年を重ねて紅白を見る平和
わけありの二人が聴いている演歌
一本道だけではないと孫に言う
いま少し生きたい鈍感力磨き
生かされているとつくづく一人の夜

和歌山市　根田よしこ

嫁姑牛になりたいお正月
年賀状うれしい便り飛び込んだ
婿どのは下戸で正月持て余す
初夢に亡父が出て来たどうしよう
不景気も我慢強さで乗り越える

和歌山市　坂部かずみ

不景気のドラマはじまる事始め
風邪引きの夫にやさしい茶碗蒸し
知恵熱がまだまだ続く大人です
冷凍庫から正月が顔を出す
ストーブを寄せて初雪便り聞く

紀の川市　宇野幹子

天辺で未練温めている熟柿
満月を浮かべて母の海が凪ぐ
芋を剥く一人ぼっちの影法師
人を待つ女のハート熱くして
冬木立微熱を抱いて春を待つ

紀の川市　北山絹子

青空が大きく見える窓が好き
温もりが冷めない中に封をする
女には今日も戦う城がある
明日へと繋ぐ善意の種を蒔く
北国は雪の深さに耐えている

岩出市　村中悦男

甲高い子らの声乗せ寒の風
宅急便娘に桃の花も入れ
反対と言ってしまった意地がある
おだやかな反対論にある真理
人生が彫ったと思う齢の顔

岐阜市　平野あずま

元旦の川で禊の飛沫浴び
輪飾に紅葉マークの若返る
円高の功徳ハワイへ羽伸ばす
ワイキキですんなり妻と腕を組む
定年の趣味生き生きと絵画展

横浜市　長島亜希子

正真正銘うちの丑たち和牛です
焼芋会の時だけ顔を出す仲間
恙なくホームドクター持ってない
会社にはない香りする背広脱ぐ
ごめんなさい年金で食べ遊んでる

東京都　高岡弥生

目に見えぬ宇宙の力感じます
間に合うよ日本の海はまだきれい
大不況何が大事か見えてくる
末の子がトランプできる歳になり
税金を戻すだけじゃん給付金

黙々と働き蜂の父だつた
やる気さえあれば老後に光るもの
軍隊が嫌い外地で生き延びる
七十で老けて仕舞った友の貌
九十八演壇に立つ血が滾る

草加市　飯土井　健　翁

財捨てて時代の波に乗ると決め
資料館こんな村にもある歴史
反骨は父系の血なり怒鳴り出す
いい酒を飲み満足なひとり者
本物のダイヤが私を笑っている

栃木市　岡　野　すみれ

ちと我慢すると人の輪広くなる
焼酎のさそい渋柿甘くなる
聞き分けのいい子に育ちちと不安
どっぷりと嵌った趣味に生きがいが
返品に応じませんと骨董屋

札幌市　小　沢　　淳

食わねども楊枝くわえた兄貴たち
災害でもないのに何で炊き出しか
偽善者の半端な情け仇になる
舵取りの無い日本丸泥沼に
追いかけて騙されたのにまだ国産

シドニー　三　谷　たん吉

妻介護夜の付き添い休肝日
病弱の妻でも愚痴が言い合える
情ないギンナンの無い茶碗蒸し
朗らかな友と飲む酒若くなる

唐津市　北　村　松　風

波乱万丈ドラマ演じるわたしです
戸袋の蜂の巣妻が退治する
孫入試わが安楽死におさいせん
柳友の気迫におされ太くなる

唐津市　吉　冨　節　子

かさぶたを無理にはがして自己主張
想い出は微熱のままに置いておく
人前で裸になれぬ体です
未来など今の地球のどこにある

高知市　松　尾　憲　子

神仏無にすがり心静かに
色重ね米寿の歳を迎えたり
老いの身は行く先未定の一人旅
賑やかな家族帰りて一息か

山鹿市　阿　部　ミツ子

正月は子も孫も来ず静かすぎ
紅白も年毎興味失せる老い
言い訳は四捨五入して聞くことに
いい人を続けてどっと出る疲れ

宇部市　高　山　清　子

上向きを許さぬ風が吹き荒れる
孫達も親に逆らう年になり
いい風は遠いもがけばもがくほど
ばあちゃんの背中に温い家族愛

府中市　藤岡ヒデコ

初売場縁起かついで財布買い
寒風にさらされ強く咲く椿
福袋何個も買って恵比須顔
小雪舞うカイロ頼りに犬散歩

府中市　岩本雅代

いい便り鼻歌弾む丑の春
肩の力抜いて女に戻る時
集中力欠けてコップの派手な音
飼い犬も家族の顔で客迎え

出雲市　川島和歌子

城下町鑑定団に乗ってこず
領収証どんどんたまる医者通い
正月が明けて本気で脂搾り
在宅と決めていたのに呼ぶチラシ

松江市　松浦登志子

もーもーと丑の声する年賀状
杵搗の餅の粘りに負けられぬ
綿帽子かぶって木々は春を待つ
逆立ちの出来栄え孫は満面で

松江市　山根邦代

眠れない夜の長さは倍になる
成績の悪さは個性ではないぞ
成績も個性も伸ばす塾もある
気の弱い男も懸命に誓う

松江市　相見柳歩

孫のため作る竹馬杉鉄砲
手作りの遊具喜ぶ孫を待ち
爺ちゃんの吊し柿よと孫の笑み
病院の窓にへばるは横着な鳩

安来市　原煩悩児

残高の無い通帳と睨めっこ
携帯を変えてあれこれややこしい
ちっぽけな楽しみ春を待っており
こっそりと渡してほしい向う岸

雲南市　菅田かつ子

総理のネ国語問うのはいかがかな
寒くても燗はキライな変な俺
美しいゆえに冷たい冬の月
マドンナもあれ雪女猛吹雪

境港市　中井虎尾

年末のジャンボが夢を連れて去り
カロリーも支出も落とす暇がない
目的が小さくなって伏し目がち
髪形を変えてフレッシュ心掛け

米子市　吉田陽子

よく生きた父母越えて傘寿くる
太平洋晴れ日本海猛吹雪
三ヶ日嫁のおせちで炬燵守り
病む夫と静かに過す三ヶ日

米子市　小塩智加恵

みぞれ降る寒中水泳気勢上げ
寒に入り水の冷たさ身にしみる
人の名も思い出せずに頭下げ
曾孫はお年玉見て正座する

倉吉市　藤井美津恵

コンテスト自信の美女に狭き門
まかせたい子は寄り付かず何思う
川柳と元気両手に八十路坂
ぴっかぴか猫の足裏みがきたい

倉吉市　前田喜美子

戦時中我慢ばかりをさせられた
運不運どちらもあって泣き笑い
打ちあけるチャンスが無くて片想い
しゃべり過ぎうっかり秘密もらしちゃう

倉吉市　酒井芙美子

初春に手の平広げ福掴む
天を突く榎を抱いて気をもらう
八十路坂賞罰なしの二人連れ
髪染めてずっと女で生きている

鳥取県　岩崎和子

忘却と幸背な合せ日なたぼこ
晩年の気楽ほしさに励む日々
煩悩のまわらぬ我はほほかむり
胸のドアたたくか亡夫あいてるよ

鳥取市　谷岡清子

百八っ流れる音に身は白く
生きる顔七草食べて良い笑顔
船首の座いつも揺れてる日ノ出丸
毒舌も刻んで噛めば甘い味

鳥取市　大前安子

牛年へ歩幅合せてゆったりと
世の中のすべてへ歩幅合せたい
咲けるだけ咲いてほしいと孫祈る
ロボットにお世話になった夢を見た

鳥取県　橋谷静江

牛歩でも農を支えた誇り持つ
腎臓を入れ替え喜寿へ夢を抱く
嫁ぐ娘へ恥もたっぷり盛って出す
格差ない国を創ろう旗を振る

鳥取県　岡村孝明

閻魔から夢を授かりある命
手古摺らす神の遣いのナース達
神仏に抗議中かな泣き喚く
右の眼の灯を消した後遺症

鳥取市　津村律子

新しい年を祝って夢を追う
亡夫のお陰で食に困らず生きられる
逝った夫バッグに入れて旅をする
良い飼主で犬も人間より果報

鳥取市　山口千代子

雪おこし亡夫とスキーの夢を見る
夢に見た新生活のスタートだ
川柳へスタート切ってひた走る
ぴったりと息合う二人素晴しい

鳥取市　坂本智子

仮にでも百歳生きる夢をもつ
ピリオドも百の命はすばらしい
三日後に無理が顔だす老いの日々
未練などないと心の裏見せぬ

鳥取県　飯野菖子

良く笑う家には鬼がそっぽ向く
手を広げ過ぎて傾く床柱
世界地図広げて夢の一人旅
炊き立ての新米食べてまた生きる

鳥取県　大塚美代子

嘘のない笑顔にひかれ好きになる
紅一点ふわりと空気裏返す
しあわせは終日恥る趣味がある
おみくじの最初のチェック恋愛運

鳥取県　田口清帆

可愛いな片言しゃべり笑う種
正月を過ごしやっぱり肥えていた
親子での初春の旅誘われた
帰省した子等と揃って鍋かこむ

加東市　黒崎美紗子

二拍して初日を拝む庭の木戸
迎春の階段一つ高くする
恒例の蟹すきタラバ三ヶ日
七センチ縮んだ計り老い襲う

加東市　岩本美緒子

のらりくらり牛歩で参るケセラセラ
猫にやるその声僕に分けてくれ
小刻みにハート震わすモネの前
私に鳥瞰図欲し人の中

加東市　中村和代

寒いなあ今夜あたりは粕汁か
変てこな言葉がふえて国語泣く
お役所が信用できぬ乱世かな
良田がつぶれて池もグランドに

加東市　安達厚

支え合い見えない明日も生きていく
あと十年しっかり遊び逝くとする
患いも神にまかせて楽に生き
減量も一時中断おせち攻め

加西市　金川宣子

変な年牛の歩きに安心を
初参り曾孫三人みくじ吉
モミジの手肩こりトントいい按配
初夢に七福神と千両箱

三木市　山口久子

忙中閑たまには妻を休ませる
黄昏て急ぐ家路は主婦の顔
半農半漁父は健気に過疎守り
心まで洗い清めた波頭

尼崎市　河津正治

やがて春四季は約束破らない
牛に似て座るといつも動く口
早い者勝ちすぐに手が出てしまう癖
期限切れ牛乳風呂でセレブな気

尼崎市　藤岡りこ

どしゃぶりの不況に耐える傘がない
無信心おみくじだけは買ってます
とじこめた心の鍵が見つからない
家を出た娘の部屋にも豆をまく

西宮市　石野照代

春来たと火の粉が告げる奈良の夜
心臓が生きろ生きろと脈を打つ
言い勝って一人で呷るコップ酒
駅までを歩けば景色倍に見え

三田市　福田好文

夫の介護人生勉強プレゼント
初歩きロボットの真似お見ごとに
何年も飲んだ薬の異常知る
介護中娘の一言が胸をつく

三田市　辻開子

初夢に側で寝て居たのがあの亡子
来る方も来られる方もお正月
惚けさせてくれはしません年賀客
書き初めは出してなかった年賀状

大阪府　坂口公子

年金が息切れをするポチ袋
もう一回目を凝らし見る一字違い
何や彼や取り繕うて年明ける
北風が里に聴かせるシンフォニー

大阪府　高木道子

豊作を喜び自慢繰り返す
乱暴な手書きの便り温かい
喜びも感謝もされず悦に入る
頼ったら頼り癖つき怠けてる

大阪府　小栢こずえ

露天風呂岩の向うは幽玄郷
春近し一枚飛んだ鰯雲
青い葉に恋を語るか紅椿
牛の背に乗ってる童子恋無想

大阪市　吉川弘泰

残念賞三百円で年も暮れ
内閣の人気上げよと栄誉賞
冷凍庫で落ちつく賞味期限切れ
世界中肺炎やでアメリカさん

大阪市　平井露芳

橋に立ち春の運河をこうこつと
陽も風も子供らのもの笑い声
紙雛にあられ供えて事足りる
人生の大きな傘の父でした

大阪市　吉田富美

スーパーでみんなしっかり表示見る
がんばればがんばるほどに変になる
ドーナツの穴から世の中のぞきみる
いい年になりそう元気に目が覚めた

大阪市　安藤なつこ

油断させ強烈な冷え戻り来る
事故以来一病背負う情けなさ
義理チョコはもう要らないと言えぬ夫
洋花活け若返りたい厄のとし

大阪府　西川冷子

なあお前一緒に行こうか向う岸
日本男児照れてたまるかノーベル賞
清らかな富士は私を和らげる
剪定も済んですっきり松の影

大阪府　若月祐作

財産のはずの人間切る企業
水仙の蕾知ってる父の汗
読書離れ脳の栄養失調に
風を読む蕾は四季を咲き分ける

八尾市　松葉君江

居酒屋は昼の会議の総仕上げ
腰痛を気遣う孫とボール蹴り
下腹も食のチェンジを待っている
お雑煮で今年ももめる嫁姑

八尾市　田邊浩三

餅焦し雑煮の香り引き立てる
政権が軋みだしてる造反で
引き算で生計立てる定年後
七草粥自家菜園の彩を入れ

八尾市　前田紀雄

反対と言えず煙草に火をつける
過半数止めと言うのに給付金
ケイタイにもて遊ばれる若い指
思いっきり不況を蹴って春を待つ

八尾市　寺川はじむ

居酒屋に紅一点の寒椿
初春にいらぬ歳だけ返したい
春来ても花は咲いても職咲かぬ
街道に歴史を語る石仏

豊中市　藤沢長一

古里やどこに立っても亡母がいる
豊中市　谷川勇治

自慢話隣は天狗さんらしい
八十五でんでんむしと歩調合う
饅頭が二つずつ減る老夫婦
豊中市　荒巻夢

オカリナが遠い記憶にふれてくる
除夜の鐘トイレに起きて遠く聞く
塚あたり枯れ葉踏む音優しかり
追いかけた仔猫が消えて悔い少し
豊中市　源田啓生

正月は妻のひとつのネックレス
手の荒れをいとわぬ妻の酌に酔う
視る気せん言うた紅白最後まで
悠々と動かぬ牛に憧れる
枚方市　小川良吉

下校の子ストレスためて蹴りまくる
嘘かさね生きた日暮らしもういいね
カラオケの拍手嘘ある温かさ
遊び下手今でもつづく戦中派
枚方市　二宮紫鳳

初夢に今年の予感胸躍る
初笑い皆んなの顔にも福来たる
ユーモアで笑って生きて医者いらず
孫の声凧と一緒に天に舞う
枚方市　河田洋子

久しぶり駆けより友の肩を抱く
勉強に夢抱いた頃華でした
遠い日の火種今でも抱いたまま
残り火をかき出し趣味に燃えている
枚方市　坂本ミヨノ

ムード派のすっかり酔ってダンス踏む
顔色の冴えぬ若者失業中
無神論みくじ大吉天の神
長生きの秘訣忍耐老夫婦
羽曳野市　松本静子

病院の待合室で愚痴を聞き
千両を一枝活けて春を待つ
プランター小菊がたんと咲いている
寒い日はおでんにしよう夫想う
羽曳野市　仲谷真一

おみくじが吉で今年も始まった
梅一輪春のきざしが光ってる
麻雀のメンバー一人天に召す
麻生さん漢字検定受けましょう
羽曳野市　宇都宮ちづる

高笑い苦難を飛ばす福の神
先が見え取り置き食器使い出す
干支飾り十二年後をふと思う
花冷えの庭に見知らぬ幸の鳥

ちびちびと昭和の歌など聴きながら
ふるさとの味と雑煮と祝い酒
初詣で大きな仕事したみたい
新しい目標出来た筆あそび

藤井寺市　伊藤アヤ子

ごみにする勇気シンプルに生きたい
夫と娘にまた叱られる不携帯
若い娘のまっすぐ伸びた脚眩し
いつまでも頼られたくてスクワット

藤井寺市　俣野登志子

小鳥さんつつかないでと実南天
白寿の母何時も前向き元気元
今年こそ目覚しかけて初日の出
寒空に小鳥のために柿残す

河内長野市　内海綾乃

夜の街イルミネーション足止めた
夜空から貴女を守るどこまでも
タバコ吸う白い煙が目立ちすぎ
おいしいな灘の酒より味見酒

河内長野市　山本エミ

風呂飯寝るそんな毎日ありがとう
十人のひ孫見る母金メダル
紀香みたいになりたい気持エステ行く
懐のサイフ薄くてなお寒い

泉大津市　助川和美

酸性雨払い続ける秋あかね
世話役を天命と決め引受ける
OKもNOも携帯愛がない
賢そな人が多いね精神科

箕面市　寺井柳童

梅便り待ち侘びて居るスニーカー
十二支に入れて貰えぬ猫と住む
徘徊の眼鏡を追って幾千里
男傘未練一つをゴミの日に

吹田市　中村十八娘

新刊の頁鋭し指を切る
包帯のぬくみ傷口癒えてくる
血の色を手品のように変えて行く
髭剃らず寒波に向い防備する

門真市　矢阪英雄

難しい顔だが人は悪くない
好き過ぎて好きというのを言い淀む
サークルに笑顔の人がいて通う
倍返ししてたらもっと幸せに

高槻市　片山かずお

勝気です愚痴も言わずに楽もせず
相席が貧乏ゆすり落ち着けぬ
早い目に仕事切り上げ飲んでます
大切に命を刻む日記帳

堺市　近藤治子

初日の出力漲り誓う朝
牛どしは地味でも切れ目なく進む
幸せな老いを生ききる日のために
人はみな美味しい時の笑顔良し

寝屋川市　小嶋みさと

包丁の光調理師修業中
絶対に妻に研がせぬ出刃包丁
読み切った本の栞を何処に置く
エレベーター探す歳なり駅ホーム

宝塚市　丸山孔一

メタボかな短くなってきたベルト
天狗にはとてもなれない僕の鼻
だんだんと大きくなってゆく夕陽
レジ台にカード並べて　どれですか

池田市　上山堅坊

春近し早い合図は鳥の声
初詣で太鼓合図で人の波
名医でもてこずる病い気で治す
うすうすと解って後はつきあわぬ

生駒市　小西稔

サンキューね一期一会の金閣寺
韓国語英語の渦の金閣寺
野宿する人気遣いつ掘ごたつ
三ヶ日ほっこりとして掘炬燵

篠山市　谷田多美子

早く寝て明日へのやる気おこさせる
初日の出後どれくらい拝めるか
スーパーで見た目で買って味けなさ
干柿の出来を上から鳥見てる

篠山市　永井かほる

伸びている寿命の先に地図がない
夢を追う胸のトレモロ鳴りやまず
シャボン玉飛ばす小さなユートピア
過去は夢生きる喜び今を抱く

奈良市　乾春雄

紅白よりナツメロが好い年の暮れ
ウォーキング霜の冷気も心地好い
せっかくの蝋梅風邪で匂いせず
おふくろの味恋しくて途中下車

奈良市　矢野良一

奈良の柿贈れば千葉が落花生
忘れたいのに夢で追いかけられる
遠来のお客がたばこ吸いすぎる
イヤリング揺らして今日はまとめ買い

奈良市　尾畑なを江

煩悩は捨ててお行きと老いの坂
老春と言うには風が冷たすぎ
惚けもせず川柳捻るこの至福
割り勘と聞いてブツブツ言う財布

奈良市　岩本浩二

熱燗とおでん幸せなひととき
入学に亡父に貰った腕時計
お宝はないか屋根裏まで探し
形見分けあちこち直し着るコート

奈良市　阿部茶々

顔色が余程読めるかあまのじゃく
嫌われる位置で存在やっとでき
夫出たとたん豆撒き鬼は外
不景気風浴びて益々立泳ぎ

京都市　藤井文代

信号も赤で渡れる過疎の町
縫いあとも生きてる合図する疼き
大不況地球が休暇とるサイン
鬼とまで言われ踏んばるから出来る

茨木市　島田誠一

発芽したほうれん草に時雨降る
狭いのにおしゃれな箱もとっておく
手の甲に勲章のシミできている
うれしいを明日から一つずつ増やす

海南市　小谷小雪

ちゃん呼びの声が聞こえた故郷の路地
嫁も娘も暮らしの智恵にたけている
マンネリに小さな謀反試みる
介護した月日余生を照り返す

和歌山市　堀冨美子

金の世で産業界は脆いもの
ケータイにトナカイが出るイブの朝
シャッターに賀正を貼った冷えた街
冷えた世に海外組のいる不思議

北名古屋市　片岡文男

ころばない言い聞かせつつ下り坂
移る世や戦争だけはもうごめん
その話さっき聞いた言われ無口
消しごむで消したい過去がこびりつく

静岡市　渡辺芳子

腰痛に雪の降らないこと祈る
ユーモアと思い失言するはめに
早かったですね八十一なんて
給付金松坂牛ですきやきに

横浜市　巖田かず枝

ひ孫誕生トップを飾るニュースです
嫁にゆき嫁を迎えた福の年
モウ一度気力新たに踏む大地
年明ける富士は白無垢晴れ姿

藤沢市　加藤スズコ

平成の明かりいくさのない平和
息災を我も人の子鈴を振る
松とれて戦士いくさの貌になる
一月はまだまだ続く初詣で

日立市　加藤権悟

少年が天神様に頼み込む
手を合わすだけで何かが変りそう

昭島市　野口　忠

機嫌よい妻は眉毛を丸く引き
気短かの夫の袖を固く持ち

東京都　井上　つよし

正月や妻を見直す薄化粧
予報ずばり雲一つない初日の出
生真面目が筆で楷書の年賀状
お湯割りの麦焼酎で聞く第九

佐渡市　髙野　不二

五枚づつ少なくなって行く賀状
後期高齢でも平均寿命まだ
短日とのんびり暮している農家
健康な酒にしておくワンカップ

札幌市　三浦　強一

もみじマークへみな親切にしてくれる
猛吹雪赤提灯へ避難する
聞き流す術でストレス溜めてない
産地偽装筍に罪はない

お願い

川柳塔への投句（川柳塔・水煙抄・愛染帖・一路集・檸檬抄・初歩教室）は毎月15日必着で締切っていますので日曜日、祭日に拘わらず締切りを厳守して下さい。

井笠川柳会第10回記念笠岡大会（第28回　蘚　大　会）

と　き　平成21年5月30日（土）
開　場　9時30分　　締切　11時30分
ところ　笠岡市保健センター(ギャラクシーホール)
電話　0865－62－5701
笠岡駅から④バスで伏越下車4分
事前投句【昭　和】（3選者共選）
久本にい地．恒弘衛山．久保青花
応募方法　2句並記（指定用紙か便箋）
住所、氏名、柳名(振り仮名)電話、柳社明記
投句料1000円．4月末日必着(年間賞対象)
投句先　〒714-0081 笠岡市笠岡2289 井笠川柳会
戸田さだお 宛て TEL.FAX 0865-62-6200
投日投句　【遺　　産】平山　繁夫 選
（各題2句）【二　　人】西出　楓楽 選
【稼　　ぐ】小島　蘭幸 選
（特別課題）【当日発表】高木　勇三 選
会　　費　1500円（句誌呈）
賞品・賞状　事前・当日投句　1位に句碑贈呈
他に知事賞・県議会議長賞等多数
句碑除幕式　21年5月30日(土)　午前11時
古城山川柳公園
主催　井笠川柳会
後援　岡山県、岡山県教育委員会、笠岡市　他

第20回時の川柳交歓川柳大会

日　時　5月10日（日）10時30分開場
会　場　兵庫県民会館9F　☎078-321-2131
会　費　2000円（記念品・発表誌）
昼食は各自お済ませ下さい
講　演　「放浪の俳人　種田山頭火」
姫路山頭火の会会長　松岡　六月 氏
兼　題　各2句
「毬」（大　阪）西出　楓楽 選
「十」（弓　削）恒弘　衛山 選
「門」（高　槻）久保田半蔵門 選
「帯」（摂　津）森中惠美子 選
「書」（神　戸）赤井　花城 選
「家」（柏）今川　乱魚 選
「雑　詠」（神　戸）平山　繁夫 選
— 特別課題 —　1句
「包　む」（三　木）梶原サナエ 選
特別課題の特選に楯、入選句には景品呈
席題なし　欠席投句拝辞　各題締切12時
賞　知事賞ほか　**後援**　兵庫県・日川協他

愛染帖

新家　完司　選

自転車に空気を入れて孫を待つ

堺　市　大隅　克博

（評）風は少々冷たいがいい天気。今日も公園まで走ろうか。自転車の手入れをしながら孫の笑顔を思い浮かべる、心弾むひととき。

手をつなぐ人いないけど街に出る

大阪市　大川　桃花

（評）カップルを羨ましく思うこともあるが、自由気ままに一人で歩くのも楽しい。ただし、寂しそうな顔はせず、胸を張って颯爽と！

診察券ポイントカードだったなら

鳥取市　吉田　弘子

（評）受診一回で一ポイント。十ポイント溜まると一回診療無料か、記念品をもらえる。というぐらいのサービスはして欲しい。

マンホールの蓋に魅せられこの町へ

三田市　石原　歳子

（評）町の特徴を巧みにデザインしたマンホールの蓋。気にもせず踏んで行く人が多い中で、このような奇特な人もいるのだ。

今日こそは黙ってると家を出る

大阪市　古今堂蕉子

（評）その決心や良し！であるが、ついついいつもの元気が口に出る。まあ、あまり無理をせず、自然体が自分らしくていいのでは…。

年金をスライスしたり刻んだり

河内長野市　村上　直樹

（評）二ヶ月に一度の年金。二で割ったり、六十で割ったり、あれこれ工夫するが、原資が限られているからすぐに消えてしまう。

CMの家族がなんと嘘っぽい

岸和田市　中岡　香代

（評）ゴミひとつ落ちていない床に磨き上げられた窓。美しく明るい妻と聡明そうな子供たち。「どこの家族？」と尋ねたい。

息抜きにつけたテレビで謝罪ショー

唐津市　仁部　四郎

（評）「謝らないとマスコミから叩かれるから、仕方なく…」が見え見えの謝罪劇。テレビは楽しませてもくれるが、不愉快にもさせる。

飲みさしの夫の薬捨てられず

尼崎市　春城　年代

（評）何を見ても「ああ、あのときは…」と思う遺品の数々。捨ててしまうと、懐かしい思い出までが消え去るような気がする。

堺　市　奥　時雄

もし明日死ぬなら今夜何食べる
相席の美人は斜め向いて食べ

和歌山市　古久保和子

立ち位置が時々代わる夫婦雛
ブランドの鞄は見える方に持つ
公園にもう動かない汽車ポッポ

鳥取市　中宇地秀四

朝ドラの時間ですよと三毛が来る
熱かろが冷たかろうが酒は酒

東かがわ市　川崎ひかり

一秒のちがい晦日とお元日
同じ文字引いて辞典に笑われる

堺　市　加島　由一

何処にでも転がっている飲む理由
下心なしに金などくれません

高知市　松尾　憲子

今年こそ好きな男をゲットする
ジョークでもいいからしてよプロポーズ

三田市　堀　正和

アンケートなどで本音が解るかい
汗かかぬ人には棚田美しい

和歌山市　木本　朱夏

餅一つ焼いて私のお元日
ドッコイショ黄門さまが来るころだ

八尾市　吉村　一風

笑い合う友も私も皺いっぱい
口下手のしゃべりじっくり聞いている

豊中市　荒巻　夢

年賀状一人書いてはもの思い
ひとことで心の色がつと変る

大阪市　坂　裕之
笑ってるだけでみんなが寄ってくる

橿原市　居谷真理子
お月様親なしっ子になりました

豊中市　水野　黒兎
横丁に欲しい子供の騒ぐ声

大阪府　米澤　俶子
萎れたら駄目サラダ菜もおばちゃんも

鳥取市　近藤　秋星
貧富の差なく新年は来てくれる

橿原市　安土　理恵
さむ空の生家とうとう売ることに

海南市　三宅　保州
ちょっとした風にも軋む家になる

堺　市　矢倉　五月
新聞読む振りで大事な話聞く

弘前市　高瀬　霜石
改札機お前も筋を通す質

大阪市　森田　明子
日が暮れてから買いに行く紙オムツ

四條畷市　吉岡　修
メンバーは偶数が良いバスツアー

吹田市　穴吹　尚士
吉と凶半々ならばよしとする

枚方市　海老池　洋
汚職した人の無遅刻無欠勤

大阪市　谷口　義
雪溶けて何も変わってないと知る

大阪市　小谷　集一
充実のザクロ誇らし気に割れる

米子市　白根　ふみ
びったりのファッションですね達磨さん

鳥取県　岩崎　和子
善玉もいることはいる永田町

枚方市　丹後屋　肇
スカーフを巻いてふんわり皺かくす

八王子市　播本　充子
注連縄をくぐれば伸びてくる背筋

弘前市　福士　慕情
お利口にしてると春が早く来る

大阪市　西川　冷子
異議なしの声を頼んである会議

唐津市　坂本　蜂朗
同窓会亭主と犬はどうしよう

栃木市　岡野すみれ
深呼吸して留守電にかけ直す

紀の川市　辻内　次根
こんな世の手本は過去にあったはず

海南市　小谷　小雪
当然のように額に皺がある

枚方市　海老池　洋
それほどに寒くはないのか川の鳥

大阪市　谷口　義
えんどうよもうすぐ杖をしてあげる

吹田市　穴吹　尚士
歩く会馴染んだ靴を履いていく

大阪市　小谷　集一
無口だがこまめにメール打つ息子

米子市　白根　ふみ
わたくしも辛抱していると思う

大洲市　花岡　順子
カラスから見れば何でもない男

鳥取市　夏目　一粋
年寄りがふたり掛かりで瓶の蓋

寝屋川市　平松かすみ
日中は役に立たない呑み仲間

羽曳野市　徳山みつこ
餅まきへ控え目になどしておれぬ

豊中市　谷川　勇治
パソコンのほんの一部を理解する

東大阪市　笠井　欣子
首の皮一枚のこしお正月

青森県　松山　芳生
できぬ孫よくできる孫お正月

鳥取市　岸本　孝子
笑ってた手摺のおかげ今日も無事

大阪市　小谷　集一
ご長寿をと言われる齢になり申し

米子市　白根　ふみ
隣席へ期待ひそかにひとり旅

大阪市　小谷　集一
相席のベビーあやして泣き出され

米子市　白根　ふみ
それなりに咲いた娘が惜しくなる

大阪市　小谷　集一
妻の書く丸から出ない八十五

米子市　白根　ふみ
騒ぐだけ騒いでおむつ置いて行き

大阪市　小谷　集一
ぜんざいを炊いて私の株上がる

米子市　白根　ふみ
林檎椀ぐ飛白の母は娘に還る

大阪市　小谷　集一
座ぶとんの厚さに正座崩せない

米子市　白根　ふみ
年毎におせちの手抜き板につき

大阪市　小谷　集一
除夜の鐘テレビで聞いて手を合わす

米子市　白根　ふみ
絶好のチャンスは逃げてから分かる

米子市　白根　ふみ
きのう句会であそんだ友を弔いぬ

臆病な男返事を二つ持つ　奈良県　渡辺　富子

幾何学をひねっています折り紙で　大阪市　柴本ばっは

充電中と囁いている日向ぼこ　池田市　上嶋　幸雀

埋蔵金出るか張り切る大掃除　唐津市　市丸　晴翠

足腰が弱って見えてきた世間　堺　市　村上　玄也

腹まわりポニョに近づく三ヶ日　神戸市　山田婦美子

ナットーもバナナもやってまだメタボ　札幌市　三浦　強一

仏様いるかマッチをすってみる　松江市　川本　畔

順調と手紙には書く親孝行　西宮市　藤本　直

寝正月一日寝たら飽きてきた　和歌山県　森下よりこ

ひとりにはひとりのリズム酒にする　吹田市　早泉　早人

肩肘を張ってさみしい日であった　藤井寺市　鴨谷瑠美子

年功序列人に優しい良い制度　奈良市　矢野　良一

まだ元気お餅五ツが喉を越す　鳥取市　津村　律子

座禅組む晩酌のこと想いつつ　藤井寺市　鈴木いさお

仲間だろうそんな言葉の有難さ　茨木市　藤井　正雄

魔法かも知れぬありがとうの五文字　和歌山市　上地登美代

恋文を書いた右手も老いてくる　鳥取市　田村　邦昭

修行僧甘酒店の前に立ち　寝屋川市　太田とし子

白線へ下がってほしい過干渉　松江市　津川　紫晃

大食いのテレビは見ないことにする　奈良市　尾畑なを江

散りぎわを急ぐ桜とテロリスト　豊橋市　藤田　千休

景気良い話も山も眠りこけ　大阪府　高木　道子

流行に疎い親父のちびた靴　大和郡山市　坊農　柳弘

おばあさんとまだまだ呼んでほしくない　芦屋市　黒田　能子

平らかな気持を作る笑い声　今治市　渡邊伊津志

二階へも下へも手ぶらでは行かぬ　京都市　高島　啓子

すれすれで溝に落ちない酔っ払い　和歌山市　喜田　准一

国と子が置き去りにする高齢者　藤井寺市　高田美代子

貧乏をしてるからこそ家族愛　西宮市　片山　忠

雇用危機孫の内定どう動く　鳥取県　佐伯　やえ

ノンカロリーだけでは出来ぬダイエット　弘前市　高橋　岳水

けんめいに泳いでいます寡婦の海　大阪市　津村志華子

わが家での番付ポチは知っている　高槻市　佐甲　昭二

初夢でまだ姑に叱られる　三田市　上垣キヨミ

留学にユーロ授けるお年玉　姫路市　古川　奮水

三ヶ日済んで夫婦のお正月　河内長野市　針生　和代

昨夜どう帰ってきたか二日酔い　堺　市　荻野　像山

温もりを求め集いに顔を出す　箕面市　広島　巴子

遊びならぴんしゃんとする足と腰　堺　市　羽田野洋介

トラブルの後に出番がやってくる　長岡京市　山田　葉子

街灯が星空暗くしてしまう　大阪市　田浦　實

日立市　吉成　ます
腹癒せに踏みつけてみる霜柱

大阪府　小栢こずえ
かっこいい長い足だが寒かろう

日立市　加藤　権悟
ありがとう馬齢ひとつを神がくれ

海南市　堂上　泰女
鈍感力持ってる人が勝ち残る

京都市　坪井　孝一
ライバルが怖い顔して下戸だった

鳥取県　斉尾くにこ
誤字ありと聞けば自分とまず思う

枚方市　伊達　郁夫
知らぬ振りして驚いてみせる母

神戸市　田中　章子
客人にお出しするのは瓶ビール

大阪市　近藤　正
白熊も家も薄氷踏んでいる

寝屋川市　森　茜
日曜日電車の音も間延びする

岩出市　村中　悦男
挨拶の入口になる顔の色

大阪府　畑中　節子
健康でいてこそ今日の薄化粧

大阪市　岩崎　公誠
暗算で残る時間を確かめる

生駒市　飛永ふりこ
無礼だと気付かせるほどひまでなく

鳥取市　土橋はるお
養老の滝を飲んでる山の牛

シドニー　坂上のり子
空っぽの心を満たす手の温み

寝屋川市　岡本　勲
北極から地球こわれる音がする

大阪市　萩原　大朔
百貨店赤電話消え椅子が増え

八尾市　宮崎シマ子
若かりしは不良少女の日もあった

唐津市　樋口　輝夫
サクラサク日まで神様頼られる

鳥取県　細田　裕花
失敗ばかりクローズアップする世間

黒石市　相馬　一花
じわじわと我が暮らしにも来る津波

東京都　清原　悦子
吹っ切れて何も書く事ない日記

大阪市　伏見　雅明
飼い犬の全快祈り千羽鶴

寝屋川市　森田　麗
野の花を愛でて牛歩の旅をする

大阪市　奥村　五月
痩せなはれ酒もひかえと嫌な医者

鳥取市　山宮　愛恵
立ち止まることを覚えた空の青

京都市　都倉　求芽
ロボットより軽い派遣の地位いのち

藤井寺市　若松　雅枝
居眠りの間にも景気が悪くなる

神戸市　山口　光久
居酒屋で社長社長と言われてる

加西市　金川　宣子
切れそうな夫婦の糸を締めなおす

大阪市　福岡　末吉
うとうとと三毛の温もり有難く

豊中市　松尾美智代
四十年夫婦負けずに頑固です

高槻市　片山かずお
古希の鞠まだまだ行方定まらず

鳥取県　平木　公子
未練ある服をウエスト拒絶する

羽曳野市　吉川　寿美
免許更新またも娘に叱られる

奈良市　岩本　浩二
晴れに傘雨に返せと言うバンク

倉敷市　撰　喜子
ゴルフ麻雀大人の遊び高くつく

羽曳野市　森下　一知
不況風国へ帰った付け黒子

枚方市　小林　わこ
暫しなら見ぬふりぐらいしてあげる

坂出市　綾井　嘉彦
よくもまあ波風立てて五十年

大阪市　榎本　舞夢
ゴクゴクと未来に向かい水を飲む

麻生路郎句抄

（句集『旅人とその後の作品』から）

大空

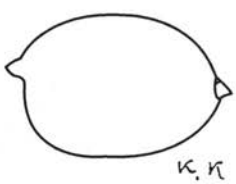
恋ごころ

たべさしを食うほど男惚れている
炭ついで炭ついで女をうらむ
くされ縁だとは女のずうずうし
桜は桜僕は君君
恋の罠あの眼だろうか眼だろうか
あっさりとふられた事を笑ひ合ひ
骨抜きにされた毒婦を諦めず
恋をしているのよといひたい眼のあをさ
泣けて来るほどに恋しき君ならず
思ひあがった女よ恋を棄て給へ
操など考へていず脂ぎり
サルトルを伏せて女に溶け込みぬ
抵抗のきかぬ媚態にまばたいた
円光の射すを男は見のがさず
ただ歩くだけの恋にも春が来る
ネオンの下を妬きつ妬かれつのし歩き
妖艶を愛しつづけて息を引く
人前はあんな女と云っておき
愛人が雪の中の黒点となりぬ
もの思う女は鮎に手をつけず
色事に疲れ糸切草を見る
割箸を割ってもらってやに下り
老らくの恋の濃度のてれくさく

共選欄　檸檬抄

（薫風書、カットとも）

投句数　698句



「刻む」　高瀬霜石選

温暖化地球の寿命刻む音　八尾市　田邊　浩三
人権を切り刻まれた拉致家族　宇部市　平田　実男
九条の旗が平和の時刻む　大阪市　川端　一歩
荒波が岩に刻んだ海の詩　枚方市　海老池　洋
ネギ刻む音で目覚める里帰り　三田市　堀　正和
けの汁の具種を刻むおとこ業　弘前市　岡本　花匠
小刻みに震えてました初デート　河内長野市　坂上　淳司
シュレッダーへかけてあなたを微塵切り　弘前市　福士　慕情
母漬けた沢庵母へ微塵切り　鳥取市　西川　和子
いい話だけを心に刻み込む　堺　市　羽田野洋介
自分史を刻む一字が埋まらない　鳥取市　田村　邦昭
土生姜刻む音聞く風邪の床　岸和田市　藤原　昭
大切に今日を刻んで日が暮れる　芦屋市　黒田　能子
こだわりを刻み私をとり戻す　富田林市　中井　アキ
神様の刻印だろう花前線　河内長野市　山岡冨美子

「刻む」　木本朱夏選

もう三月　四分の一過ぎました　鳥取市　吉田　弘子
脈をとるナース話題を春にする　日高市　根岸　方子
ブヨブヨを刻んでみれば天下り　出雲市　伊藤　玲子
大不況刻んで鍋にしてしまお　大阪市　太田としお
会社倒産金を刻んだ冬だろう　河内長野市　植村　喜代
政治家の心刻んで五目飯　大阪府　神野千恵子
大きな夢小さく刻みゴミ箱へ　尼崎市　藤井　宏造
人生を派遣期間で刻まれる　吹田市　穴吹　尚士
粉粉に刻んで出して来た証拠　西宮市　片山　忠
青春の脳裏に刻む敗けいくさ　美作市　小林　妻子
犬死であるはずもなく忠魂碑　唐津市　仁部　四郎
良心の呵責が胸を切り刻む　堺　市　村上　玄也
首の皮一枚なのに刻まれる　鳥取市　夏目　一粋
刻んだら赤い血も出る嘘も出る　交野市　森本　弘風
シュレッダーにかけているのに抜けた嘘　大阪市　岩崎　公誠

時刻む一人の部屋が広過ぎる
好きな子の名前刻んだ事がある
人間が好きでざくざく料理する
秒針におっかけられた若かった
ネギ刻む今朝のスタート御御御汁
私も刻み込まれた多数決
刻まれた運命線を信じたい
日めくりに残り時間を刻まれる
切り刻む気持分からんでもないな
まな板にうれしい知らせ刻みこむ
秒針がコチコチ刻む黙秘権
無為の日を秒針元気よく刻む
時刻む音がどんどん速くなる
その先は風雨まかせの磨崖仏
氷壁へ男のロマン彫りに行く
石段に影を刻んで逝った夏
きざまれた皺は自分史だと思う
刻みねぎ小さくなって買ってくる
苗床に明日の夢を鏤(ちりば)める
ワイワイと男を刻む午後のお茶
泣き笑い色々あったなあ皺よ
とことん刻むあんな馬鹿こんなバカ
安心を刻む時計があるといい

藤井寺市　若松　雅枝
岸和田市　雪本　珠子
八尾市　宮西　弥生
豊中市　安藤寿美子
高槻市　安田　忠子
海南市　三宅　保州
雲南市　菅田かつ子
松江市　三島　淞丘
三田市　臼井　二英
八尾市　村上ミツ子
美祢市　安平次弘道
橿原市　居谷真理子
札幌市　三浦　強一
堺　市　志田　千代
弘前市　高橋　岳水
海南市　小谷　小雪
黒石市　佐藤　古拙
寝屋川市　森　茜
青森県　松山　芳生
羽曳野市　徳山みつこ
吹田市　太田　昭
八王子市　播本　充子
鳥取市　山宮　愛恵

故郷を胸に刻んで汽車が出る
赤銅色の皺が男を彫り上げる
家計簿はもう削れない刻めない
老い刻む時計あちらに向けておく
秒針がコチコチ刻む黙秘権
今日刻む音は止まらず老母が逝く
刻まれた柱の傷は僕の罪
毒舌は刻んで食べる腹八分
幸せを少し刻んでおすそ分け
錆びついた脳にときおりきざみ葱
刻まれてもボクは僕です五目めし
キャベツ上手に刻む男を飼っている
俎に刻む私の脆さ逞しさ
棘のある言葉刻んで小出しする
葱刻むこの世に終わり無きように
ふりかけにしたい男を切り刻む
私を刻めば賞味期限切れ
俎のリズム女は四季刻む
年輪は地球の吐息刻んでる
真夜中のあれは余生を刻む音
余日など残さぬ秒刻みで生きる
とき刻むただ今古希を通過中
私も刻み込まれた多数決

弘前市　福士　慕情
高知市　小川てるみ
大阪市　奥村　五月
京都市　都倉　求芽
美祢市　安平次弘道
熊本県　髙野　宵草
鳥取県　竹信　照彦
鳥取市　大前　安子
大阪市　原田すみ子
河内長野市　村上　直樹
和歌山市　上地登美代
大阪市　井丸　昌紀
大阪市　尾崎　ゆめ
和泉市　横山　捷也
枚方市　寺川　弘一
香芝市　大内　朝子
米子市　政岡日枝子
東大阪市　森下　愛論
尼崎市　加川　靖鬼
大阪市　萩原　大朔
池田市　上嶋　幸雀
寝屋川市　岡本　勲
海南市　三宅　保州

どこをどう刻んでも大根の白　弘前市　斉藤　劭
ねぎ刻む音でぼちぼち起きてくる　大阪市　小泉ひさ乃
梅干のシワが美味だと主張する　豊橋市　藤田　千休
小刻みに揺れる電車で逢いにゆく　西宮市　牧渕富喜子
民族の歴史に刻むＹＥＳ　ＷＥ　ＣＡＮ　亀岡市　井上　森生
ブヨブヨを刻んでみれば天下り　出雲市　伊藤　玲子
私を刻めば賞味期限切れ　米子市　政岡日枝子
キャベツ上手に刻む男を飼っている　大阪市　井丸　昌紀
家計簿はもう削れない刻めない　大阪市　奥村　五月
納得をするまでみじん切りをする　藤井寺市　太田扶美代
妹と違う時間の刻みかた　寝屋川市　籠島　恵子
濁流を乗り切る櫂を刻んでる　鳥取市　中村　金祥
ふりかけにしたい男を切り刻む　香芝市　大内　朝子
刻刻とブラックホール近づいて　高知市　松尾　憲子
無心ならネギはきれいに刻まれる　府中市　藤岡ヒデコ
出て行った夫を刻む台所　三田市　北野　哲男
シュレッダーにかける昨日までの私　和歌山市　古久保和子
あなたとは違うと言って名を刻む　松江市　相見　柳歩
人類の墓標にＥＧＯと刻まれる　豊中市　江見　見清

秀　句

泣き顔を刻んだ葱のせいにする　加東市　中村　和代
ここまでと刻めばわたし耐えられる　鳥取市　斉尾くにこ
幸せを少し刻んでおすそ分け　大阪市　原田すみ子

大楠に君のイニシァルまだあった　堺　市　加島　由一
時刻む年輪という形して　大洲市　花岡　順子
また逢える墓標に刻む倶会一処　犬山市　金子美千代
石に刻むと言えばどっさり寄付が来た　大洲市　中居　善信
石庭は風の刻んだ小宇宙　枚方市　小林　わこ
亡き父母の芯私にも刻まれて　亀岡市　井上　森生
小刻みに膝を抱えて泣くピエロ　鳥取県　大塚美代子
小刻みに私を晒す心電図　堺　市　柿花　和夫
死ぬるまで動く時計をはめている　鳥取市　土橋　螢
石段に影を刻んで逝った夏　海南市　小谷　小雪
名を刻む画竜点睛手が震え　箕面市　広島　巴子
刻まれた皺をわたしの旗にする　西宮市　牧渕富喜子
恥ばかり刻んでポジティブな夫婦　八王子市　播本　充子
妹と違う時間の刻みかた　寝屋川市　籠島　恵子
時刻む男に丼飯が合う　大阪市　谷口　義
神様の刻印だろう花前線　河内長野市　山岡富美子
人類の墓標にＥＧＯと刻まれる　豊中市　江見　見清
どなたかの夢を知らずに刻んでた　四條畷市　吉岡　修
年輪を刻み微笑むデスマスク　鳥取市　永原　昌鼓

秀　句

百歳が刻む百年分の皺　藤井寺市　鈴木いさお
七草の音へ卑弥呼は目を覚ます　大阪市　津守なぎさ
刻まれた胸の中也がまだ錆びず　堺　市　矢倉　五月

誹風柳多留一一篇研究 43

増田忠彦・山口由昭
小栗清吾・伊吹和男
山田昭夫
清　博美

319　**とうとうんのんでとうめうせんを取**

増田　上五の「とうとうん」が分からず、ご教示を得たい。「至頭、ウン呑んで」だろうか。句は、寺社境内などでの見せ物であろう。剣などの異物を呑んで見せて、助手が観衆から観覧料（灯明銭）を集めてまわる。

　花の江戸棒をのんでも喰へる所コ　九四40
　顔へすじ出ると灯明銭と云ひ　拾三32

山口　「日国」のとうと㈡には、物を安定した姿に据置くさまを表わす。しっかりと。…とあり、完全にやる事をやってから灯明銭をとった、と考えたい。従って、礎稿のように「うん呑む」と解したい。「うん」は強勢の接頭語。

伊吹　とうと（到頭）は、とうとう（到頭）に同じ（『日本国語大辞典』）で、ついに。うんのむ（飲・呑）は、酒などを、ぐいぐいと飲むことをいう近世の奴詞（『同辞典』）で、礎賛。

山田　右ようなことか。成る程。

清　同右。

320　月二ツ出家けんごにまかりこし

増田　名月と後の月とは遊所の紋日で、お金も高い。その二つともを約束違わず、女は禁制のはずの坊さんが通ってくる。品川と増上寺というのが川柳の決まりごと。

　「堅固」は「日国」に、「仏語。釈迦入滅後の二五〇〇年を五〇〇年ずつに分けた、それぞれの五〇〇年。順次に『解脱堅固』以下、禅定、多聞、造寺、闘諍の各堅固をいう」とあり、この仏語をかける趣向。

山口　品川の場合は十五夜、十三夜ではなく、正月、七月の二十六夜のことを言っているのではないか。「二十六夜待ち」が品川の紋日であるかどうかは不明。

　山をしくじつたも二十六のとし　安九智4

小栗　品川の月見の句は圧倒的に二十六夜だから、山口説もっとも。ただ、正月、七月の二十六夜の他に、八月・九月の十五夜、十三夜も紋日だったらしい。迷うところだが、「月二つ」という類句が多数あって、多くは八・九月のことと思われるし、片月見を忌むという意味で「月二つ」と並べるのは八・九月の方がよさそう。

清　同。

321　**くわつ〳〵といふと帝ハ出来上り**

増田　地獄をめぐってきて蘇生したとされる日蔵上人の逸話の一つ。句は『太平記』巻三五「北野通夜物語事付青砥左衛門事」にある挿話によるようである。道真を大宰府に追った醍醐天皇は時平など臣下とともに地獄に落とされていて、日蔵上人が天皇に会う場面。

上人は焦熱に焼かれている天皇に挨拶をしたいという。獄卒が炎の中から天皇を矛で刺し貫いて取り出すが「焼炭ノ如ナル御貌散々ニ打砕レテ」いて顔も形も分からない。「鬼共又走寄テ…『活々』ト云ケレバ、帝ノ御姿顕レ給フ…」とある。

この日蔵上人と地獄の延喜帝の話は、国史『扶桑略記』や『沙石集』『十訓抄』など諸書に出ており、川柳子がよく種本として活用する『広益俗説弁』にも載る。またその地獄絵は「北野縁起絵巻」でも知られていたようである。ただ、「くわっくわっ」は、『太平記』独特の描写らしい。

清　賛。

322　**たから舩並木の中をよんて行**

増田　正月二日の夜に宝船の絵紙を枕の下にして初夢を見る習慣であった。並木のような松飾りの正月の町を、宝船の売り声が行く。

たからふね二日の風に乗りおくれ　宝八桜1

323　**江戸ものゝ生レそこない金をため**

清　賛。

増田　今に通じる「江戸っ子気質」をいうもので、解の要もなかるべし。

清　賛。

324　**最ゥ壱本ほしそうにさす御用たし**

増田　御用達は、「江戸幕府の諸役所や各藩邸・武家屋敷の政策上のことや日常生活にいたるまで、諸般の御用を調達するよう指定されていた特権的な商人や職人。御用承り・御用聞き・御屋敷御出入り町人などとも呼ばれた」（『江戸学辞典』）

御用達には苗字帯刀を許されていた者も少なくなかったが、まだそこまではゆかない一本差しの御用達。もう一本欲しそうに脇差しをかんぬきに差している。

壱本をいかめしくさす御用たし　明五宮一

野はかまでこじりはねたが御用達　三18

町人の冥加が尽て二本さし　拾九12

いつの間に刀をさして夷講　武三26

清　賛。

325　**あね女郎小よりを笑ひ〳〵より**

増田　姉女郎の厄介になるミドルティーンの新造は寝ぎたないものとされる。すやすやと寝込んだ妹女郎の傍らで、笑いながら姉女郎がこよりを縒っている。縒り上がれば鼻をこちょこちょ。

山口　賛。

こよりと聞て起る狸寐　武二13

清　賛。

326　**一ト寐入しても四条のわらひ声**

増田　夏の夜、涼みの人出で賑わう都四条河原。深更ひと寝入りして目を醒ますと、まだ河原の笑い声がつづいている。ひと寝入りの主は、自身が涼みの客か、あるいは近くの町屋の者か。

四条の床几かりて大の字　ケイ二七75

山口　賛。句としては上質。

伊吹　賛。近くの町屋の者と思う。

清　賛。

327　**花の留守五ツ半うち四ツをうち**

増田　花見の留守番役で帰りを待ちかこつ身、鐘が九時を打ち十時を打ってもまだ帰ってこない。

伊吹　賛。さては遊里へ。

清　賛。

揺れる

武田　帆雀選

黒髪も茶髪も揺れる初詣で　小雪
ショーウインドー揺れる心が透けている　時雄
地震かなつい電球の笠を見る　章子
休肝の誓いも揺れている夕餉　孝明
カーテンが揺れて聞き耳立てた猫　雅明
流し雛いまさざ波にのりました　ばっは
助手席の妻が大きく舟を漕ぐ　淳司
偏差値の谷間で揺れる塾かばん　正雄
震度7医者も僧侶も腰抜かす　一花
政界が揺れてる暫時遠眼鏡　四郎
肩揺れて浴衣が落ちる旅の宿　弘泰
金みると揺れる心を叱りつけ　一粋
日本の義理と筋目が揺れている　ゆめ
半額セール揺さぶりかける大幟　冷子
柏手の響きにお灯明が揺れ　充子
沈黙の瞳へ言い訳が揺れている　くにこ
迷走の道母さんの灯が揺れる　伊津志
通勤の電車と揺れる文庫本　晴翠
リストラへ地震どころでない揺れだ　妻子
血糖値も揺らぐ屋台のいい匂い　恭昌
書き終えてまだ揺れ動く遺言書　まみ子
派遣切り揺れる政府の都市砂漠　幸子
陽炎の向こうに揺れる過去の罪　淞丘
揺り返し来るかも知れぬ愛の傷　碧
ブランコに打算の二人揺れている　孝一
まだ若い夢の中では揺れている　敏子
末席で空気の揺れを読んでいる　彩子
あのねのね花のかんざし揺れている　とし子
リストラの渦中に揺れる駄馬の椅子　権悟
養虫も僕も揺れてる風当たり　善信
物干しのハンカチ揺れてケセラセラ　巴子
残留かメジャーか揺れる男意気　満子
両手に花男冥利に揺れている　鐘造
心揺れます少し離れて歩きます　麗
正論と義理の狭間で揺れる葦　あずま
目が揺れるとても危い年頃だ　シマ子
水仙の園で揺れてる倦怠期　志華子
佳
延命のチューブが揺れて外せない　陽子
イヤリングやさしい風に揺れている　典子
揺れながらナックルボール落ちてくる　としお
虚々実々はざまで揺れる影法師　輝夫
断ち切れぬ思いに揺れている拳　菜摘
人
決心が闇の深さに揺れてくる　茂代
地
一日中揺れてるぼくの羅針盤　霜石
天
ピリオドの先で紫煙の輪が揺れる　坊農柳弘
軸
春風に揺れて宿題しています

内緒

寺川　弘一選

内緒やと言った相手が悪かった　(奥)五月
父さんへ内緒の話多過ぎる　(志)千代
内緒ごとしてから増えた嘘の数　かずお
内緒やで言われたけれど知っていた　忠子
居酒屋で内緒話を聴く背中　慕情
内緒には出来ないことを聴かされる　准一
妻と娘の内緒話ですべて決め　久仁雄
夫の知らぬ内緒あの世へ持って行く　シマ子
遠く住む子には内緒の病持つ　(蕨)昭
約束を守った内緒わたしだけ　くにこ
内緒ごと聞いてしまった日の孤独　淳
内緒バレやっと沿った肩の凝り　勝視
へそ繰りがあるばっかりに惚けられず　好文
転勤に内緒話が先に着く　強一
婚約者ローンがあると未だ知らず　方子
内緒ごと聞いてしまったイヤリング　菜摘
一度だけ抱かれてみたい人だった　憲子
整形の顔と主人に言うてない　高明
妻に内緒はいつもどこかでばれている　一風
内緒事まだ有るのかとエンマ様　(稲)洋
内緒ごと下手な男でかい声　輝夫
母さんに内緒父さんにも内緒　あやめ

協定は秘密と笑う嫁姑　菜美
内緒ごと妻は小声で娘は記号　美義
ここだけの話共犯者にされる　幸雀
内緒だと言わず内緒の話する　ミツ子
広めたい話内緒と念を押す　志延
口止めはしたが対策立てておく　美千代
ポケットで握りつぶしている内緒　隆盛
内緒話がすぐに検索されていた　扶美代
リストラを秘めて毎朝家を出る　玄也
苦労した男苦しさ語らない　雅明
病名を伏せた医者にも礼を言い　かつ子
矢が尽きたことは内緒にしておこう　無限
バスツアー内緒話の藏ざらえ　四郎
内緒にはできぬ松茸焼く香り　昌鼓
翔んだ娘がそっと参った花手桶　恭昌

佳

悪友は目配せだけで通じ合う　哲男
内緒ごと好きで出世に遠くいる　修
魂胆があって内緒の話する　充子
抽出の奥で内緒に黴が生え　淞丘
耳貸すと内緒ばなしを押しこまれ　公誠

人

飛行機はたまあに落ちることがある　霜石

地

人生を甘くみていたのは内緒　霜石

天

流れ見て内緒ばなしを小出しする　岩崎公誠

軸

神さまに内緒で寿命のばしたい

熱

清原　悦子選

新米の美味さ農夫の汗の味　像山
発熱の地球にエコを急がねば　強一
解散を見越し議員は熱弁中　智加恵
熱心に勧めるほどに抱く疑問　好文
熱ほどに上がらぬ腕にまだ懲りず　まみ子
モナリザの熱い視線にうろたえる　鐘造
熱々の雑煮命の灯を燃やす　栄呼
高熱に打たれて鉄は強くなる　婦美子
寒い夜は鍋に熱燗熱めの湯　照彦
給付金出すのださぬと熱がでる　(奥)五月
熱冷めて見れば季節はもう冬で　(花)順子
熱燗でこころを癒す失意の日　いさお
友情の熱意が溶かすわだかまり　碧
熱冷めて聞く耳少し戻りかけ　雅明
少々の熱なら元気吹き飛ばす　獏沓
いつまでも熱の冷めない距離保つ　圭一郎
凍てついた心を解かす愛の熱　淞丘
熱の子を抱いて走った雪の夜　高明
砂風呂でゆっくり星の数を読む　奮水
初恋は微熱のままに胸の奥　憲子
指切りに誓いと熱を生む小指　隆盛
熱いのは保護者子どもは冷めている　淳司

聞く耳は持たぬ燃えてる子の決意　美千代
熱覚めて見れば互いに凡夫婦　(安)泰子
熱燗にこころをほぐす絆酒　花匠
熱中も過ぎれば自棄の域に入る　末吉
セーターを熱あるうちに編み上げる　(岩)玲子
髪型で春の微熱が測られる　四郎
温暖化地球の微熱まだとれぬ　みつこ
少し熱あって人間らしく生き　登美代
加熱する議論へ古老咳一つ　(志)千代
胸にさす造花が熱くなっている　充子
出会いから微熱が続く日記帳　裕花
第一子カメラ持つ手が熱くなる　富子
さようならまだ熱を持つ置手紙　公誠
三本目熱燗にして飲み終える　ミツ子
発熱に言い聞かされて寝ています　佳

今日も無事体温三十六度五分　螢
熱心に誘ってくれたのはサクラ　玄也
熱燗に溶かしてもらう今日の棘　(川)洋子
平熱になって美味しい七分粥　輝夫
ふうふうと重湯冷ましてくれた母　(稲)洋

人

にっこりと茶を入れられて以後微熱　蜂朗

地

風邪かしらおでこ合わせて計る熱　哲男

天

ノーベル賞子らの瞳も熱くなる　若松雅枝

軸

心配の余りに微熱繰り返す

初歩の教室

題 ― 移る

鈴木公弘

誤字・脱字、とくに送りがなの間違いが目立ちます。使い慣れた言葉ほど国語辞典を見なくなる傾向は強くなりますが、あなたは間違ったままの記憶を上書きして、頭を恥ずかしい事態に陥られておられませんか。

このコーナーでは事の性格上、原句と添削句とを並べなければなりません。お気の毒に感じることは再三ですが、改めて見直す機会にしていただけたら、と思います。

＝文字違いの句＝

原 初鏡うつる笑顔に目立つ皺　雅代
添 初鏡映る笑顔に目立つ皺
原 書き移しよく見ています好きな歌　治子
添 書き写しよく見ています好きな歌

＝注意力を高めればよくなる句＝

原 幼な子の欠伸が移り添い寝する　ちづる
添 幼子の欠伸が移り添い寝する
原 窓際が気になり出した移動時期　昇
添 窓際が気になりだした異動時期
原 キッチンに時代の移り電子音　イセ
添 キッチンに時代が移る電子音
原 貼り薬匂い移して肩や腰　俊子
添 効きそうな匂いが移る貼りぐすり
原 移ったら騒ぎの外にいる安堵　美紗子
添 移動して騒ぎの外に出た安堵
原 単身赴任移る京都で父課長　利子
添 課長となって父だけ京に赴任する

①十七音字では言い切れないボリュームだと思いますので、あえて七七五の句に変えました。②「移る」と「赴任」とは、ここでは同義語と考えたいと思いますので、一方をカットしました。

原 決心を度々変える総理の断　長一
添 決断を変える総理の国語力
原 世の移り変動早くついて行けず　久子
添 変動の速いこの世に残される
原 移動先名酒があると負け惜しみ　勇治
添 異動先には銘酒があると負け惜しみ

より分かりやすくするために上五部分を人事異動にしました。また、丁寧に表現するため上を七音字に変えましたが、元どおり（「異動先」）でも通じると思います。

原 脳科学心の移りうがちすぎ　正二
添 変心をうがって覗く脳科学
原 時移り景色かわるも我は我　昭
添 時の彩移るがぼくは変わらない
原 温暖化へ移してならぬ智恵出そう　照美
添 温暖化とめねばならぬ知恵を出す

温暖化の「化」は動きの方向を示す言葉です。したがって移ると同じ役割をします。また、智恵の「智」は本来、仏教用語としての「智慧」を内包しています。一般的な英知を示す知恵とは整理して覚えておくほうが賢明でしょう。

原 木から木に移るきれいな知らぬ鳥　智加恵
添 木から木へ移る油断のならぬ鳥
原 室干しにタバコ香移る二度洗ふ　ミヨノ
添 部屋干しのシャツに煙草の香が移り

原句の着眼はたいへん素晴らしいですが、一度で表現するにはあまりにも多くの動きを含んでいます。一点重視をお奨めします。

原 造反で移り気な人待つ野党　紀雄
添 移り気な造反待っている野党

受け皿が野党である必要はないので「流れ句」ですが、数が勝負の民主主義では、これもまた真なりというところでしょうか。

原 住みにくい都会を捨てて過疎移る　孝明
添 過疎村に移り人間とりもどす
原 人よりも神に願いを打ち明ける　タカ子
添 神に情移して願い打ち明ける

原 晴れ着出し樟脳匂う奥座敷　冷子
添 樟脳をたどれば奥の間の晴れ着
移るという言葉は使いませんが、晴れ着に移り香していることは理解できるでしょう。川柳も意思伝達の手段であることを思えば「伝わればよい」側面をもっています。
原 お引越学校移り子は苦労　弥生
添 転校の子らに詫びたい辞令あり
原 気の移り瞬き一つしてる間に　安子
添 気が移る瞬き一つしてる間に
原 季の移り早すぎますよ小正月　節子
添 季の移り速く高齢化が進み
原 君想う風邪も移され水枕　弘泰
添 水まくら風邪を移した君想う
原 何時からか家長の席に妻がいる　好文
添 平和なり家長の席に移る妻
原 政権が事情かわりて移り去る　智子
添 政権が移るスタッフ引き連れて
原 窓際で移る場所ない崖っ縁　光弘
添 移る場所ない窓際に骨埋める
原 置き土産風邪をうつして孫帰る　宣子
添 風邪を移して帰ったけれど孫かわい
川柳の定型は五七五です。表現したいことがこれに収まれば問題ないですし、定型表現できるよう、言葉は探すべきです。しかし、省略するとかえって意味が通じなくなってしまう場合、思い切って定型を破るのも手法です。
原 何思う入院時の四季（しき）移り　健柳
添 何おもう入退院の四季移り
原 ＩＴが私を老いて先移る　エミ
添 ＩＴが私を置いて移りゆく
原 流行が移って外ずす肩パット　房江
添 流行が移って外す肩パッド
原 終わらない時は移ってまた生まれ　柳歩
添 輪廻ああ移った時にまた会おう

＝入選に準ずる句＝

次々と目移りしてる試着室　ます
首切りで移る先なく青テント　孔一
手術して転移におびえ早や五年　憲子
大変な不況の世へと移りゆく　堅坊
嫁に風邪移されたのと咳をされ　亜希子
笑顔まで移ったような老夫婦　はじむ
移り気な方も最後は妻のもと　克博
栄転というが必死の修業なり　すみれ
重心が移って家長弱くなる　志延
老いてなおきれいな花へ目が移る　美智代
手放せぬ薬を持って移動する　嘉彦
左遷地の移転通知が遅れがち　弘子
美人には体ずらして席を空け　大朔
ケアハウス移るいのちと決めている　くにこ
少しでも利子いい方に金移す　勇
七福神日本の隅を移動中　道子
強がりが矛を収めて子の家に移したら治る風邪ならもらう風邪　こずえ

＝入選句および佳句＝

口ぐせが嫁に移っている電話　千代子
ストレスを丸い器に移し替え　菜摘
引っ越しの便り幸せてんこ盛り　和代
ホスピスに移り祈りを深くする　さだき
少子化に移る世界の夢わびし　稔
世の移る様を器用に生きてきた　清
移りゆく世の荒波はすさまじい　周子

＝今月の推せん句＝

預かって情が移ってきた仔犬　北山　絹子
同じ空気を吸っているためか、自然に家族になってしまいます。
叱き捨てた種敵陣に移り住み　藤井　文代
見捨てた輩が敵将に再起している姿を発見した時ほど大きな衝撃を受けることはないでしょう。素晴らしい着眼です。
移ろうた果ての素足へ波の音　宇野　幹子
バラ色の終焉とは言えないまでも、ふり向いた時に聞こえた鐘の音が爽やかであったなら、それで最高の人生だったことにしませんか。

＝私の句＝

死んだとき移る豪華な家が建ち
権利書を抱いて金庫に移ります

（掲載洩れの方は役員が添削して返送します）

秀句鑑賞

同人吟　夏目一粋
―2月号から

よく川柳は短縮文芸だと言われています。例えば詩やエッセーの200字から800字くらいの内容を、たったの十七音字に縮小するのですから、まさしく神業かも知れません。

但しその内容や想いまでが、縮小されたのでは価値観も薄らぐでしょう。最大限に生かされた句が日の目を見るのです。選句に当たりましては「気になる句」「読み切れない句」など、未知数で奥深い作品と情緒ゆたかな詩ごころが、さりげなく匂う作品を選んでみました。それだけに作者と選者の想いに乖離が出来ると思いますが、かつてない経験と凄まじいエネルギーと能力を消耗し、つくづく凡人の力の無さを思い知りました。ご容赦ください。

誠実に老いて悲しき認知症

板東倫子

現在一〇〇歳超の百寿者は3万6000人いらっしゃるそうです。体力・記憶力とも若返りが進み、増加率では世界トップレベルなのです。2050年には推計で、なんと70万人にもなると言われ驚きです。

さて認知症ですが長寿に関係なく年々増えているそうです。誠実に働いて来て、ある日突然に認知症になるとは……。老々介護の悲劇を目の当たりにして、こんな哀しいことはありません。神のご加護はないのでしょうか。

この世のことはみんな夢だと思いたい

西口いわゑ

よろこびは確かに夢のようですが、でも苦しみや哀しみも夢であったら、どんなに楽しいでしょう。ふと「龍宮城」を思い出しました。「夢か現か幻か」、そんな夢のような日々を一度だけ送って見たいものです。

放流の雑魚が気づいた海の道

福士慕情

稚魚が一斉にふるさとの清流に放たれて、途轍もない未知の大海を目指すのです。「海の道」とは「志」と「希望」への道でしょうか。慕情さんは人生の喜怒哀楽を投げかけているのです。希望と挫折の中で「雑魚と侮るなかれ」と訴えているのです。それにしても稚魚の必死に泳ぐ姿に哀感を覚えます。

飢えて死ぬそんな時代がないように

木本朱夏

百年に一度という大恐慌・イスラエルとパレスチナの戦争・地球儀を回すと、あちらこちらから人間と地球の悲鳴が聞こえて来るのです。宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の詩が、頭をよぎりました。朱夏さんの祈りは現実味を帯び、心配は尽きませんね。

目を閉じていまタンポポと飛んでいる

近藤佳子

ご存知の通り今、鳥取市は野も山も一面白銀の世界です。大雪には閉口しますが、視点を変えれば雪景色にはロマンがあります。

佳子さんは静かに目を閉じて、やがて来る春の情景に想いを馳せているのでしょうか。タンポポの白い冠毛が飛ぶように、こころも一緒に舞っているのです。この詩ごころが気に入りました。私も拙い詩を綴っています。

いい人だ毒を隠そうとはしない

政岡日枝子

人はみな長所と短所を持っています。この「毒」とは何でしょうか、気にかかります。「欠点」「弱み」「嘘」なのでしょうか。それとも過去の「あやまち」でしょうか。

大方の人が弱点をさらけ出すことは容易ではありません。これを何の悪びれもなく、さらけ出すのですから…この勇気には恐れ入り

ます。素晴らしい人ですね。

ためらいが多くて主張霞んでる

坊農柳弘

人間社会には暗黙の了解という厄介なものがあるのです。どんな「ためらい」か解かりかねますが、「言っていいこと悪いこと」これを間違えますと大変なことになります。人それぞれ考えが違いますので主張を認めてもらうことは難しいことです。でも少々霞んでもいいではないですか…それが生きるコツかも知れませんね。

吠えてます仕舞い切れないもの抱いて

安土理恵

仕舞い切れないものとは何でしょうか。叶わないもの・伝わらないもの…夢・愛・欲・思いやりなどでしょうか。これらの不満が不安やイライラを引き起こすのです。その不満の反動が他人に当たったり、攻撃的になるのです。しょせん人間は弱い生きものです。ほどほどに吠えてください。

嘘言えぬホントのことはなお言えぬ

升成好

好さんは誠実でまじめな人ですね。ややこしい人間関係の中で、この「ホント」に注目しましたが、この本当とは相手の嫌がる言葉と受け止めました。「欠点」とか「弱み」を指しているのですか。ごく稀ですが平気で傷つけるようなことを言う人がいます。能力と良識のレベルの問題ですが嫌ですね。

真実一路ゆっくりと行くかたつむり

永田俊子

私はカタツムリの飄々としたところが好きで、よく川柳に登場させています。この句には詩ごころと情緒があり、真実一路とカタツムリがよく似合います。

人もみなカタツムリのようにゆっくりと真っ直ぐに歩みたいものです。でもこの世知辛い世には無理なことかも知れませんが…。俊子さんの人柄が出ているいい句です。

満月がとてもきれいで妻を呼び

井上松煙

晩秋のよく晴れた夕暮れの空に、三日月を頂点にして金星と木星が、寄り添うように輝いていました。あまりの美しさに妻と孫を呼び三人で宇宙の神秘を堪能しました。

手の届きそうな大きな満月に感動した松煙さん。その歓びを分かち合いたいと思う、やさしい心がうれしいですね。

色の無い風に魂いやされる

中宇地秀四

環境汚染や大恐慌時代にあって、色の無い風を求めることは至難なことです。目には見えませんが雨や風は完全に汚染されているのです。深呼吸もままならぬ恐ろしい時代です。

また人間社会には「裏切りの風」「逆風」「偽りの風」など吹き荒れています。でも「愛の風」「優しい風」「爽やかな風」など人にやさしい風も吹くのです。秀四さんはどんな風に遇ったのでしょうか…。たぶん色のない純粋無垢な風に遇ったのでしょうか。魂まで癒されたと言うのですが…。

トラブルに対処人間試される

吉村久仁雄

私も現役のころ、営業マンでよく苦情処理に当たり、嫌な思いをしたものです。解決の決めては焦らず、誠意をもって当たるしかありません。処理能力の成否によって評価されるのです。サラリーマンの悲哀を思います。

静かだと思えば雪が降っている

髙瀬霜石

私の住んでいる山陰地方は雪の溜まり場なのです。たしかに雪は何のためらいもなく勝手気ままに、忍び寄るように静かに降るのです。私は時どきカラフルな雪が舞っている夢を見ます。薄もいろの雪・薄むらさきの雪・薄きみどりの雪など、つぎつぎと降って来るのです。こんな美しい雪が降ってくれば、雪掻きで苦しむ人たちも、どんなに楽しいことでしょう。手に触れた雪の匂いが恋しくて、また降って欲しいと待ち焦がれることでしょう。でも汚染された黒い雪は御免です。

秀句鑑賞

―水煙抄

―2月号から

吉岡　修

ベロベロバー電話で孫をあやす妻

福田好文

笑いました。ベロベロバーとはあまり聞かぬように思いますが、ぴったりのうまいことばで、情景がいっ気に描けました。

美辞盛られ舞っております絵馬の丑

古田千華

個人情報保護のためとか、絵馬にシールを貼るそうですが、神様にも見えないのじゃないかと、ひとごとながら心配です。こっそりライバルのを見ることも叶わない絵馬風景になるのでしょうか。

マウス持ち時代の端をつかんでる

安藤なつこ

たしかにそんな気分になれます。メールとインターネットとゲームぐらいしか出来ませんが、いっぱしそう思わせてくれるマウス。いいとこつかれた思いがします。

バーチャルの中で命が軽くなる

神野千恵子

斬っても突いても生き返る…。そんなゲームに慣れ親しむと生身の感覚が狂う。平気で罪を犯す。ゲーム業界に是非知って貰いたいと思う一句です。

弱点をカバーしている座りだこ

尾崎ゆめ

座りだこが出来るほど耐えて頑張った自信ということでしょう。老齢のこちら、一時間が限度の身。修業不足を反省させられました。

瓶の蓋あけて男と妻認め

小川良吉

もうこの程度しか示せない男…。うまく妻のよいしょに使われてやる夫。いいご夫婦を表現していただきました。納得です。

儲け話一喝叱えて切る電話

桑名孝雄

何度も痛い目を知っているところへ、またぞろの話に遂に爆発した腹の虫。小気味よく聞かせて貰いました。拍手。

サザエさん一家の名前なら言える

辻内次根

あの子達の、二十五年後が最近CMに登場しました。ほほえましい郷愁でした。この句もそんな想いを語られている嬉しい句です。

アデランスのグレー頼もう春に添え

岩本美緒子

春を待つわくわく気分は、老いも若いも同じ。アデランスの新調に托した楽しい句。きっといいことが待っています。

紅引いて女の歳を若くする

寺井弘子

男から申しても異論ありません。お化粧で女性のご気分は若やぎはるみたいです。きりっとしたすがすがしい表現を感じました。

湯加減を誰も聞かなくなって久し

赤木妙子

誰も無関心なのではなく、オート追い焚きで、いつでも適温であるものということになったからでしょう。諸事便利になって、放ったらかしサービスですむ冷たさを、一句が抉りだしていただいたように思います。

おばかではとても出来ないおばかキャラ

三浦強一

学力テストビリお笑いは日本一

寺井柳童

あほやないのはわかりますけど、学力ビリでは困ります。ニュースもお笑いが顔を出す今のテレビ界にあきれてしまいます。せいぜい川柳の、品のいいユーモアをうんと発信していきたいと思います。

エッセー

BUS STOP

池森子

人間の柵をにんげん越えたがり

私の心奥の片隅にはどうしても忘れ去ることの出来ない憂いがある。

それは今を遡ること何十年という長い眠りの中に棲む一人の短い　いのち…

季節はある夏の終りのころであった。

「生前は妹が大変お世話になりましてありがとうございました…」と死亡年月日が書いてある葉書を見て何故か死亡時の病名らしきところが見当らずに…不思議には思ったが私もまだ若くて学業の途中、自分のことで精いっぱいの毎日を送る身にはそれ以上のことを考える余裕はなかった。

それから半年ぐらいが過ぎて冬休みに入りふる里へ帰省した際には彼女の死亡の理由が大きく噂になって密やかに流布。

ちなみにその時代には現在のようなさまざまな種類の事件などは無くふる里はのどかで太陽はいつも燦燦と頭上にふりそそぎ、月は煌煌と夜道を照らしてくれる、そんな風景であったから…。

その「生前は妹が…」という妹とは小学校から中学校までの同級生の中の一人ではあるがあまり交流はなくただ遠目に見ていて何となく目立つ（可愛くて、特に男の子の追っかけもあったり）存在ではあった。

そんな人だから二十歳を過ぎた頃にはきっと薔薇のように咲き誇る素敵な青春を迎えるだろうと思ったものである。

―薔薇は生への執着が強靭で散らんよりも寧ろ枝上に朽ちるのを選び恰かも死を嫌い怒るが如し―と形容するのに…。

なぜ十九歳の若さで死を選ばなければならなかったのか？

御両親にも姉弟にも相談することもなく、また気付かれることもなく…と考えたところで私は愕然として立ち竦むことになる。

彼女は農業で服毒自殺、私の暦を逆算すると…その死亡年月日から約二週間前に会っていることになる。

それは私が夏休みにふる里（実家）へ帰省する途中のバスストップでのことであった。

乗り替えるためにバスの待ち時間を椅子に座っているところへ彼女は近付いて遠慮がちに、そして俯き加減に「あなたに是非相談したいことがあるので聞いて欲しい」と言った。

「わたしでよければ」とは言ったものの、もう少しで本論に入るかなーと言うところで待っていたバスが来てしまった。

私はこのバスに乗らねば次便まで約一時間は待つことになる、結局何の話も聞かずに「元気でね、じゃーまたね」と手を振ってバスに乗った。振り返るといつまでも手を振ってくれる彼女が居た、そしてそれが最後だったとは…。その日から約二週間後のことになる。

にんげんの柵を霊柩車が走る

何と愚かな私だったのだろう。

聞くべきところ、見るべきところを素通りした私は一つの命の止まり木を造ってはやれなかったと悔いる。

あのバスストップは彼女が生と死を賭けて…そして絶望感に崩れ落ちた十字路ではなかったかと想うとき、私は彼女を理由はどうあれ結果として見捨てたことになったのではないかと今でも憂うのである。

あの日から四十七年の歳月が流れる。

あなたは千の風になれたのだろうか

■句集紹介

独　標

早川　遡行著

金子　美千代

私達「川柳茶ばしら」の代表早川遡行さんが古希を記念して句集『独標』を上梓された。

句集『独標』には序文がない。何事につけ一匹狼を自認していられる遡行さんらしいなと思った。遡行さんとは十五年程川柳でお世話になっているが、いつも超然としていられる。

以前薫風先生からいただいたお手紙にも、「第四回川柳塔まつりに早川氏が来阪して下さったが、お愛想一つ言われなかったけれど友情に胸を熱くしました。」と書かれてあり、やっぱり早川さんらしいと思ったのを覚えている。

出世より山を選んだペシミスト
山だけが生き甲斐という親不孝
登山靴穿いた時より孤高とす
現実に背を向け劍長次郎
雲はいい無垢で気侭で豹変で

山男の遡行さんの句集らしく山の幻想的な写真と共に一句一句が私達をどんどんと山へと誘ってくれる素敵な構成に心を奪われる。

句集のタイトル「独標」は西穂高の〝西穂独標〟、槍が岳北鎌尾根にある〝独標〟を意識して付けられたそうです。

あとがきにもあるように「私というひとりの人間が社会の片隅で悩み、悲しみ、笑い、叫び、葛藤して生きた証」という意味が込められているそうです。

一本の道へ迷ってばかりいる
枕木の一生だったループタイ
困った子困った子だと自慢の子
友情の証見ぬ振り知らぬ振り
ポケットの中で震えている拳
逆らって存在価値を確かめる
定年をしおに夫婦の味となり
仙人のような暮らしに憧れる

遡行さんの句は、どの句も衒いがなく定型のリズムのよさがストンと胸に落ちて共感を呼ぶ。まさに飾らない遡行さんのお人柄そのままの遡行さんの「人間詩」だと思う。

ボケという奥の手をまだ持っている
僕ひとりボケなかったらどうしよう

えっ意外な発見です。想像するだけで何だか可笑しくて怖い。

十万へ八万ほどが足らぬなり
先生と呼ばれ階段蹴つまずき

飄飄としていながらもどこかユーモラスな遡行さん。かつての文学青年でペシミストの遡行さんは今ではご自宅の句会で元和菓子職人の腕前で手作りの和菓子を振舞って下さったり、時折近郊の山歩きへ私達を連れて行って下さったりと、とても面倒見の良いリーダーである。

そして遡行さんと言えばお酒、句集には「酒のうた」と題して67句ものお酒の句が各章の間に収められている。

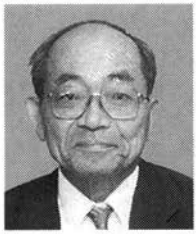
杜甫李白酒で詩を詠む癖がつき
悪いのは酒で私は悪くない
男対男の話酒が要り
二次会へ軍歌となってなだれ込み
何時か逝くなどと気弱な酒となり
俺はビールが好きだ文句があるか

山を愛し、お酒を愛し、水墨画や文芸に親しみ一本の道を貫き通してこられた遡行さんいい人生だなと思う。

これからもお元気で「川柳茶ばしら」のために、何よりも今まで支えてこられたおやさしい奥様のためにお酒は適量にとお願いして、乾杯！

遡行さん、おめでとうございました。

刃毀れの包丁研いでまだやる気



追悼

濱野奇童氏（享年81歳）

新家完司

暮れも押し迫った十二月二十九日の朝、一本の電話で奇童さんが亡くなられたことを知りました。そして、「九月にお会いしたときはあんなにお元気そうだったのに！」とびっくりしました。

九月六日、弓削川柳社の創立六十周年記念大会前夜祭で同席させていただき、酒を酌み交わしたときは「快癒されたのだ、よかったよかった」と思いました。

また、翌日の大会当日も選者控室でにこやかに談笑されていましたから、ご病気のことはすっかり私の頭から消えていました。それだけに、この訃報に接したときは本当に驚きました。

平成二十年の大晦日、津山シティホールでの葬儀では、奇童さんを慕う人たちが会場からあふれ、ホールまで埋め尽くしていました。私は読経を聞きながら、奇童さんの風貌や声などを思い出していました。

奇童さんは、「温厚篤実」という言葉がぴったりの人でした。それは。天性の優しさに加え、長年の教職で培った他者に対する思い遣りが自ずと表われているのでしょう。私のような未熟者にもいつも丁寧に接してくださいました。奇童さんとお会いするたびに、私の粗雑さや至らなさを反省させられました。そして、「このような人物にならなければならない」と、思い知らされました。

葬儀から帰宅して「川柳・紋土」の記念大会号を読み返しました。奇童さんは数句入選されていますが、中でも、

頂上へ登ると続く道がある

という句が今日の日を暗示しているようで胸が詰まりました。「頂上」とは「山のてっぺん」のことですが、地位の最高位を言うこともあります。しかし、この大会が奇童さんにとっては最後の大会であったことを思うと、「人生の頂上」とも思われるのです。人生の頂上とは人生のゴール、すなわち本日の葬儀です。そして、「頂上に登ると続く道がある」とは「あの世は終点ではなく、まだ続く道がある」とも受け止めることができます。

今、奇童さんは栞先生や薫風先生、そして、諸先輩とあの世の句座で談笑されているのではないかと思うのです。

法名　慈教院諦譽育英浄基居士

遺句抄

残り火を掻きたてにくる南風
窓際にいて故郷の青を恋う
見栄はもう止せと年金証書くる
みんなして主役を乗せた泥の舟
まだ奥があるぞと鍾乳洞の水
万歩計 白寿の夢を見て歩く
秋霜の祈りへ神の鈴が澄む
胃に落ちてビールが愚痴を言いはじめ
赤飯もそこそこ孫は塾へ行く
午前二時時計は待ってなどくれぬ
そこまでは書いてはならぬ芯が折れ
円周をぐるぐる回るだけの知恵
野望抱く一人枯野をさすらいぬ
蝶も来ぬ鉢で造化だと気付き
花道へ惜しみなく散る花吹雪

（編集部抽出）

追悼

小林トメ子さん

平成20年11月30日没
享年94歳

昭和41年から亡くなるまで川柳塔に同人として在籍しておられたトメ子さんをご存じの方も少なくなったが、お人柄をよく表しているエピソードがある。

それは川柳塔まつりの懇親宴でのこと、よく隠し芸を披露された。たとえば「あこがれのハワイ航路」の曲に合わせて独自の振り付けによる踊り、それも水兵服にサングラス、マドロスパイプを咥えたいでたちで登壇され、ユーモアたっぷりに踊られたのである。

ふだんはあまり目立たぬ奥様であったが、ちゃんと扮装用の小道具を持参して、まつりに出席され、飛び入り出演をされて会場をわかせたのである。

今はご冥福をお祈りするばかりとなった。

遺句抄

姑は足音立てず朝支度
仏像のかすかな笑顔和むなり
軽い気で偽ったのに信じ切り
契約が欲しさに苦い酒も飲む
通帳がじわじわ目減り落ち着かず
老い先を退職金で割ってみる
台風も紀州の港こいしがり
温室で四季だまされた花ひらく
泣き虫を上手に演技する女
凄い風手抜きの仕事気にかかり
いつまでも生きると思う老夫婦
妻が留守静かで長い一日だ
口紅を拭き消したのに妻の勘
攻めるにも逃げ道一つおいてやり
玄関に男女不明の靴があり
公園に子供がおらず鳩ばかり
仏壇へパンを供えて言い訳し
宿題で昔話を祖母に聞く
介護する妻ハイハイと独り言
年聞かれ満と数えとどっちしょう
お年玉　札にアイロンかける母
虚しさを戦火の灰が見せつける
自動車を買えば家業を継ぐと言い
高級地猫もプライド持っており
台風に負けじと地震武者震い
老いの身にマニュアルなんてうとましい
コンビニに飽きて手作り母の味
小遣いをやればたちまち行方不明

（文責　編集部）

青ペン赤ペン

不二田　一三夫

多い日には電話が20回くらい間違ってかかってくる。線の故障らしいが全くうんざりする。

「うどんやか鮨屋なら得意先を失ってしまうね」と路郎先生もあきれた顔をなさる。途端にまたリリリときた。「違いますよ」と言いかけたら、米子の川柳家から「先生ご在宅でしょうか」

× × ×

月の半ば過ぎ、編集室は戦争状態に入る。先生ご一家は挙げて校正に、印刷所往復に、翌月号の原稿整理に、あらゆる選に、お食事も手の空いた人からというありさまである。この中にあってキチンと時間通りに食事をするのは猫の丑松だけである。

二階へ上がりたい、近所の恋猫に逢いたいと思えば、襖や障子の前で座り込みニャアーニャアーの連続である。結局青ペン赤ペン机上を走るこの大多忙のさ中、誰かがペンを置いて立ってゆかねばならぬ。—猫の手も借りたいという時に。—川柳雑誌三四八号より—

（昭和三一年五月発行）

第33回 全日本川柳2009年札幌大会

日時　平成21年6月28日（日）午前10時開場
会場　京王プラザホテル札幌　2F　エミネンスホール
〒060―0005　札幌市中央区北五条西七―二―一
TEL 011（271）0111
交通機関　新千歳空港駅からJR札幌駅（快速エアポートにて約36分）札幌駅より徒歩5分
宿題　**第一部**　4月15日締切（当日消印有効）
（事前投句　高校生・一般の部）
「岬」赤井　花城　選　「牛」辻　晩穂　選
「彫る」井原みつ子　選　「広い」大野　風柳　選
（事前投句　小・中学生の部）
「ポテト」米島　暁子　選　「広い」岡崎　守　選
「自由吟」田辺　進水　選
専用用紙のない方は2×16cmの句箋紙一枚に一句宛記入・各題二句・無記名、封筒の裏面に住所・氏名明記。
投句料　**一、〇〇〇円**（定額小為替・現金書留）を同封して左記宛郵送または郵便振替口座へ送金のこと。〈当日消印有効〉
小中高生は投句料無料。
投句先　〒530―0041　大阪市北区天神橋二丁目北1―11―905
㈳全日本川柳協会　宛
TEL 06（6352）2210　FAX 06（6352）2433
郵便振替口座　00970―9―35755
宿題　第二部（当日投句、11時10分締切）
「像」熊谷　岳朗　選
「走る」西出　楓楽　選
「自然」島田　駱舟　選
第二次選者　今川　乱魚　大木　俊秀　佐藤　岳俊
田口　麦彦　森中惠美子
各題二句、当日配布の句箋に記入。
参加費他　四、〇〇〇円（参加費二、〇〇〇円、昼食他二、〇〇〇円）
表彰　(1)文部科学大臣賞　(2)参議院議長賞　(3)川柳大賞
(4)大会賞　ジュニア部門は賞状とメダルを予定

＊

㈳全日本川柳協会大会委員長　礒野いさむ
全日本川柳札幌大会実行委員長　石井　有人

∧表彰式典・前夜祭ご案内∨

◎表彰式典　平成21年6月27日（土）午後5時半
（功労者・大会十年連続出席者・川柳文学賞）
◎前夜祭　表彰式典後、同一会場で
会場　京王プラザホテル札幌　2F　エミネンスホール
〒060―0005　札幌市中央区北五条西七丁目二―一
TEL 011（271）0111
参加費　八、〇〇〇円（会食・アトラクション）
大会・前夜祭のお問い合わせ先
〒069―0813　北海道江別市野幌町31―21
浪越　靖政　方　日川協札幌大会事務局　宛
TEL・FAX 011（389）5340
携帯電話 090―5222―5373
大会・前夜祭参加費の送金先　4月15日締切
郵便振替口座番号　02740―3―65843
日川協札幌大会事務局

∧宿泊・観光ご案内∨

宿泊　京王プラザホテル・札幌グランドホテル 他
宿泊料金・一泊朝食付・税込み　11、000円～16、500円
航空・宿泊パックもあります。
観光▽運河と硝子の街 小樽を巡る
6月27日（土）　12～17時　3、500円
札幌駅北口　鐘の広場　12時集合
最少催行人員　35名様
▽旭山動物園・世界遺産の知床を訪ねる
6月29日（月）～30日（火）　32、000円
ご宿泊ホテルへお迎えに上がります。
宿泊・観光申し込み・問い合わせ先
トップツアー㈱札幌支店　担当者・岡本　康佑
TEL 011（242）1167　FAX 011（222）4357

本社二月句会

二月九日（月）午後一時
アウィーナ大阪

日脚が伸び少しずつ春に近づく気配が感じられる。曇り空ではあったが、この時期にしては暖かく二月句会は95名の出席を得て定刻開催された。

はじめに昨年十一月亡くなられた同人の小林トメ子さんの冥福を祈って黙祷を捧げる。

お話は西出楓楽理事長。橘高薫風作品〝固有名詞の句を読む〟と題して薫風作品集より12句を選んで解説された。

薫風作品には固有名詞の句が多い。固有名詞の句は〝動く句〟になりやすいが、薫風作品は決して〝動く句〟になっていない。

薫風先生の選ばれる句は頭の中で考えただけの句ではなく何かをきっちり掴んでいる句でなければならない。固有名詞を使った句が動く句になっていないのは何かを掴んでいる句だからである。

固有名詞には天城峠、牛尾の湯、吉井勇、李白、大伴家持等々が使われている。

薫風先生は史実、俳句、短歌、万葉集など幅広く勉強をされ、豊富な知識により句を詠まれていた。

その各々の句の意味、人物像、背景、ストーリーの解説をされた楓楽さんの知識力、勉強ぶりにも併せて感服させられた30分であった。

（郁夫記）

月間賞は冨山ルイ子さん（寝屋川市）に輝く。

（司会―美籠・昭）（脇取り―㊀五月・月子）
（受付―桃花・日の出）（清記―光久）

席題「甘　い」　山口　光久選

甘い汁吸うてメタボの天下り　幸雀
甘い汁吸える仕組みは残される　准一
もてます甘いマスクで詐欺師です　みつこ
愛してるなんて今更言わないで　㊟千代
父はいつも母にはとても甘かった　太郎
甘いなあ儲け話に乗るなんて　勝弘
愛をたっぷり子供は甘く育てない　シマ子
ちちははのやさしさ責めてばかりいる　恵子
母乳には甘い慈愛の味がある　章久
考えの甘さが招く向い風　美籠
相場師の吸うだけ吸った甘い汁　満子
土壇場に土下座だなんて甘すぎる　保州
甘い言葉にふらふらしたらあきまへん　太郎
甘言に乗って人生踏み外す　集一
どうしても女性とみれば甘くなる　見清
イケメンの甘い誘いに酔わされて　柳弘
幾久しく頼むだなんて甘すぎる　ばっは
欲呆けに女相場師甘い罠　淳司
私だけのものと思っていた甘さ　冨美子
偏屈が外では甘い好々爺　正雄
アメリカの核に甘えて半世紀　尚士
訳ありのふたりへ甘い春の風　朝子
嬉しい日は甘い音して鳴る時計　章久
年金では甘い罠にもかかれない　満子
寛刑に遺族の無念晴れぬまま　良一
好きな人甘い言葉で胸を刺す　日の出
核で守る平和甘くはないですか　ダン吉
もう一度甘えてみたい亡母の膝　無限
悪いこと社会のせいにする甘え　玄也
またしても詰めが甘くて逃す運　好
女神だと信じた僕が甘かった　賢子
人類を甘やかしてはいけません　保州
佳
政治家に甘く見られている庶民　仁清
請求書持って女将の甘い声　明子
切り口の甘さが傷を深くする　遠野
大好きな人に点数甘くなる　准一
歯車は少し甘目が軋まない　無限
人
チョコレート下さい君に仕えます　孝一
地
隙だらけ身内に甘い設計図　求芽
天
自己主張自分に甘い言葉塗る　公誠
軸
甘い点くれない教師好きになる

兼題「襟・衿」　徳山みつこ選

襟正す心揺さぶる札の束　庸佑
のり効いた衿が希望に燃えている　美籠
辛酸をなめた女の衿ぼくろ　満作
襟足の黒子男の骨を抜く　郁夫
襟正し口ごもってるプロポーズ　賢子
襟足におんなの武器が匂いたつ　冨美子
定年日襟を正してありがとう　加お里
襟首に枯葉マークをつけられる　公誠
襟ぐりを深くとってる魔女悪女　淳司
ケイタイで妻に襟首掴まれる　郁夫
襟立てて心の溝が埋まらない　無限
懐が寒くて顔も衿の中　すみ子
衿あしと着物をほめてそれっきり　月子
えりあきの広さを覗く冬の風　美代子
胸襟を開くには酒ちと足らん　修
九条を考えるとき襟正す　黒兎
ホワイトカラー晴れて息子の門出の日　賢子
襟がみを不況にむんず掴まれる　寿美
二ん月の風は襟元ねろてくる　一歩
襟立ててみても凌げぬ不況風　玄也
天下り渡りに正す襟がない　卓
リストラの風襟首を撫でていく　良一
大空へブルーカラーの夢開く　仁清
襟を正して遺言書書き直す　俶子
衿カフス白く仕上げて妻の自負　すみ子
ふる里の風に襟首掴まれる　無限
衿ボタンきっちり止めている硬派　美代子
詰襟の写真にまじめそうな僕　時雄
白いネッカチーフで散った特攻　哲男
詰襟で学徒出陣させた罪　淳司
胸襟を開いた酒はよく笑う　好
胸襟を開いて煮え湯飲まされる　幸雀
佳
総理殿襟を正すと読めますか　ダン吉
衿元をすっきり明日から巣立ち　月子
終戦日父の軍服星一つ　(志)千代
胸襟を開けば鬼もやはり人　直樹
誘蛾燈のように衿を開けている　舞夢
人
詰襟に背筋伸ばした跡がある　千恵子
地
襟章に消えぬ昭和の刀疵　冨美子
天
衿を正して日本語と向き合いぬ　希久子
軸
衿元がしゃんと決まらぬ日の焦り　朝子

兼題「なんだか」　角野仁清選

燈明が揺れるなんだか気に掛る　庸佑
あの噂なんだか変な動きする　美義
義理チョコになんだか胸がさわぎだす　久峰
つっけんどんなんだか僕を好きらしい　朝子
嗚呼なんだか興味が湧いてきた漢字　堅坊
結婚はなんだか禁固刑みたい　良一
たんぽぽが咲いてなんだかいい予感　朝子
腹時計なんだか少し遅れがち　千里
給付金名前も変じゃないですか　ダン吉
譲られた席が何だか暖い　黒兎
春ですねなんだか胸がキュンとする　一歩
半円の虹へなんだかいい予感　賢子
そつの無い男なんだか嘘っぽい　幸雀
僕を見てぴたりと止んだ笑い声　時雄
税もどるなんだか得をした気分　修
笑いながらなんだか涙とまらない　求芽
喜寿を過ぎなんだか元気盛り返す　ルイ子
通夜の席昔の恋に会う予感　郁夫
食べた筈なのになんだか腹が空き　朋月
雪催いなんだか君に逢いたくて　朱夏
親しげな電話に罠がありそうだ　像山
恋かしらなんだか胸がときめくの　集一
出世した友がなんだか遠くなり　遠野
立て板に水でなんだか嘘くさい　准一
立春やなんだか鼻がむず痒い　美代子
不器用な愛もなんだか素敵だな　無限
すいている医者もなんだか不安です　(矢)五月
イエスマンなんだか敵になる予感　富子
三十品目なんだか太りそうですね　日の出
なんだかの正体恋のはじまりか　耕治
日脚伸びなんだか得をした気分　楓楽
梅咲いてなんだか君に逢えそうな　みつ子
佳
恋かしらわたしなんだか熱っぽい　ふりこ

唇が今日はなんだか濡れている　則彦
朧月源氏の君に逢えそうな　みつこ
ドクターのメスがなんだか震えてる　満子
仏壇の灯がゆれている胸騒ぎ　哲男
人
半額になると何だかほしくない　義
地
機嫌よい妻がなんだか恐ろしい　楓楽
天
似た過去があってなんだか放っとけぬ　無限
軸
この国も何だかうすら寒くなる

兼題「囲む」　**水野　黒兎選**

九条のパワーで地球儀を囲む　ダン吉
美女ばかりに囲まれるのも草臥れる　玄也
万馬券怨嗟と欲に囲まれる　孝一
百歳を囲む息子ひとりが欠けている　シマ子
車椅子囲むと空がよく笑う　無限
孤独感つのるネオンに囲まれて　像山
取り巻きのお世辞信じていた迂闊　良一
囲み記事にやっと見つけたい話　見清
欠席を丸で囲んでまた迷う　楓楽
アンケート丸で囲んでもの足りず　保州
取り囲む敵に味方のはずがおり　遠野
四面楚歌ネット社会の魚篭の中　千恵子
取り巻きの世辞に浮かれている二世　玄也
取り巻きが囲み濾過した話だけ　正雄
冬囲いの中で育った萌やしっ子　昭
白蟻に囲まれている三代目　時雄
雑音に囲まれ酸素不足気味　舞夢
掌で囲むキャンドル慣れてきたひとり　月子
カギカッコで囲む私のテリトリー　朱夏
母という囲みの中を抜けられぬ　啓子
老いという囲みに挑む辞書を繰る　冨美子
囲まれていたくて撒き餌してしまう　(矢)五月
美しい星に囲まれ病む地球　幸雀
母さんを囲むと父の咳ばらい　瑠美子
有刺鉄線で囲み孤独をかみしめる　朱夏
わが身だと囲む善意の派遣村　ダン吉
見てるからね僕のお棺を囲む顔　淳司
三世代それぞれ違う鍋囲み　宣子
甘言に囲まれ脳が糖尿病　千恵子
キムチ鍋愚知もふつふつ囲んでる　ふりこ
真っ直ぐに正論を吐く四面楚歌　幸雀
モルモット医者のタマゴに囲まれる　美代子
佳
鉄板を囲み政治を焼いている　みつこ
平和とや核と地雷に囲まれて　保州
善人に囲まれ外す鬼の面　鐘造
ドクターの回診ほやほやも囲む　俶子
善人に囲まれ取れぬ肩の凝り　楓楽
人
金融危機に囲まれ逃げ場ない地球　寿美
地
ゆりかごを囲んで未来図を描く　無限
天
囲みの隅を少しだけ開け子を放つ　昭
軸
影揺れて囲炉裏に続く懐古談

兼題「冬　眠」　**鴨谷瑠美子選**

戻るまで我慢冬眠させる株　庸佑
山の神冬眠させて酒をのむ　螢
冬眠に入った妻を持て余す　准一
桃の香へ雛は冬眠から覚める　天笑
冬眠は出来ぬが昼寝なら出来る　欣子
半世紀冬眠でした老い二人　公誠
冬眠をしてた魔球が目を覚ます　啓子
認知症で冬眠に入った脳　(志)千代
ケータイを持って冬眠いたしましょ　ルイ子
冬眠に入るサヨナラ言ったから　(矢)五月
冬眠は貴方の胸で眠りたい　集一
冬眠ができそう僕の皮下脂肪　好
開発へおちおち冬眠も出来ぬ　賢子
恋破れしばらく静か冬眠す　舞夢
まっ先に冬ごもりから覚めた梅　哲男
冬眠をした春のお花は美しい　日の出
噂消えるまでは冬眠しています　玄也
再生へゆっくり冬を眠らねば　希久子
冬眠の心をひらくいい便り　朝子
冬だからマムシ注意の道も行く　弘風
四季咲きも冬眠したい時がある　良一
花粉症冬眠したい季節です　ふりこ

冬眠をオーイと起こす太い声　　千枝子
佳
人間に冬眠と言う隠れ蓑　　鐘造
春一番脳よ冬眠から覚めよ　　天笑
冬眠の巣となっている掘り炬燵　　美代子
冬眠中です目覚ましはいりません　　昭
絵手紙に冬眠中とかき添える　　美籠
人
サーカスの熊冬眠も出来ぬまま　　みつ子
地
冬眠はやめてドレスを買いに出る　　月子
天
生きてるか冬眠なのか突いてみる　　加お里
軸
冬眠のうちに噂になった恋　　喜子

兼題「真　相」　　**河内　天笑選**

真相のわからぬままの偽装米　　久峰
敗戦の事実が胸をかきむしる　　房子
真相は死に損なった人ぞ知る　　直樹
告発の火の手で暴く裏のウラ　　俶子
真相が解らぬままにデスマスク　　美籠
然り気なく真相さぐるロバの耳　　弘一
真相を知らないままで生きている　　勝弘
真相はいまだ曖昧毒ギョーザ　　鐘造
真相は一つ噂は信じない　　朱夏
真相は墓の下まで持ってゆく　　黒兎
真相を避けて私は貝になる　　郁夫
真相はその人だけが抱けばいい　　孝一
真相を知った男のノイローゼ　　一歩
真相は時効になってから明かす　　玄也
流れ星になるかも知れぬこの地球　　ばっは
保険料の真相腹の立つ用途　　像山
ご両家が挙式を急ぐ裏事情　　好
シュレッダー闇へ真相食いつぶす　　(奥)五月
真相に時効などある筈がない　　すみ子
真相は石綿だったこの痛み　　美花
真相を聞けば怒りがこみ上げる　　玄也
MRI真相をあばき出す　　希久子
真実を曲げた真相暴露本　　保州
真相は語らず妻に土下座する　　遠野
究明しませんこのまま居たいから　　昭
真相が判ってからの不しあわせ　　朋月
真相が分かりロマンがひとつ消え　　一風
真相はまことしやかに伝えられ　　義
真相は献金だけが知っている　　ダン吉
真相を笑顔に包み友見舞う　　尚士
真相を掘れば地雷につき当たる　　楓楽
目に涙一ぱい溜めてうそを言い　　日の出
幾つもの真相がある歴史観　　見清
しっぽ残して真相は闇の中　　啓子
母さんはだまっているが高い服　　日の出
美人でひとり真相誰も知らんらし　　一風
佳
本命でなかったことをチョコで知り　　宣子
わたしの子ですがあなたの子ではない　　卓
真相を探ってるうち穴に落ち　　舞夢
勝てば官軍真相をぬり変える　　求芽
オブラートに包み真相飲み込んだ　　美代子
人
父の名は告げずにそっと生むつもり　　集一
地
真相に触れないことも思いやり　　美籠
天
真相をやっと喋れるようになる　冨山ルイ子
軸
真相はここよ預り所の五億

川柳塔みちのく顧問
波多野五楽庵傘寿記念句会

とき　**四月十二日**（日）締切一時
ところ　弘前プリンスホテル（弘前駅前）
0172―331―5000
会費　四千円（銀親会・記念品・発表誌）
宿題（各2句）**共選**
「現　役」　大黒谷　サチエ　選
千島　鉄男　選
「歯軋り」　櫛引　八千代　選
加藤　彩人　選
「傘」　工藤　青夏　選
佐藤　古拙　選
◎**謝　賞**　**選**（遊びごころで創作して下さい）
「転　生」（2句詠）波多野五楽庵選
宿題謝選の合計点二十位まで
主　催　川柳塔みちのく
連絡先　小寺花峯（☎0172―44―7378）

毎月24日締切・35句以内厳守　編集部

川柳塔みちのく（青森）　小寺　花峯報

雑巾もスーパーで買うヤングママ　初枝
タバスコをたっぷりかける覚めた男　綾子
唐辛子名脇役でいる誇り　きよし
床柱に胡坐の僕が睨まれる　芳生
年末にはしゃぐ出番の古雑巾　柳子
床の間の男に水をやらなくちゃ　和香子
それなりに働きましたぼろ雑巾　ヒサ子
リストラの日まで雑巾しぼられる　美鈴
床の間に忍の一字の軸と居る　一呑
告白のメールを打って寝るとする　あすなろ
漬物に色どりそえる唐辛子　隼人
祖母の針雑巾ならば引き受ける　銀波
乳離れ出来ぬ乳房に唐辛子　ふさゑ
花好きの葉の埃拭く深い愛　花匠
唐辛子カラスなんかは怖くない　雅城
亡母のゆかた雑巾になり最果てる　愁女
雑巾と一緒に泣いた母の過去　井蛙
思い出を拭いた雑巾絞れない　黙人
のっぺらぼう振りかけてやる唐辛子　霜石
決断の時にはまぶす唐辛子　花峯
雑巾の縫い目に老母の鼻眼鏡　慕情
自堕落な夫にかける唐辛子　一花
活断層の上だとしても床を敷く　劦
唐辛子おぼろおぼろと月に干す　五楽庵

尼崎尾浜川柳会（兵庫）　田原　宏一報

涙まで借りて二倍の初笑い　宏一
児は宝王様じゃない躾する　イサミ
お帰りの返事に慣れているオウム　よしひさ
元気でいます父母への返事ご仏前　亀与子
また来たか本屋の親父ははたき持ち　野薫
くる年に夢ふくらんで孫の恋　よし子
水仙がもう春ですと電話くれ　真陶
倍努力しても返せぬ親の恩　美知子
温かい笑顔をくれたひとを恋う　かずお
着ぶくれて雀も春を待っている　靖鬼
潮時を摸索しながら時が過ぎ　正治
行きあたりばったりで行く自分主義　江美
初春やしらが染めして若返り　雪菜
こんな夜は湯たんぽ抱いて寝るが勝ち　政江
電話鳴るハイハイハイと炬燵出る　勝巳
少年の日よ壮年の日よと手をかざす　比ろ志
小正月また休肝日やって来る　孝一
降りますのランプを抱いた子に押させ　耕治
鍋囲み絆が倍加する家族　鹿太
また来ると母の寂しい丸い背な　五月
生返事に欠伸で返す三ヶ日　美義
不況でもけっこう売れる福袋　朋月
自信ある返事の声がよく通る　奮水
駅の椅子人生ドラマ見ています　美籠

川柳若葉の会（大阪）　宮﨑シマ子報

一人旅隣二人の仲の良さ　喜美子
見かけなくなって気になる老夫婦　加津子
笑っても喧嘩をしても二人きり　能子
ふたりっ子政策インド守らない　香住
流れついた街青山と決めている　弘直
遠い人の訃を聞く夜の流れ星　シマ子
ひと言で流れが変る会議室　慶子
聞き流す癖がついてるある余裕　烈
言いすぎた今日を流そう仕舞風呂　ますみ

はびきの市民川柳会（大阪）　徳山みつこ報

どん底の株価血走る年の暮　久仁子
顔見世で京の師走は活気付く　庸佑
一年のずぼらがたたる十二月　光男
落葉カラカラ師走の風と遊んでる　ヨシ枝
繁栄を願う新年丑だるま　美喜
たっぷりとボインに触れる乳しぼり　一知

バカデカイビフテキ喰った馬鹿ぢから　一屯
出荷する牛と別れの目がうるむ　恵子
丑年の娘やっぱりのんびりや　ちづる
天神さんの牛は小銭を溜めている　扶美代
責任があるから酔うことできません　敏
割り勘へ負けずに飲んだ二日酔　耕策
お正月ほろよい酒がよくまわる　正子
酔眼に降車の駅が過ぎていく　章司
肩書きを外せば酔いがよく回る　泰子
酔い覚めてかぼちゃの馬車の朝でした　喜久子
二日酔い何か約束したらしい　一壺
おーい百歳まだ夢を持つ覇気をもつ　獏沓
事故現場おーいの呼びかけキャッチする　フジいさお
山頂を極めおーいと雲を呼ぶ　みつこ
土壌汚染おーいミミズよ生きてるか　六点
北の島おーいと呼べば聞こえそう　雪江

川柳塔きゃらぼく(鳥取)　大塚　恵子報

干し柿の種の野心はさらにない　てい子
赤い実はみんなあげるよ寒雀　ゆき
綾取りがもつれそれから冬ごもり　亜弥
今夕はノーベル賞を楽しもう　田鶴
亡き父母に守られている手を合わす　玲子
客来る孫がヒ孫と嫁見せに　初枝
喪のはがきどさどさと来る年の暮　寿々子
友の輪に護られているわたし　恵子
窓たたく風は初冬のたたずまい　雪江
月の子を孕んだこともあった池　千代
毒のある話はいつも盛り上る　ふみ
カサコソと風が落葉を踊らせる　晴子
カーナビで道の駅まで試運転　清子
接待が下手でいつでも笑い者　那珂子
朝方の夢が今日への鍵となる　日枝子
明日こそあしたこそはと陽が暮れる　春枝
偶然の出逢い結んだ赤い糸　やえ
自画像にわたくし彩の雪が降る　瑞枝
会合を重ねて耳が太くなる　晶子
おしながきながめたのしむ友の顔　章江
せかせかと節季の峠暮れ急ぐ　すみえ

ほたる川柳同好会(大阪)　水野　黒兎報

足踏みをしながら風を読んでいる　昭子
引越しへ我家の歴史見る思い　桂子
成人へ踏み出す一歩投票所　柳童
妻の愚痴あっさり受ける馬の耳　勇治
玄関を右で踏み出す旅の無事　幹治
ライバルと同じわだちは踏まぬ意地　久子
自分史を子供達には渡しとく　信男
弾痕に歴史の重さ噛みしめる　祥風
独裁者の栄華が世界遺産生み　見清
踏みあとに芽生えた花の凛として　肋骨
踏張って生きた人生悔いはなし　禮子

佳句地十選　(2月号から)

渡辺富子

研ぎすました心の声を聞いている　葉子
しゃかの手にジャンプするのが未来です　行男
父のバトン掴むと熱く炎えていた　一風
無になって時空を越えてゆく翼　厚子
浮世とや背伸びしている剪斗袋　保州
三億円入れる金庫は買うてある　哲男
きらきらと暮したいから好奇心　能子
偉人聖人みんな女が産みました　(矢)五月
何もかも忘れて明日は羽化をする　茶子
自由ですか束縛ですかやっこ凧　高鷲

あっさりと土俵は割れぬやっと古稀　黒兎
拉致問題二の足踏んで凍りつく　契子
赤ちゃんの夢みたらしい片えくぼ　春代
仏陀見て歴史を刻む顔清し　長一
人毎に青史一篇胸の奥　勝

川柳茶ばしら(愛知)　板山まみ子報

門松をたてて今年は福を呼ぶ　文男
自転車をこげば灯りも先照らす　幸子
アナログとテレビずーと念を押し　美千代
寒空に寝場所を捜す派遣切り　かつ子
踏切りを潜って急ぐ朝寝坊　遡行

喉もとで内緒話がもがいてる　ますみ
内緒なら打ち明けないでほしかった　由美子
急がずに楽しむ寿命つきるまで　まみ子

川柳塔鹿野みか月(鳥取)　土橋　螢報

神仏にすがり余生も導かれ　かおる
ロケットで導く月の未来像　小生
老境に居てすなわちの物忘れ　汲香
燈明と香が導く寺の門　節子
導かれ東尋坊の崖の上　照彦
未完まだ誘導されるまま生きる　富久江
火傷せぬ距離で導くのも家族　きみ子
善導をするのに主義が邪魔になる　かつみ
学問を奨める迂回路へ連れる　諷人
力では開かぬもみじの拳です　幸安
忍の字が拳の中で時を待つ　重忠
鉄拳のつもりだったに年に負け　稔
はつ春の拳ひろげて福つかむ　(岩)和子
悔しさが拳を強く握りしめ　みどり
虎落笛導くものは風のなか　小鹿
導かれ老いて素直に年が明け　満
導火線もみ消しながら年を越す　実満
熱伝導の弱い夫婦となって老い　宣子
人生を導く酒を注ぎながら　忠良
拳骨をもらった子供強くなり　久枝
威勢よく一年生は拳あげ　永子

ふるさとの原画に父も母もいる　彩子
婿ほしい在来線に乗ってみる　蟹郎
プラス思考忘れ上手な齢になる　弘子
すなわちと説明をする夫婦劇　睦子
豊作だすなわちこれぞ天地人　武彦
涙ポロポロ遣り場ない無念の拳　美恵子
おんなをひらく温くて逞しい拳　孔美子
大木に向ける拳は最早無い　盛桜
決断に拳を堅く握りしめ　(西)和子
拳骨をひらき合掌して眠る　螢

わかあゆ川柳会(島根)　松本はるみ報

ゆっくりと自己主張して雲の旅　恵美子
愛嬌のお世辞で和む笑いの輪　伸子
蒸し焼きにされてにっこり帆立貝　かつ子
水滴の変身見たりぼたん雪　はるみ
退屈も生きてる証昼寝する　好栄
あの日から十年孤独に堪えている　聖子
一本気夢中になれば止まらない　ちよえ
八十路すぎ封印しましょう喉ぼとけ　博利
封印の心を開く春の風　清泉

南大阪川柳会　吉川　寿美報

晴天へるんるん気分バスツアー　なぎさ
予想だにしない人からお年玉　一歩
るんるんと親子揃ってルミナリエ　弘泰

新水着るんるんヤング水しぶき　憲太郎
イブ楽しポインセチアの赤が好き　克己
るんるんは神のシナリオだと思う　雅文
露骨とは遠いしっとりした色気　弘風
好きや言うて露骨にいやな顔された　修
洗い浚いぶちまけてから出す辞表　栄子
恥かしいヌード露骨なスポーツ紙　柳伸
さようならいい思い出をありがとう　集一
今は逆三下り半は女性から　東吉
点になるまで母は手を振っている　千里
伴侶ともお別れの日がきっと来る　勝弘
生きるのにうるさい事がたんとある　志華子
朝帰り妻の仕込みで吠えるポチ　柳弘
病む人をうるさく包む思いやり　嘉住子
仏壇の奥でうるさい父の声　章久
腐るほど貯めて小金に小うるさい　楓楽
ブルトレのテールランプに消えた春　清
チュウしたら見られていたわ青い月　弘子
不況まずブルーカラーを狙い撃つ　尚士
円高でブルーチップも総崩れ　和雄
生きている見上げる朝の青い空　たもつ
ブルーリボンつけて苦悩の拉致家族　あや子
ブルトレが時代の波にまた飲まれ　直子
プロの技ブルーカラーにある誇り　郁夫
ブルースカイ画布にして描く未来地図　ルイ子
生き別れ悔しき海が横たわる　祥昭

正論だが露骨すぎると注意され　三　男
若者は露骨に言わな解らない　柳右子
同僚は部長にばかり酌をする　昌　紀
足跡をきれいに消して別れる気　千　梢
心身ともブルーを託つ更年期　シマ子
永らえて哀しい別れ追ってくる　ひさの

川柳塔わかやま吟社　川上　大輪報

青春の風が反旗を翻す　准　一
ああ青春千人針とひもじさと　英　子
青春を捧げて吹かす兄の風　和　子
成人の日に献血をした笑顔　保　州
青春の思い出熊野古道往く　三　男
八十路でも心青春はにほへと　美　子
イベントの綿菓子ばあちゃんも貰う　よりこ
ふんわりと来る風だから要注意　緑　良
ふんわりと本音匂わす花言葉　智　三
ふんわりと知らぬ月日が舞い降りる　和　香
有終の美をふんわりと舞う木の葉　徑　子
おかしい程ふんわり生きて来て長寿　公　子
ふんわりと大地に根づき生きてゆく　ほのか
欲がないから浮いているシャボン玉　大　輪
正論を押し戻されてから不毛　輝　子
押しくら饅頭はみ出たものは戦がない　紀久子
押さないで下さい目の前地獄だよ　裕　美
つまずきへ時に背押す亡父の喝　怜

年の功荒波まるく押し返す　登美代
ホット押したつもりが冷で震え飲む　謙
正論も多数派意見押しつぶす　俶　子
幸せの扉何度も押してみる　冨美子
福笹を押し戴けば明日は晴れ　小　雪
押し切って男の威厳保たれる　紀　子
押し通す言葉に迷いなどはない　めぐみ
真人間押しも押されもしない世に　よしこ
決断の背中押されて走り出す　寿　子
押印をたどってゆくと火の匂い　あきこ
念を押す九条変えたらあきまへん　ダン吉

あかつき川柳会(大阪)　山本　柳昌報

戎っさん頼んまっせと徒歩で行く　克　己
道草を食ってゆっくり歩きます　正
二〇〇九年希望信じてただ歩く　たもつ
硬骨に生き反戦の二字に死す　ダン吉
こうこつでなくてただただ物忘れ　ルイ子
硬骨に生きた親父の反戦歌　柳　弘
硬骨を通して時に屈しない　卓
いっときの戦火も止まぬ国愁う　君　代
ひと時の安堵さえ無いガザ侵攻　廣　子
九条の旗ひとときも離すまい　一　歩
絵手紙を習うひとときヘタでいい　富　美
生家でのひととき母の娘で過ごす　シマ子
戦火止むひととき願う子の瞳　東　吉

無い知恵は絞らぬ方が無難かも　和　雄
いつの世も絞られるのは労働者　勝　弘
国民の絞った油アメリカへ　紀　雄
うの花のうま煮豆腐より旨い　生　枝
衣食住持てぬ苦渋のこの拳　柳　昌
厚労省みんなの力動かせた　美世子
危機感を背負いしままに春迎え　美智子
日米はガザを見殺し年が明け　勝　久
戦続く消えた命は戻らない　章　久
誤読失言失策政治冬の陣　昭
雨になど濡れたことない総理殿　よし子
言うたけどあとは野となれ給付金　一　行
鶴彬生かしてあかつき川柳会　明　水
海舟や龍馬西郷いま出番　ふさを
変化求め皆身構える〇九年　鈍　甲
炊き出しに涙あしたが生きられる　美津子
炊き出しの湯気が心を春にする　尚　士
憲法をいま光らせた派遣村　美　花
配当も内部留保もして解雇　哲　男
過労死に触れずラッパを吹く社長　保　州

八尾市民川柳会(大阪)　宮西　弥生報

合掌の両手あふれる願いごと　あかり
心込め手編みの帽子夜更けまで　栄　子
妻の名を忘れて乱舞する木の葉　扶美代
短いことばの尻尾がながい　アキラ

さそり座の巳年だけれどやさしいよ　賢子
湯たんぽを起こして回るお年玉　秋子
里の冬種火のごとく祖母のいて　辰雄
ひとつ散りひとつ開いて朝の窓　加央里
自家製の野菜が胸を張る雑煮　いさお
ぎりぎりのところで冬の防波堤　森子
酒好きは酒酒酒の三箇日　欣之
宝くじ狂喜乱舞夢の中　明
反戦の心新たに四方拝　健二
リストラに故郷の山河が暖かい　恭昌
乱舞する女の性の舞い納め　朝子
やさしさに折り目をつけておめでとう　柳弘
ばらまいてみるか定額給付金　奏子
白味噌もあんころ餅も郷土色　武人
近松の墓はここぞね青々忌　桜竜
神ぞ知る地球の乱舞地層見る　幸岳
先ずルール派遣社会にピリオドを　紀雄
乱舞してほしい一羽のトキが翔ぶ　一風
乱舞する季節外れの蝶哀れ　浩三
特別に考えないでいる未来　芳香
冬を脱ぐ山から便りが来る乱舞　弥生

西宮北口川柳会(兵庫)　黒田　能子報

二億円当る初夢獏が食う　茂
登山帽若いわたしを詰めておく　義子
てんこ盛しじみ一山みやげ買う　奮水
山と呼ぶ川と答える妻といる　正和
恋人は山と言う人好きになり　耕治
山の神白寿にピンクまだ達者　一之
裏山で与作が探す埋蔵金　毅
空遠く詩人になって山をみる　基輔
初雪にうす化粧した山の峰　キヨミ
二三回亡妻であったと思う夢　昭三
夢のない男になった大いびき　哲男
夢でないモナリザに会うパスポート　順子
ジャンボで二億黙っていろと夢御告げ　いたる
この頃は夢にも出ぬよ父と母　弘子
夢にまで出る人の名が出て来ない　てる
夢を着て一直線にひた走る　光久
励ましの手紙届いた大震災　春美
ご無沙汰と書いて笑顔思い出す　比ろ志
メールより字も絵も踊るいい便り　愛子
順調と手紙には書く親孝行　直
なおざりの手からこぼれる赤い糸　鹿太
なおざりにしたつけで地球に黄信号　わこ
なおざりに出来ぬわたしの台所　章子
惚けている老母でなおざりには出来ぬ　江美
暗証をメモしてるけどどこのかな　二英
無造作に投げ込むバラはよく映える　孝一
腰曲るも目線を上げて歩いてる　松煙
湯タンポに今日の幸せもろて寝る　美津子
好きにせいこの一言で目がさめる　忠
夕暮れの黄金の空に父の影　早加水
変ったねと言われ変って行くわたし　りこ
オバマ次期大統領へ出したいなあ　富喜子
年明けるたびに昭和が遠ざかる　折杭
おめでとう笑いの種を蒔いておく　哲子
山動くこの一瞬を待っている　宏一

サークル欅欅(大阪)　吉田あずき報

究極のおしゃれ飾らずありのまま　みつ子
年なりのお洒落が気品醸し出す　光久
年一度魂覚ますお正月　たもつ
百歳になってもおしゃれするつもり　楓楽
おしゃれの位置心得てます雪つばき　義子
おしゃれして女活気を取りもどす　いわゑ
すきのないおしゃれ値札ついてます　蕉子
想い出のお洒落な服がノーという　加お里
お洒落にはうるさい人の無精ひげ　昌紀
元旦の色も香りも変であり　哲夫

長柳会(大阪)　村上　直樹報

春を待つ夢もでっかく揚がる凧　直樹
除夜の鐘ネズミに引かれ丑が来た　エミ
年金が振り込まれた日孫が来る　裕興
給付金のおかげ息つく春日和　輝子

春うらいつも以上に夢心地　もこ
親を見てすぐに伴侶と決めました　たけし
小包みに風邪を引くなとメモがある　正博
大河へのメダカの努力受験生　三和子
財斗袋やっと出番の春予感　史
こぼれ種得した気分春の庭　登美子
命ごい俺はしないと決めている　よしお
散歩道花壇の中に春の色　正一
大河ふとせせらぎの頃思い出す　幸雄
止まる位置決めかねている風見鶏　淳司
終焉かドルの権威もくずれ去る　靖博
あの時の二者択一を悔しがる　一慧
ひとつまみ塩が決めてる母の味　和代
合格の孫と一緒の旅プラン　正子
決められた運命に添うて往く八十路　明子
春はそこ前頭葉も動き出す　芳野
我が人生大河ドラマのように生き　武男
古代より生命繋いでゆく大河　孝代
金魚にも大河を泳ぐ夢がある　マサ
小川にもいつか大河に届く夢　英美
大不況大河の如く人を呑む　正美
気宇壮大大河のような人だった　敬二
親指を小指があごで指図する　光弘
悠久の歴史大河の懐に　冨美子
脱サラを決めたあなたの片腕に　けい子
ひとしずくやがて大河となる野望　和子

京都塔の会　都倉　求芽報

国家予算　桁違っても身につまる　文代
胸算用孫の期待を裏切れぬ　啓子
集中力なさを脱する初参り　ふりこ
ご期待に添えずそそくさ輪から抜け　克治
そそくさと旅に出かけた深い訳　庸佑
背を丸めいつもそそくさしてた亡母　綾子
顔見世を見たら今年が走り去る　葉子
福の神がそそくさと行くウチの前　公子
良妻と一緒にいると疲れます　鹿太
強すぎる円が日本の首を絞め　求芽
いくばくかの余命に自我も強くなり　則彦
運命の扉は強く叩かねば　孝一
同じなら美人に看護してほしい　ますお
不景気の行方気になる世界地図　輝美
跳ねすぎて行方知れずの赤い毬　満子
自分史に行方不明のページあり　福子
ブローチの行方あの日のポケットに　典子
日本の四季行方不明になりそうだ　宏子
さようならの行く手は追わぬ夕日見る　昌乃
天国への道を信じて歩いてる　かずお
大空に命の行方問うている　美義

川柳ささやま(兵庫)　遠山　可住報

冬のため白菜たんとたんと漬け　純子
そこそこに歩き真っ直ぐ来た誇り　美緒子
拭きなはれアンタの気持済むように　二英
里帰り欲の袋を置き忘れ　多美子
岩田帯新婚の娘にそっと出す　開子
やさしくて威厳備えた父だった　照代
そこそこの出来ばえ嬉し秋野菜　かほる
防災のグッズ備えて一安心　幸子
政局の風聞く耳を掃除する　冨美
耳そうじ世間の風をとり入れる　美智子
手と足が脳の指図に従わぬ　哲男
掃除機も乗せて下宿の荷が揃い　可住

川柳塔おっぱこ吟社(香川)　川崎ひかり報

飛降りる高さを知っている強み　はつ恵
高望み捨てると風の彩が見え　賢
新高に登り大怪我した昔　あきら
百均が思ったよりも高くつき　八重子
高くないハードルなぜか飛び切れず　よしみ
春がきて高く飛立つ千羽鶴　いさむ
高飛車に出られて晴れぬ胸の内　放任
冗談のあの一言が高くつき　弘
円高の地獄見ているのは派遣　ひかり

川柳ふうもん吟社(鳥取)　夏目　一粋報

年金の迷い子空回りはさせぬ　洋々
政治家もヤクザも縄張りが命　鬼桜

逆ギレの輪ゴムがあらぬ方へ飛ぶ　草風
遺言が私のいのち刻みだす　一粋
天国へ命羽博く千の風　欣之
泣き砂の風と結んでから狂う　幸枝
まったけと蟹で縄張り競い合う　忠良
逆ギレの形に服が脱いである　拓治
川柳と酒がともだちロスタイム　完司
学歴は無いが鍋奉行になれる　宣子
噛み合わぬ夢が磨りガラスの向こう　森子
九条にためらい傷の痕がある　螢
酔っ払い電車に入れるロスタイム　蟹郎
遺言書へそのゴマまで拭めている　夢路
人間の森に詳しくなるカラス　美恵子
遺言の死角に落ちている修羅よ　一瑞
松茸の在り処を書くか書くまいか　金祥
無視というとても静かな仇討ち　無限
国会もガラガラポンの空回り　あしび
東大を出ても直らぬつまみ食い　妻子
シャボン玉としばらく遊ぶ千の風　美雪
空回りああ三万の自殺者よ　義徳
学歴はないがロボットよく稼ぐ　毅
亡き夫もそこにいますか千の風　三津子
父母眠る故郷へ届け千の風　孝男
小卒のアゴで大卒こき使う　志げ緒
一言で私の花芯しびれだす　圭一郎
うれしいと喋りたくなる小雀だ　茂登子
働き終えた身体を還す千の風　かをる
縄張りの中の匂いは火事でした　善夫
逆ギレの君に言葉を見失う　一京
空回りして見る人の裏表　帆雀
命がけ縄張り守る獣たち　(山)節子
逆ギレと舌で転がす負の造語　あすなろ
欲の欲欲のためなら縄も張る　彰夫

高知川柳社　小川てるみ報

まだ若いつもり五感を尖らせる　健
初恋の君は今でも若いまま　典雄
若作り優先席に気が引ける　寅幸
まだ若いわかいと風がけしかける　千鳥
一球に若さはじけるホームラン　淳枝
逢うたびにだんだん若くなるあなた　ふき
ころころと笑いころげている若さ　てるみ
しあわせな耳はよい事ばかり聞き　良雄
全身を耳に産声待つ廊下　三千世
耳年増消化不良になってくる　美々
全身を耳にして聴く神の声　哲史
耳寄りな話で会が盛り上がり　和江
この街と決別をした耳ピアス　京子
衰えはまだ見せてない地獄耳　幸子
福耳に騙されて来た五十年　松風
耳よりな話へ切れた柿の皮　三郎
耳鳴りが明日の天気を予測する　憲一

川柳クラブわたの花(大阪)西川　義明報

眼をとじて君の心を読んでみる　美はる
果物も姿よしから売れてゆき　克美
空缶を蹴ると師走の寒い音　いつふみ
寺参り聞いた説法すぐ忘れ　義明
バスタオル湯上がりの孫追いかける　宏
地獄でも気のもち方で極楽に　正春
公園の秋見せたくて押す車　欣子
私が貰ったほどに感激ノーベル賞　妙子
夫病んで総ての事にたが弛む　俊子
逆境の逃げ道にして本を読む　晴美
メタボではなかった父の太っ腹　浩三
わだかまり溶けぬ氷の生き地獄　孝子
紅葉狩り松茸のないきのこ鍋　和子
母さんは追加の話長すぎる　八寿子
お正月観音の笑み真似られず　ふりこ
どの会も老人力が支えてる　ますみ
愛着と未練が残す粗大ゴミ　はじむ
開業五十東京タワー世界一　たえ子
秀才の友もやっぱりもの忘れ　美代子
冬日静か空気のような妻がいて　耀一
国産が大手を振って陳列に　知佐子
一点の隙のないひと味気ない　民

天下り蹴って介護のボランティア　君江
雅やか苔むす寺の散り紅葉　博子
生活は豊かになって心病む　愛子
遣り繰りは上手なママのエコバッグ　宏至
大丈夫湯舟に声をかける孫　幸枝
クリニックお金払って風邪もらい　荘司
いい笑顔忘れぬように鏡見る　一風

東大阪川柳同好会　森下　愛論報

車間距離守って温い三世代　和子
酒か車か二者択一で事故防ぐ　秀夫
手を叩き紅葉へ弾む車椅子　あや子
命綱妻と結んだ安堵感　八郎
岩田帯結んで母になる目覚め　敏子
儲け話へ心の鬼と手を結ぶ　穏夫
責任を取らぬお方がよく喋る　風子
対戦の責任闇にされたまま　ダン吉
形式にこだわり心見失う　美子
交付金はかたちで上がる消費税　太一
それぞれの人の形がでる個性　和代
形だけ心配りののし袋　章久
美しい嘘ばかりを運ぶ北の風　美弥子
沈丁花憎い男の風の沙汰　雅文
傾いた靴でスズメが噂する　湖風
針小棒大流されていく噂　愛論
夫婦別姓愛のかたちの七変化　三重子

川柳らくだの会(鳥取)　岸本　宏章報

食い意地が味見と称し試食する　宏章
生きるのに邪魔にならない論吉様　紀子
不景気をはでに包んだクリスマス　邦昭
無農薬生きる権利は虫もある　玲子
ぴかぴかのうちは傷など目につかぬ　大鯰
テストする人生なんてありえない　清帆
保険証とメガネ大事にして生きる　せつ子
ピカピカの靴で出社の新社員　冨貴子
老い二人痴呆のテスト欠かさない　孝子
ぴかぴかに縁側を拭く心地好き　仁子

川柳塔唐津(佐賀)　仁部　四郎報

代筆の賀状に戦友の身を案じ　勝視
手の力だけは妻から認められ　蜂朗
菜の花と健脚競う南国路　實
論破した上司割勘埋めてくれ　四郎
句友との糸太からず細からず　輝夫
家事負担境界を消す老い二人　晴翠
ジャコ飯の好きな女将で島育ち　高明

岸和田川柳会(大阪)　土橋　房枝報

変人をよそおっている淋しがり　扶美代
働いてまだ働いて空を見る　ダン吉
アメリカのチェンジに日本変わるかな　東吉
リストラで妻と夫の家事チェンジ　和美
変人でなければ総理勤まらず　蛙城
縁談と聞けば仕事が好きと言い　昭
男からことわれなくて待つ返事　香代
あれば逃げ無ければ淋し娘の心理　淳風
欲得で企業縁談決まります　義泰
煽てられ寄付が目当ての名誉役　笑司
棒グラフ誉めて煽ててまた伸びる　仁緑
貴方には打ってつけよと煽てられ　珠子
上手やなついでに窓もふいといて　泰弘
煽てられまた煩悩が揺らぎ出す　守
がっちりと行かぬ世相に湧く不安　力子
がっちりの財布ゆるめてジャンボ買う　弘子
お料理かおかみ目当てかエセグルメ　俊昭
繁盛は食べほうだいにするグルメ　けい子
グルメ通案外味に疎いもの　寿海
言い分けにグルメの妻の買う土産　幸子
美食家と言われ命を削ってる　岩夫
グルメの裏に飢えで泣いてる国がある　房枝

竹原川柳会(広島)　古田　太虚報

手品師の種も仕掛もある鞄　房子
幾星霜父の鞄の泣き笑い　幸子
ふかぶかと頭を下げて持つ鞄　規代
温かさ鞄の中はお弁当　白狐
押入れのカバンにヒミツセピア色　汎美

寅さんの鞄はいつも踊ってた　力
重いのは承知女の鞄買う　笑子
思い切り笑って今年終ろうか　太虚
終りだと思う始まりだと思う　蘭幸
終らせてなるか核ゼロ願う声　笹舟
子育てが終る翼をつけかえる　比呂子
明日生きる今日をふりむく仕舞風呂　慶子
終章を飾る笑顔は取って置く　貞子
闘牛の熱い眼で克つ未来　あゆみ
体中発熱するよバチを持ち　千代美
草臥れた靴まだ履いてでる余熱　一路
熱心に漫画を読んでいる眼鏡　栄恵
裸木も根っこは熱を持っている　輝恵
熱冷まし飲ませてみるか猫の恋　敬子
どんぞこで情熱だけを抱いている　淑子
遺児五人育てた亡母は熱い人　半徳
吐く息の寒さ伝わる般若経　栄香
善と悪わたしもヒトを生きている　厚子
ふんわりとあなたを包む風になる　千枝
コーヒーを一口母に似てきたな　史子

松露川柳会(鳥取)　**小西　雄々報**

偲ぶ人ばかりが増える年の暮れ　美明
ねずみ年あっという間に十二月　三千代
昭和史の開戦かたる十二月　興
十二月こころに春の種を蒔く　裕

過ぎ去ればやっぱり早い十二月　香音
脳味噌に一喝入れた十二月　久子
呼び止めてみたい時間の十二月　智恵子
大過なく終えた一年感謝する　和代
十二月の声聞くだけで気ぜわしい　弘子
かけ足ですぎ去って行く十二月　静江
節約の技を身につけ十二月　鈴枝
どっさりと大判小判夢の中　公美枝
無器用でどっさり幸が掴めない　雄々

川柳塔なら(奈良)　**坊農　柳弘報**

倒産になるより前に店仕舞い　彰治
あやふやな雲を踏んでるプロポーズ　隆子
煩悩はあやふやな色染め上げる　カズ子
脳と足調子の合わぬ老いの日々　成子
お仕舞いは息子を祝う米朝翁　萌子
仕舞い風呂いただいている隠居です　勝弘
緞帳に古い社名が生きている　弘風
この話これでお仕舞い風の中　とし子
あやふやとしっかり者が添う夫婦　章久
玩具箱仕舞う間のない子は元気　千梢
迷い解け笑顔で開く第二章　加央里
厄介者が風と上手に戯れる　孝子
あやふやにオレオレ聞かぬ母の耳　隆盛
厄介なことは何でも妻にさす　一風
突っ込んだ首が抜けなくなっている　怜依子

あやふやをそっと見守る思いやり　ふりこ
しもときと母の匂いのする金を　真理子
格式にこだわりを持つ鯨幕　恭昌
目覚しが激しく今日の幕をあげ　比呂志
捨てられぬ一人を仕舞う奥の奥　理恵
あやふやを反省してる梅ワイン　洋子
父の幕下りて身内が駆けつける　寿美
うやむやにしておく知恵は年の功　博一
生きているあやふやな夢継ぎ足して　富子
生きた愛した岬の丘に眠りたい　のりこ
大きめの箱へ仕舞っておく私　美千子
丁寧に仕舞う恩師の走り書き　完次
あやふやな今日一日が絵にならず　弥生
厄介に首をつっ込む癖がある　朝子
転んだら転んだままでいるだるま　國治
あやふやな長い手紙を読んでいる　義
人間の余命ベールのままが良い　良一
厄介な耳が広げてゆく噂　惠美子
国の恥歴史の裏に仕舞われる　順啓
南座の幕開けを待つ冬の章　柳弘

川柳大阪(大阪)　**長井　善純報**

飽きたとは決して言わぬ議員さん　東吉
浴びるほど遊び疲れた子の寝顔　章久
秋風が吹き出す心もてあまし　柳昌
妻のする手間暇かけぬチン料理　珠生

飽きたわと次次変わるシャボン玉　楽子
女です飽きずに化粧しています　喜楽
趣味多くすべて半端で会得せず　勝弘
飽きるほど男にもてた頃がある　朝子
飽き飽きとしてきましたな麻生節　一歩
丁寧な言葉に裏もある敬語　彦太
会議より裏工作で国動く　川童
攻略にあの手この手の裏を読む　功
ヘボ将棋裏を読んでも裏かかれ　照月
不器用で裏も表もない男　信酔
万馬券裏を読み過ぎ当らない　紀雄
寝る時間短縮しても生活苦　すがお
短縮の漁火消えた原油高　和
若者を短縮雇用で使い捨て　美世子
ダイヤルは短縮だけど長電話　青道
長生きを短縮させる税負担　鉄心
太刀打ちが出来ぬ女房の記憶力　隆司
独り者酒生きがいと気勢上げ　洛酔
週休二日時短労働賃金カット　柳弘
ほらあれの言葉で通じあう二人　美花
短くも人生熱い日で終える　ダン吉
短縮の授業のあとの長い塾　五月
一言の母の助言が的を突く　善純

ローズ川柳会(兵庫)　山崎　君子報

居るだけでとげとげしさを消した母　てる
胃が傷む考え過ぎか食べすぎか　キク子
空元気そのうち本物の元気　みつ子
黙秘権行使してるも尻尾見え　藍
沈黙を解くふるさとの橋越えて　哲子
落葉踏む音のぬくもり残ってる　トミヱ
おもちゃ屋で子等の元気に染まりおり　貴代子
輪になって笑って元気光らせる　いわゑ
後期高齢忘れやすくて笑い泣き　年代
寡黙な父へまだ見守っていてね　義子
仏の日声に出さない長い祈り　君子

川柳花の輪(大阪)　妻谷　重風報

網棚に荷物忘れた終電車　音成
好きな人見つけ慌てる頬熱く　モヨノ
なりゆきで受けた仕事に四苦八苦　芽田暮
なりゆきの砥石で老人力磨く　克衛
毎日がなりゆきまかせの余生です　薫
花活けて心ときめく客を待つ　善栄
値切られた客にも愛想毎度あり　重風
客みんな帰った後の部屋寒く　泰子
しばらくは息子の家で客となる　一幸

川柳塔まつえ吟社(島根)　三島　淞丘報

拝まれて思わぬ役を引き受ける　叮紅
天も地も人も拝んで湧く力　日出子
牛の背を降りて深々参拝す　畔
初詣で今年も来たか神の声　注湖
百薬の長だと徳利拝まれる　たけし
福の神拝みたおして連れて来る　玲子
年賀状夢いっぱいに読みおえる　蘭水
切手シート位な連で年が明け　治代
子ら年始だんだん炬燵狭くなる　禮子
出す数も受ける年賀も減るばかり　政子
年賀状老いて別離の人を知る　小生
ご無沙汰を年賀で詫びる八十路坂　英子
宇宙から溢れたらしい流れ星　茂美
受話器にも笑顔溢れる友の声　ちえこ
溢れ出る蛇口の水に安堵する　邦代
合掌の中から知恵が溢れ出る　螢
うろこ雲溢れるように湧いて出る　和歌子
温泉湯溢れ女のウツ流す　房子
牛の目をのぞいてご覧君がいる　繭
動かない仔牛別れを知っている　スズコ
牛の眼に親子の別れ辛すぎる　きみえ
体温を肌で感じて乳しぼり　静恵
老いてなお赤いマントに挑む牛　桂子
じれったい牛と暮らして三十年　知恵子
年始客終えてのびのびお茶にする　幸子
ハウスからのびのび育つ苺たち　喜美子
誰もいない炬燵のびのび猫と寝る　たえこ
男のびのび女キリキリ三が日　昌枝
のびのびと歩けば人の顔が見え　紫晃

のびのびと生きよと天の声がする　淞丘

城北川柳会(大阪)　伊達　郁夫報

日が暮れて亡夫の命日今日だった　あやめ
初夢に牛を頼れと天満宮　トヨ子
職探す人には寒い寒の入り　一幸
ノンフィクションかな恋する源氏物語　喬二
平凡な夫婦心で手を繋ぐ　ひさ乃
出る釘は打たれ強いのが勝つのだな　昭子
血の通う労使関係薄れゆく　東吉
三が日計報持ち越すおつきあい　求芽
まだ少し助走に励む初茜　千歩
炬燵中足と足とが会話する　あさ子
玄関に千両さして福を呼ぶ　喜美子
ゴソゴソと動けるだけでありがとう　静枝
描いても理想はすぐに霧の中　美智子
理想とはほど遠いけどいい夫　賢子
十年記買ってもしもを考える　麗
犬好きと見たか野良犬ついて来る　萬的
真夜中の電話もしもと身構える　とし子
人前は理想の妻の仮面つけ　弘風
近く時はせめて一日違いなら　一歩
保険屋がもしもの不安衝いてくる　倫子
もしもなどないと気楽な笑い皺　郁夫
美人ではないが理想の妻でした　千里
電柱になれたらなあとふと思う　喜八郎

次の世でもしも逢うても知らん顔　順三
明日もまた豊かなビール飲めるよう　敬子(じゅんこ)
硝煙の流れぬ空を取り戻す　志華子
万人の願いに鈴が疲れてる　正
タクシーに乗るとジロリとにらまれた　修
据え膳が出たのに二日酔いだった　たもつ
人間の理想何かと問う地球　ルイ子
適齢期ないので待っているチャンス　朝子
仲直り出来たチャンスの年賀状　集一
ときめきの響きは夢を刻む音　明子
ユートピア退屈するに違いない　典子
初日の出理想に上る親子凧

むらくも川柳会(島根)　毛利　幸報

主亡くしでも表札が生きている　幸
表札がなくても届く年賀状　英男
幾星霜表札錆びて重み出る　定子
表札を背負いきれない三代目　美保
表札に生命かかわるこの世相　彰
希望持ち星降る野良で抜く大根　信夫
慰めを待つおろかさへ時雨くる　秀子
もやもやをすっきりさせる秀句でき　宣雄
せかせかと急ぐ気持ちの足の裏　喜美
老いの身はせかせかせずに丑になる　恵美子
一晩に世界せましと大恐慌　蘭水
年重ねだんだん顔が亡父に似る　俊夫

逆らった右回りの古時計　秀夫
剪定に幸せ過ぎるお茶といる　かずこ
一年ぶり筆取る賀状も数が減り　愛子
よくぞまあ出雲言葉が劇生かす　ます美
大晦日帳簿はゼロですっきりだ　注湖
夕映えの浜で校歌をなつかしむ　瑞枝

六甲川柳会(兵庫)　伊勢田　毅報

天地人にはかり知れない恩がある　楓楽
夢を追い地獄にはまるクレジット　茂
煮え切らぬ総理が持っているカード　武彦
占いを好きとでるまで繰り返す　めぐみ
新春へ未来占うカード繰る　美恵子
はじめ良し後で苦しむカード買い　忠貞
残額を頭の隅にショッピング　千賀子
ババ抜きのばばにならぬと努力中　弘子
妻が出すレッドカードになれてきた　光久
カードでは買えぬ真心さし上げる　無限
診察券確かめ医院梯子する　毅
ひらがなの優しいひびき持つ名前　春香
晴れた空君の一言響いてる　(早)孝子
どっしりとしている人だ響かない　和郎
響いてよいろんな音を出したのに　順子
優劣をひびく碁盤に聞いてみる　政一
腕の冴え津軽にひびく三味の音　基輔

定年後長い人生六合目　史郎
旧友とばったり出会いはずむ過去　繁義
ゆっくりと行く途中です米寿まで　寛子
孫の声ひびく我が家に初笑い　(小)孝子
初詣で願い一つに絞り込む　洋一
願わくば世間ばなしの出来る人　純江
自己暗示かけて今年も前向きに　淳子
数えても数えなくても歳は増え　礼甫
途中から丸が四角になる話　能子
道草を楽しんでいるランドセル　美穂
大輪のばらよお疲れ出ませんか　いわゑ
春一番楽しい話連れてくる　みつ子

川柳塔打吹(鳥取)　野口　節子報

段ボール鎧の武者行列が行く　玲坊
普段着のままで走った夜のベル　睦子
着させたい楽しみがある女の子　義人
正直に世を生き歯には衣着せぬ　重忠
年をとり母の古着が似合いだし　富恵
和服着りゃ女は皆んな美女になる　滋
毛皮着て裕福そうで家がない　久芽代
奥様がほいと差し出すものを着る　完司
チッポケな嘘を着たまま灰になる　美知江
重ね着をしてもこの世は温もらぬ　三津子
年金が安心料の命綱　孝恵
血の検査安心せよと太鼓判　善江

一歩足入れて安心する我が家　龍枝
安心を買いに人間ドック入り　玲子
着陸し笑顔の戻る空の旅　清
このままで生きて行ければ先ず安心　和子
安心だ埋蔵金は三百万　禎元
一反の畑と海の幸がある　石花菜
金がないから殺されることはない　螢
しあわせになった童話で子が眠る　くにこ
縁側で鼻提灯の婆と猫　紀美恵
遠縁が法事の時に顔合わす　京子
縁あって嫁いだ家だ我慢する　芙美子
明日に逢う約束をするいいご縁　きみ子
どう見ても絵より額縁立派です　公恵
人間界に縁あって見る花と雪　克枝
縁あって会いに来たのか冬の蝿　美代子
荒縄でがんじがらめにされた縁　芳光
私達丸いものには縁がない　たけ代
満ち潮になれば縁者がぞっくぞく　節子

岩美川柳会(鳥取)　石谷美恵子報

ほどほどにしてるあんたは進歩ない　稔
ほどほどの別嬪さんが悪魔です　蟹郎
ほどほどに箸を置かぬとまた太る　公子
ほどほどの暮しふっくら飯がたけ　一瑶
ほどほどの悩みかかえて惚けられぬ　公乃
ほどほどに暮し貸借預金なし　茶子

ほどほどの金があっても欲が出る　たぬ
ほどほどの人生だったと振り返り　一京
歳だからほどほどにねと娘の便り　よしえ
ほどほどに味が掴めずまだ迷う　菖子
いいひとと言われ関係を尊ぶ　螢
関係者装い甘い汁を吸う　圭一郎
無関係の人が余計な口を出す　美雪
罪と罰抱いて彼岸にたどりつく　忠良
水掛ける俺がいないと薔薇は枯れ　幸安
関係がないと言わせぬ保証印　雅女
淋しいね親子関係薄れぬ世　和子
表彰状より饅頭のほうがいい　完司
散らないで金賞つけた鉢の菊　重忠
賞状が大風呂敷になる話　睦子
冷蔵庫で賞味期限が過ぎてゆく　節子
テレ性で筒の中から出られない　幸枝
人生の賞味期限はわからない　清帆
遠足の日の賞品は青い空　和枝
賞状に内助の功も書いてある　かつみ
関係を知ってるあなたには弱い　美恵子

豊中もくせい川柳会(大阪)　藤井　則彦報

道路だけ出来て帰省の車だけ　啓生
レシピ見て妻はわが家の味にする　庸佑
双六の振り出しきかぬ八十五　タミ
人間国宝ひとりで居たい時もある　石舟

貧乏神と綱引きをして勝ち譲る　寅次郎
福の神そっと当ってすれ違う　野鶴
下校時の声も弾んで年新た　隆
適当に決めたことだけうまくいき　佳恵
溜った出会い私の宝だと思う　(永)玲子
いいことが続くと怖い当たり年　則彦
お宝は胸に刻んだ人の愛　巴子
保護シール貼っておきたい願いごと　堅坊
やさしい言葉耳にこだます帰り道　葉子
運の無いこぼれ種にも初日差す　十八娘
初詣で初心に帰るありがとう　早人
生真面目に歩いた靴の大欠伸　満寿巳
妻と母レシピ一緒で味違う　(岩)玲子
お宝拝見一応賞めてから本音　萬的
イケメンがあたると元気でリハビリ　都代子
三行のレシピ僕には一時間　肋骨
たっぷりのお陽様うれし冬の朝　美智代
母さんのレシピしみてる鰤大根　勇治
どことなくほっとしている帰り道　寿美子
日本語の宝を削る流行語　見清
美味かったレシピ舌にも書きました　美義
焦るまいまだ手つかずの明日がある　(久)千代
当確と言われ油断の穴に落ち　蕉子
喜怒哀楽駅から帰り道いくつ　求芽
一行詩宝のように温める　志津子
老眼にのんき眼鏡を買い足した　夢
生き様のレシピを見せる父の背な　幸雀

翠洋会(大阪)　安土　理恵報

笑い声貧乏神は遠慮する　照子
歳月を重ねて老いの笑いじわ　久峰
けんかかと思えば笑い合い夫婦　さと美
笑いの要わきまえている落語　千稍
出演者ばかり笑っているテレビ　知之
健康で幸せですと言う笑顔　志華子
お笑いが何故か可愛いオバカキャラ　叡子
赤ちゃんの笑みはママへの贈り物　尚士
下り目がパパと似ている福笑い　恭昌
満面に笑みが戻った十九歳　千歩
大声で笑い幸運呼び寄せる　みつ子
日本海平和奏でる過去未来　水昇
若い手にわたしの未来つなげます　理恵
乱気流抜ければ見えてくる未来　富子
美しい日本語未来に残したい　弘子
未来図の中にあなたの指定席　れんげ
蟹工船未来の地図を書き替える　昭義
向い側のホームに立っている未来　楓楽
Yes We can 明るい未来拓けそう　満作
情熱が空回りする喜寿迎え　正雄
時計台あり沖縄もある賀状　捷也
よい人になりますと言う二十　日の出
楽しくて老いの準備が間に合わず　晴れに傘貸し雨で返せと言うバンク　浩二
反省はしてますけれどすぐ忘れ　舞夢
若い娘の化粧お多福あめのよう　茶々
この日本チェンジする人出ぬものか　げんえい
自給自足目指す一歩はプランター　すみ子
閃いて宇宙まで行く町工場　桃花
じょうずに死なはったなと言われたい　蕉子
隠してもいつも本音が出る背中　集一

倉吉川柳会(鳥取)　竹信　照彦報

雪国の美人になろう外に出る　京子
雪掻いて大根一本抜きにゆく　萩江
除雪車よ歩道も一緒にあけてくれ　けいこ
初雪や大山の嶺頬かむり　英子
ユニークな達磨と出逢う雪の朝　秋草
八十路過ぎ雪かき無理と炬燵もり　日出子
雪の後何か良い事芽吹くかも　恭子
吹雪突き今日撞く鐘は百八つ　鬼一
トコロテン式で大臣つくる党　次男
目を突くな心配ばかりしてた親　和子
歩を突いてへぼの桂馬をからめとる　玲坊
納屋の土間竹の子伸びて天井突く　たかこ
春待てず土筆の坊や土を突く　悠子
神業か崖を突き刺す投入堂　祐子
生命は安全でした牢の中　重忠
後から来る自転車に気付かない　よしえ

天下泰平飛べない鶴を折っている　螢
世間より安全なのは家の中　泰輔
旅先で裾のほつれに安全ピン　由紀子
運転は脇目もふらず美女も無視　みちる
安全な場所に隠して度忘れし　龍枝
歳月が名前に似合う顔になる　賀寿恵
魂に名前をつける和尚さま　石花菜
息子の名語る電話と知恵比べ　風露
全国に富士と名の付く山がある　和枝
金魚にもひそかに名前つけている　瑞子
親孝行してくれそうな名前付け　勝誉
名前書く野菜に自負の生産者　喜美子
ちゃんとした名前あるのにオイと呼ぶ　康子
降る時は降るぞと雪の自己主張　照彦

川柳さんだ(兵庫)　北野　哲男報

あなたとの距離直線で計れない　晃
直線がいいと信じて来たうかつ　忠
まっすぐにハートを刺したキューピット　朋月
出来るならまっすぐ帰るふるさとへ　美紗子
ピラミッド直線がなす芸術美　順子
一つ歳とってめでたい初忘れ　千代子
やっかみも半分入った披露宴　好文
ワークシェアリングそれで良いと思ってる　二英
目出度きは順序正しく往く冥土　茂山
牛歳も元気印でまだやる気　雅司
恵まれて自分の値打ち見失う　婦美子
物忘れ神のお恵みかも知れぬ　章子
人口増双子できたという知らせ　和代
子供より親が負けん気カルタ取り　キヨミ
おめでたい男で敵はおりません　正和
粉雪舞う討入り気分のウォーキング　一泉
暖冬に吹雪くシベリア忘れかけ　哲男

富柳会(大阪)　池　森子報

下手の横好き幸せを一人占め　伸雄
ちりれんげ盛った麻婆が見栄をきり　壽峰
上を向き歩けばいつか頂上に　糺
上上の首尾を毀した針の穴　未知
鰯雲俺は春まで待つつもり　高鷲
またいつか逢えるとススキ野を別れ　晴美
写生する盆の落葉の品のよさ　千華
どの道も上には上の人が居る　七朗
責任を取って降りれば皆他人　鐘造
とりあえず小春日和を逃すまい　深雪
その上に笑顔いっぱいおまけする　恵
階段を降りる形で老いが来る　ひろし
悲も哀も連れて夕陽が降りてくる　紅紫朗
ふるさとの風に話を聞きに行く　よりこ
パプリカの赤も私も一直線　アキ
手の届く距離で遮断機降りた夢　よしみ
幕降りる時も黒子でいてくれる　澄子
幻に会いたくなって降りる駅　佳子
人間の椅子降り方の上手下手　欣之
熱燗で奴つまんだ雪男　武人
本心に上着をきせてから逢おう　奏子
秋の山神のぬり絵が降りて来た　寿之
四季の彩紡いで母の章続く　信子
絵手紙の海から風の絵をもらう　鬼焼
湯豆腐は淋し過ぎます独り膳　登子
秀句なる背後で槍のしなる音　彦次
日日が白紙のつづく日記帳　千恵子
悠久の鐘楼仰ぐ寺内町　和子
苦しくて皮のベルトをゴムに替え　淳司
目立たないように枯れ葉の自尊心　森子

岬川柳会(大阪)　八十田洞庵報

思い出も荷物に詰めてお引越し　年子
引越して肩身の狭い庭の花　令子
出来たての写真眺めている至福　茂平
手をつなぎ寝入る夫婦も夢は別　富美子
引越しで思い切り良く捨てました　とみ
他所見する男をつなぐペアルック　俶子
残生の心ふんわり書くノート　和香
紙一枚あわてて引越すサラリーマン　範子
日本に明るい暗示かけましょう　和美
山の神家の采配取りしきる　洋子
それそのあの遠くなったなァー思い出も　桜琴

江戸時代大名行列下へ下へ　圭子
頭が高い下がりおろうをしてみたい　蛙城
川沿いに休耕田の田舎町　貞夫
超ミニのギャルのパンツが気にかかる　東吉
犬の散歩忘年会の酔い残る　覚治郎
国民を煙に巻いている数字　扶美代
古日記焼いてすっきり第一歩　みやこ
煙突が無くても来てるサンタさん　禮三
老いてまだ恋をしてます五七五　利武
孟母三遷そんな時代もありました　洞庵
絵手紙でカボチャ色よく主役する　冨美
ようお参り登り下りの愛宕山　悦子

堺川柳会(大阪)　河内　月子報

失言の弾み戸惑う給付金　梓
大穴を当てた日の靴よく弾み　朋月
仮の世を愚図のテンポで楽に生き　公誠
かあちゃんがぐびりぐびりとらっぱのみ　冬虹
お年玉弾み婆ちゃん人気取る　八千代
勢いで俺がとレジへ行き　玄也
慰めた弾みで深い仲となり　時雄
飼い犬に愚痴を聞かせる楽天家　崩
相席の奇縁は神の思し召し　のん子
子を叱る弾みにパパへ流れ弾　俶子
百歳の葬儀はおめでとうが合う　みつこ
弾みからアイラブユーと言わされる　雅明
金に埋もれグッズに埋もれ楽隠居　りつえ
解決へ具体策なき拉致家族　つづや
寒椿愚痴もこぼさず落花する　千代
相席に身元素性を吐かされる　惠勇
相席の話半分聞いている　篤子
相席へしばし無言の箸となり　かりん
相席でさんざん自慢聞かされる　さくら
相席を詫びる女将の低い腰　好
弾みではすまぬ火傷をしてしまう　月子
介護兼ね愚妻と沈むランプの湯　としお
肩を組み軍歌のあとはラッパ節　唯教
快晴の群青冬をラップする　扶美代
他人さんの食べてるものが欲しくなる　半銭
金で済むならと弾みで出した金　五月
監督は愚痴をこぼさずラッパ吹く　天笑
弾みすぎどんどん悪口出てしまう　舞夢
かあちゃんを乗せてペダルの息弾む　像山
仮の世にグッバイをして楽になる　愿
ものの弾みで娶った妻と添い遂げる　進
勝つ度にグングン上るランキング　政男
こけそうになったら美女にしがみつく　雅子
相席で借りたお金を思い出し　世紀子
ドジ踏んだ話が弾むコップ酒　健吾

川柳大阪(前月分)　長井　善純報

猿チエの小細工大きな墓穴掘り　川童
半世紀おかめを拝み細工せず　彦太
細工して国産と言う輸入品　五月
細工したメールが後で足がつく　すがお
細工する臍繰り場所を変えている　紀雄
不細工な妻と連れ添い五十年　和
不器用の細工針にもからかわれ　鉄心
名人の細工が眠る東照宮　司
逆光で見るとあなたは美しい　まつお
七光り当たる子供は不幸かも　かよこ
栄光の影で水母の独り言　柳弘
子を諭す母の瞳に光るもの　いつふみ
周平を読めば必ず明かり見ゆ　勝弘
娘の顔が光る嬉しい退院日　柳昌
冬の光なんだかやさしい音がする　美花
産声が母の瞳を光らせる　芳香
月光を浴びる心が澄んでいる　朝子
努力した汗が光に変わる頃　喜楽
印ろうが芝居のケジメつけさせる　花笑
浪費ぐせケジメを付ける年金者　功
ケジメつけ朝は家族でお早うさん　楽子
甘えまい男のケジメ知っている　信酔
ボケ役にケジメがあって面白い　笑風
一流を育てる親は鬼コーチ　東吉
人生にケジメをつけたウェディング　珠生
一年のケジメで鐘が百八つ　章久
退職金なしのケジメで雇い止め　一歩

後期高齢いやでもケジメつけられる　一風
武力には厳しい九条のケジメ　善純

川柳ねやがわ(大阪)　籠島　恵子報

水槽にいるとは知らぬ桜鯛　栄二
指切りはおかっぱの頃花のころ　鈍甲
腐っても鯛でありたい父譲り　賢子
銀婚式誓いの詞書き直す　柳弘
すぐ反故にする公約の軽さかな　銀杏
幸せにすると誓ったでしょ　あなた　朝子
派遣切り錦誓った夢がある　麗
小さいので鯛は逃してあげました　たもつ
あきらめていた退院へ鯛を買う　寿子
万物が光を放つ雪化粧　郁夫
鯛よりは私に似合うみりん干し　かすみ
倒木に目覚めた新芽光ってる　茜
光る方向いて走れば迷わない　弘一
もう来ない私の今を光らせる　一風
釣れなくて市場で真鯛買ってくる　三郎
春を呼ぶ光花にも弱者にも　集一
不況にも色も変えない赤い鯛　とし子
鯛を買うお人の声が弾んでいる　恵子
また選挙鯛があちこち涙のむ　修
エビで鯛チャンス待ってる竿の先　野鶴
陽春に誓いあらたな貯金帳　ルイ子
神前の鯛しあわせそうに横たわる　亜成
床の間に鯛を寝かせて一人酒　秀雄
おばちゃんの好きな約柄光り物　仁清
若鷲の誓いもむなし知覧の碑　薫
英文の誓紙に仮名が打ってある　あさ子
勝って来るなどとは二度と誓わせぬ　じゅんこ
禁煙を誓ってからの遠い旅　博泉

エッセイ

振り込め詐欺か

中居善信

つい先日の夜の事だった、テレビを見ながらくつろいで居るとき電話が鳴った。「電話で失礼します、私は○○出版社の○○と申します、実は貴方の川柳を沢山読ませて頂きました、「役者だと言われた事のある素顔」「明日食う米なら蔵に積んである」など、とても力のある句を発表されています。そこで、実は私どもと○○新聞社の協議の中で、川柳、俳句、短歌、など短詩型の文芸作品を一部門22句を選りすぐり発表したいと思っております。つきましてはとても力のある句を発表しておられます貴方様を推薦したいと思っております」。

そこらまで聞いた頃からわたしはけらけら笑いながら応対をしていた。確かに句は間違いなく私の句であるし、自分でも自分の代表句の中に入る句だと思っている句に間違いはない。だがね、ここが引っ掛かるんです、全国で22名、??何で僕が22名の中に入るのか?。愛媛の中の22名ならいざ知らず。…

それで笑いながら「次が有るんでしょう」と水を向けると、「はい、お金の事です、お一人様9センチ×9、5センチを用意いたしております、その掲載は新聞社の広告扱いのスペースを使いますので、お一人様22万余り必要になります」との事。次を黙って聞けば良かったのですが、「あい分かった、ご辞退したい」と言ってしまったものですから、丁重に電話を切られてしまった。

真偽のほどは分からないのだが、振り込め詐欺がここまで来たのなら、少し恐い。ここまで手の混んだ詐欺をするのだろうか?。

句を読む力は相当なもの、気を付けなくてはいけない世の中になったものだ。

（特集）原稿募集

―父を語る―

六月号掲載の特集原稿を募ります。

亡父、義父、或は在世の父についての想い、エピソード、思い出等何でも結構です。同人の御応募をお待ちしています。

四百字詰め原稿用紙一枚半～二枚（六百～八百字）タイトルは別につけて下さい。

締切り　四月十五日　本社事務所宛

但し原稿の採否、添削は編集部に一任して下さい。

編集部

『川柳とは何か』―川柳の作り方と味わい方―

（復刻版）　麻生路郎著

昭和三十年十一月十五日　初版発行
平成十年七月七日　復刻版発行
定価　二〇〇〇円（送料別）

ご入用の方は事務所まで（残部少）

第111回 大阪川柳の会

日時　4月8日（水）17時開場　18時締切（席題なし）
会場　サンケイホールブリーゼ八階、八〇三
宿題と選者　△伸びる・長川　哲夫　△鍵・森　東馬　△はっきり・河内　月子　△旅・礒野いさむ
会費　千円　**出句**（2句）　**欠席投句**　4月7日まで

〒532-0025
大阪市淀川区新北野1―3―4―706
本田　智彦　宛

自費出版　川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします。

美研アート

〒530-0022　大阪市北区浪花町9番4号
TEL（06）6372－1178
FAX（06）6372－1196
E-mail：bikenart@wonder.ocn.ne.jp

柳界展望

福袋の少し小さい服を着る　小島　蘭幸

○「凛」創立十周年記念大会は1月25日京都市生涯学習センター「アスニー」にて開催、参加170人。同人の秀句

何の鍵だかねんごろに供養する　播本　充子

○南大阪川柳会20年度年間賞受賞者　西出　楓楽

○京都塔の会年間最優秀賞受賞　高島　啓子

年間多得点賞①山田葉子、②高島啓子、③桝本宏子、④山本昌乃・藤井則彦、⑤都倉求芽・三宅満子

○西宮北口川柳会、平成20年度年間賞は次の通り。（カップ永久保持者）黒田能子　（優秀賞）①西口いわを②河原野折杭③山口光久④山田耕治・亀岡哲子⑤黒田能子

○城北川柳会、平成20年度年間賞は津村志華子さんに決定。

○川柳ねやがわ、20年度年間賞は角野仁清氏が獲得。

▽出　版△

○早川遡行氏（同人・愛知県）は川柳句集『独標』を上梓。A5判変型。291頁。句集紹介は90頁。

▼訃　報▲

●小林トメ子さん（同人・大阪市）20年11月30日逝去。94歳（追悼92頁）

●井丸マサ美さん（理事・井丸昌紀氏の母）1月23日逝去。79歳

▽訂正とお詫び△

○1月号37頁下段15行目、ドリンクの中にもやはり有る格差→ドングリの中にもやはり有る格差　27頁上段23行目、株安も円高もない江戸に住み→株安も円高もない**井戸**に住み　150頁、年賀広告井上照子さんの住所、松が丘1—18—2—206→松が丘2—6—24

▽新誌友紹介△

岩出市　紹介者　川上　大輪

松江市　紹介者　松本智恵子

和歌山市　紹介者　木本　朱夏

大阪市　紹介者　松尾美智代

千葉市　**東　志郎**

野田市　**高橋　保雄**

奈良県　**谷川　憲司**

八王子市　**上原　稔**

茨城県　**吉成　ます**

広島県　**藤解　静風**

常任理事会＝2月9日㈪出席19名①川柳塔誌創刊1000号記念行事について（開催日の検討、記念出版物について）②常任理事の各地句会担当制について③大阪川柳大会会計報告④定例確認事項⑤各部報告事項⑥次月審議事項　次回3月9日㈪4時半

川柳塔誌は波屋書房、天牛書店、西宮ジュンク堂にて販売取り扱いをしています。

新同人紹介

伊藤博仁（いとうはくじ）

—天笑・月子・満作・ふりこ推薦

紹介者㊨4名穴吹尚士

句会名	日時と題	会場と投句先
岬川柳会	15日(日)午後1時半締切 着飾る・素直・気まま	(淡輪17区集会所) 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川柳藤井寺	15日(日)午後2時締切 人形・飴・席題	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
豊中もくせい川柳会	16日(月)午後1時50分締切 比べる・邪魔・あっさり 自由吟	豊中市中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2—8—4 江見見清
川柳さんだ	17日(火)午後1時から 膳・再会・しつけ・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5—2—4 堀 正和
岸和田川柳会	21日(土)午後1時半締切 血縁・志す・ささやか シーフード	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
はびきの市民川柳会	**22日(日) 吟 行** 当日雑感・ヨガ・「渡す」	〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11 塩満 敏
川柳ふうもん吟社	22日(日)午後1時より 誘ってよ・セクシー・反則	鳥取駅シャミネホール 〒680-0872 鳥取市宮長205—45 萩原美雪
南大阪川柳会	23日(月)午後6時から 本音・詰める・つつく・コンビ	住まい情報センター(大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
松露川柳会	23日(月)午後7時半締切 愉快・遊び・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
川柳クラブわたの花	27日(金)午前9時半から 公認・期待・舌・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
川柳塔すみよし	28日(土)午後2時半締切 飛ぶ・白・水	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉3-16-8-206 鶴田遠野
和歌山幸三川柳会	28日(土)午後1時から 斜め・ふところ・あいまい	和歌山市商工会議所4F 第2会議室 〒640-8111 和歌山市新通7—17 古久保和子
東大阪市川柳同好会	28日(土)午後7時締切 屋台・ゆっくり・恵み・欲	東大阪市立社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3—3—21 片岡湖風
京都塔の会	30日(月)午後2時締切 そろそろ・浮く・応援	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328—202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

3月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　ら	5日(木)午後1時開場 揺れる・耳・気品	奈良市立中部公民館４Ｆ　近鉄奈良駅④番出口 〒634-0812 橿原市今井町２―１―24―901 安土理恵
富柳会	7日(土)午後1時から 含・狙う・自由吟	富田林市中央公民館 （近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m） 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10　池　森子
城北 川柳会	7日(土)午後1時開場 色気・長い・アリバイ・自由吟	旭区老人福祉センター３Ｆ 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
倉吉 川柳会	7日(土)午後2時締切 メリハリ・宿・車	倉吉市　明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
八尾市民 川柳会	8日(日)午後2時締切 魅力・震える・ほのぼの・雑詠	八尾市民活動支援センターネットワーク ℡ 072－928－3848 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川柳塔 わかやま 吟社	8日(日)午後1時開場 告げる・気楽・ひろびろ らしい	近鉄カルチャーセンター２Ｆ　JR和歌山駅前 〒640-8482 和歌山市六十谷1188―14 川上大輪
西宮北口 川柳会	9日(月)午後1時開場 茎・切る・とうとう・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分　プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町２―19―515　山本義子
尼崎 尾浜 川柳会	10日(火)午後2時締切 苦手・追う・まんじゅう 自由吟	尼崎市女性センター　トレピエ　阪急武庫之荘駅南へ200m 事務局 〒661-0953 尼崎市東園田町２-45-８　山田耕治
ほたる 川柳 同好会	10日(火)午後1時半締切 リズム・招く・ややこしい	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール　蛍池駅駅前ビル５Ｆ 〒561-0813 豊中市小曽根2―4―1　水野黒兎
堺川柳会	14日(土)午後1時から 生意気・華やぐ・みのり	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3　河内天笑
川柳大阪	14日(土)午後1時から 許す・薬・意外	地下鉄御堂筋線天王寺駅「東研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14　長井善純
川柳塔 打吹	14日(土)午後1時から 裏・卒業・探す	倉吉市上灘町９　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637―３　牧野芳光
川柳塔 まつえ	14日(土)午後2時締切 母・誇り・発つ・リズム	松江市西津田　松江総合文化センター 〒690-0056 松江市雑賀町1388　安達幸子
川柳塔 みちのく	14日(土)午後5時締切 卒業・秘密・にぎやか	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ１階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53―１　小寺花峯
川柳 ねやがわ	15日(日)午後1時半締切 梅・洗う・そろそろ・自由吟	寝屋川市立総合センター　４Ｆ 〒572-0063 寝屋川市春日町９―９　高田博泉

編集後記

☆檸檬抄にはいつもたくさんの投句をいただき有難うございます。選者両名はうれしい悲鳴をあげている次第です。

没にする句の多さに胸を痛めている選者の要請を容れ、3月号より入選句数をふやすことにしました。17年9月号から掲載の始まった檸檬抄はまだまだ試行錯誤の段階にあります。後半期からとなりましたが、入選を40句から60句としました。これからもよろしくお願い致します。

また各地柳壇には、各地句会所在府県名をいれることにしました。

☆大正13年2月『川柳雑誌』としてスタートした『川柳塔』誌は平成22年9月号を以って一〇〇〇号となり記念の大会に向けて始動しています。今秋の塔寿85周年記念大会と共によろしくお願い致します。

☆わたくし事ながら、この欄にも時々書かせていただいていた母が満百歳の誕生日を目前に、1月6日他界致しました。

別れは必然、そしてその時は突然という現実を忘れかけていた迂闊さを悔いています。（希）

◇平成二十年を振り返ってみると腹の立つことが余りにも多すぎる。

◇大発会で戦後最大の下げ幅で幕を開けた株式市場は十月にはバブル崩壊後の最安値を更新した。

◇食への不安は納まる気配がない。怒り心頭である。中国製ギョーザ中毒事件については未だに真相が究明されていない。「メラミン」が混入した乳製品、メタミドホスやカビ毒に汚染された事故米と続き、更にウナギの産地偽装表示等々と次から次へ、下々は何を信じたらよいのだろうか。

◇時どき豆腐を買いにスーパーへ行くが、国産大豆百パーセント使用とある。果たして信じていいのか。

◇今年の大発会は大幅高でスタートした。何かよい事がありそう、と期待しているのは僕だけか。（光）

○二年に一回、同人名簿を改訂しています。24ヶ月間の修正は相当の量になるので、間違わぬよう3ヶ月毎に印刷所の原版に手を加えています。

○平成も二十年代になりますと、昭和のはるか昔からの古い同人のご逝去や、高齢による退会が目立ちます。現役を終えて川柳の道に入った初心の頃に、助言・指導を頂いた先輩のお名前が消えていくことに、一抹の寂しさは隠せません。

○しかし一方では、現役を退かれた方、子育てを終えられた方が誌友になり、更に同人になって、塔を賑わせて頂いています。この新しい力を「川柳塔」の名のもとにどう結集していくかが課題でしょう。

○同人名簿の修正は五月末が締切です。詳しくは塔誌の案内を参照下さい。（尚）

ひととひと

川柳とのかかわり

浄土真宗の月刊誌で選者、時実新子氏の「川柳御堂クラブ」に出合った。盆に会った母を思い出し「盆に見た母は仏のようだった」を投句し入選したのは、平成九年十二月。その時の感激が元で投句するようになった。

平成十一年四月、小林周信氏（故人）の勧めで川柳塔社入会、初歩教室では、吐田公一、三宅保州両師の懇切なご指導を戴いた。

周信・玄也・公誠三氏が発起人となってシャープ社友会に「そうりゅう会」が誕生したのは、同年六月である。

玄也氏の勧めでエイシス堺、堺川柳会に入会したのは平成十四年、天笑主幹の直々の御指導を仰ぐこととなった。

こんなに面白い遊びをわが校区文化教室に作りたいと思い、近くにお住まいの矢倉五月氏に無理に講師をお願いし、川柳教室を発足したのが平成十九年四月である。

川柳を通じて、多くの師や先輩に恵まれて来たのであるが、吸収より忘れるほうが早い年頃になって悩んでいる。（荻野　像山）

川柳塔（同人）・水煙抄（誌友）投句用紙

種目「　　」発表（**5月号**）地名

都道府県
市　姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友　マルで囲んでください。

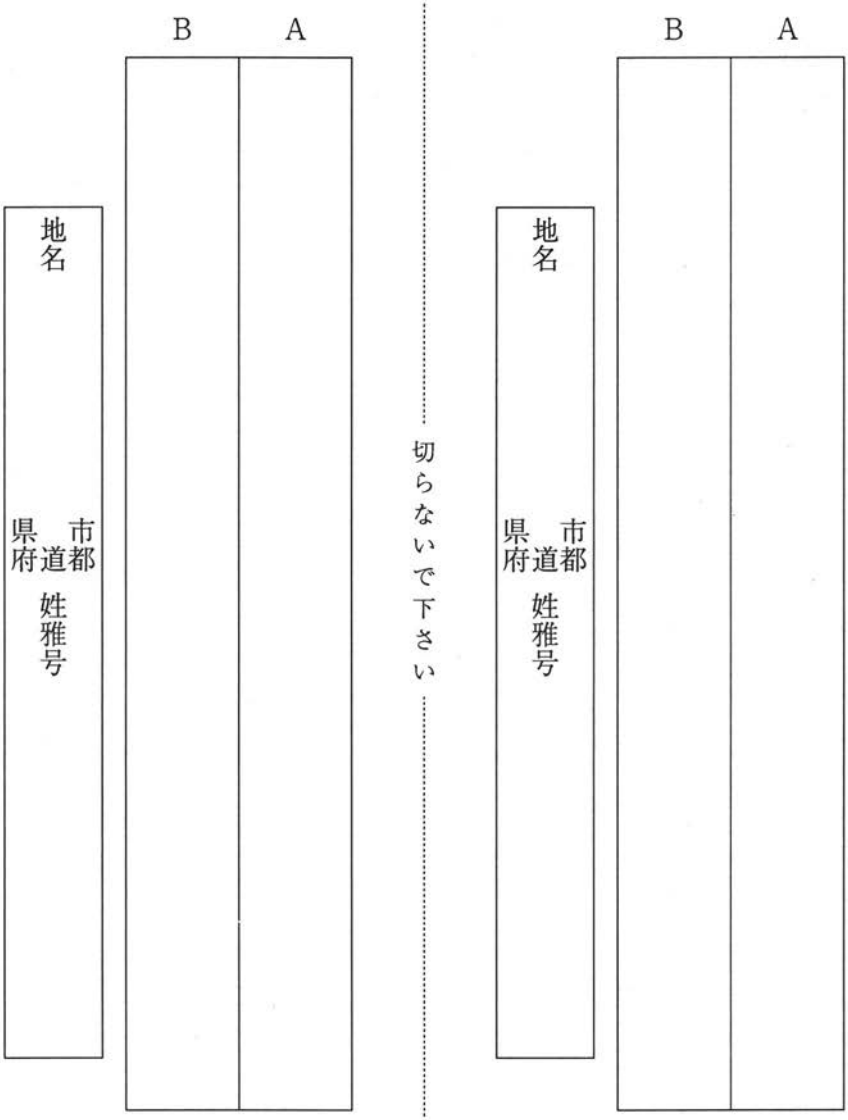
投句先　〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「 緑 」 （3月15日締切）

5月号発表

木本　朱夏　選 ―― 共選 ―― 髙瀬　霜石　選



左右に同じ句を書いて下さい

川柳塔誌**新規**購読申込書

年　月　日

氏名		
住所	〒 —	
電話	— —	
紹介者		

○　年　月から半年　5000円
○　年　月から一年　9800円

該当の方に○をつけて下さい

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

〒543-0052
大阪市天王寺区大道1丁目14番17号　花野ビル201
川柳塔社（電話　06—6779—3490）
振替　00980—4—298479

本社３月句会

とき　３月９日(月)　午後１時開場・２時締切り
―開催時間、締切り時間にご注意下さい。
ところ　アウィーナ大阪　４階　金剛
天王寺区石ケ辻町19―12　電06・6772・1441
おはなし「呆け防止と川柳」　伊達郁夫
席題「　　」　大内朝子選
兼題「隣」　森村美花選
「ベール」　志田千代選
「手ぶら」　板東倫子選
「明日」　山本希久子選
「気合」　河内天笑選
（各題２句以内）
会費　１０００円　投句料　５００円（切手可）

本社４月句会

７日(火)　午後１時から
兼題「　黄　」「吊　る」「気まずい」
「智　恵」「無　料」

作品募集

５月号発表（３月15日締切）

川柳塔（８句）　河内天笑選
水煙抄（８句）　小島蘭幸選
愛染帖（３句）　新家完司選
檸檬抄「緑」（２句）　高瀬霜石共選
木本朱夏
一路集（３句）　小西雄々選
「雲」
「リボン」　矢倉五月選
「楽器」　平尾菜美選
初歩教室「セールス」（３句）　鈴木公弘担当

６月号

檸檬抄「ゼ　ロ」
一路集「細　い」「いつも」「レンズ」
初歩教室「　涙　」

「川柳塔」への投句について

(1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
(2)愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
(3)各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
(4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

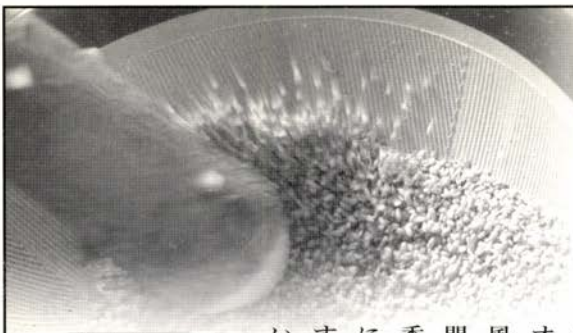
第27年度　夜市川柳募集

第10回「癖」　森中惠美子選
ハガキに３句　**３月末日**締切
投句先　〒593-8305　堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方　**堺川柳会**

定価　八百円（送料76円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）
二〇〇九年（平成二十一年）三月一日発行
発行人　河内權治
編集人　山本希久子
印刷所　美研アート
〒543-0052
大阪市天王寺区大道一―一四―一七　花野ビル２０１号室
発行所　川柳塔社
電話（〇六）六七七九―三四九〇番
振替〇〇九八〇―四―二九八四七九番

ホームページアドレス　http://www.senryutou.join-us.jp/

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成二十一年三月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻九八二号　柳塔　三月号
定価　八百円（送料　七十六円）



オニザキの
すりごま

自宅の台所で始めた手洗いのごま加工・販売から50年。
オニザキでは、手作りの風味にこだわり、独自に開発した製法で、ごまの香りと味わいを最大限に引き出し、美味しいすりごまを作り続けています。

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL（フリーダイヤル）0120-30-5050

医療法人社団
湯川胃腸病院
・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得
健康保険取扱　看護２A・緩和ケア病棟
・消化器科・内科・外科
・放射線科・ホスピス
・デイサービスセンター
診療時間
月～金　8:30～16:00
土　8:30～11:00
JR桃谷駅徒歩3分
http://www.yukawa.or.jp
電話 大阪(06) 6771-4861(代)

雑誌　05703－3